

科目名：	医事法政策演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	森田 果	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
単位数：		週間授業回数：	1回毎週
配当学年：	-	対象学年：	-
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

vldszer

実施方法： in person

1. 授業題目：

Seminar on Medical Law and Policy

2. 授業の目的と概要：

Medical law and policy heavily rely on the understanding of epidemiology. This seminar focuses on epidemiology and data analysis techniques.

3. 学習の到達目標：

An understanding of epidemiology and data science will help you design socially desirable medical law and policy.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

In each meeting, a designated participant(s) needs to sum up and present the contents of the reading assignment of the week.

After her presentation, all the participants discuss the issue of the week.

The issues to be discussed are listed in the following textbooks.

5. 成績評価方法：

Class participation 100%

6. 教科書および参考書：

Tetatively, we are planning to use the followings:

坪野吉孝『疫学：新型コロナ論文で学ぶ基礎と応用』勁草書房，2021年

西浦博『感染症疫学のためのデータ分析入門』金芳堂，2021年

7. 授業時間外学習：

Each participant is required to read the reading assignment of the week.

8. その他：

科目名：	アジア政治経済論演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	岡部 恭宜	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom : pso5dz5

Meet : <https://meet.google.com/izd-kppz-fwp>

実施方法： ハイブリッド方式を予定していますが、感染状況によって変更もあります。まずは Google Classroom に登録して担当教員からの連絡を待って下さい。

ハイブリッドで実施する場合、対面希望者は教室で、オンライン希望者は下記の Meet で、それぞれ参加して下さい。

1. 授業題目：

持続可能な権威主義体制？

2. 授業の目的と概要：

世界では民主化の第三の波以降、民主主義体制は思ったほど増加せず、むしろ権威主義体制を維持している国々が数多く見られます。権威主義体制といっても様々で、アジアとラテンアメリカに限ってみても、ミャンマーやタイのように軍部が政権を握っている国がある一方で、選挙を実施しているマレーシアのような国もあります。また、フィリピンやベネズエラのように政治指導者が強権政治を行い、権威主義的な傾向を示す国もあります。中国、ベトナム、キューバでは共産党が長期にわたって政権を握っています。

他方、権威主義体制の国々は政策パフォーマンスにおいて民主主義体制よりも優れているという議論が昔からあります。例えば、1980年代、90年代は権威主義体制の国の方が経済成長率が高いという議論（開発独裁論）がありましたし、最近ではコロナ禍において権威主義国の方が感染症対策に成功しているという見方も一部であります。

この演習では、主に比較政治学の文献を読むことで、権威主義体制とは何か、なぜ多くの国々で持続しているのか、政治体制は政策のパフォーマンスにどのように影響するのか、体制変化（民主化または権威主義化）が起こるのはどのような条件の時に、等の問題について考えていきます。対象とする国は主にアジア諸国ですが、ラテンアメリカも一部取り上げます。

受講生の皆さんには、学術論文や研究書を読むことによって、政治学の問題の立て方、分析方法、議論の仕方を知り、学んで欲しいと思います。また、自分が何か研究を行おうとする場合、既存の研究の内容や動向を知らなければ、学問上の貢献をすることはできません。講義や教科書で勉強するだけでは見えない、その先の風景を覗いてみたい学生の参加を歓迎します。

3. 学習の到達目標：

- ① 日本語や英語で書かれた社会科学の文献を正確に理解し、かつ適切に評価、批判する能力を養います。
- ② 比較政治学や政治経済学の理論や議論を把握し、現実問題に適用する視点を養います。
- ③ 諸外国の政治、経済、社会、国際関係における様々な問題の実態や歴史を知り、理解を深めます。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

- 課題文献として以下を検討していますが、詳細は初回の授業で提示します。受講生の皆さんには、2週間毎に読書レポート（日本語）を授業前に提出してもらいます。授業では、各自が提出したレポートを踏まえて議論をします。

* エリカ・フランツ、2021年『権威主義—独裁政治の歴史と変貌』白水社

* Levitsky, Steven and Lucan A. Way. 2010. *Competitive Authoritarianism: Hybrid Regimes after the Cold War*. New York: Cambridge University Press.

* 日本比較政治学会編、2020年『民主主義の脆弱性と権威主義の強靱性』日本比較政治学会年報第22号、ミネルヴァ書房。

* 川中豪編、2018年『後退する民主主義、強化される権威主義—最良の政治制度とは何か』ミネルヴァ書房。

* 外山文子編、2018年『21世紀東南アジアの強権政治—「ストロングマン」時代の到来』明石書店。

* 高橋徹、2015年『タイ 混迷からの脱出—繰り返すクーデター・迫る中進国の罫』日本経済新聞出版。

* Prajak Kongkirati, 2019, "From Illiberal Democracy to Military Authoritarianism: Intra-Elite Struggle and Mass-Based Conflict in Deeply Polarized Thailand," *The ANNALS of the American Academy of Political and Social Science*, 681(1).

* Paul Chambers & Napisa Waitoolkiat, 2016, "The resilience of monarchised military in Thailand," *Journal of Contemporary Asia*, 46(3).

* 坂口安紀、2021年『ベネズエラ—溶解する民主主義、破綻する経済』中公選書。

● 15回の進度予定は次の通り（変更はありえます）。

① 授業案内

②③ 課題文献 1（以下、具体的な文献の順番は初回に指示します）

④⑤ 課題文献 2

⑥⑦ 課題文献 3

⑧⑨ 課題文献 4

⑩⑪ 課題文献 5

⑫⑬ 課題文献 6

⑭⑮ 課題文献 7

5. 成績評価方法：

読書レポートの提出、そのコメント・批判の内容と、議論への参加を評価します。

なお、欠席は2回まで認めますが（3回以上は単位なし）、それも、やむを得ない事情であり、事前に連絡してきた場合に限りです。

6. 教科書および参考書：

課題文献以外は特になし。

7. 授業時間外学習：

課題文献の読書とレポートの執筆。

8. その他：

初回の授業で、授業案内を詳しく行うので、履修希望者は必ず出席して下さい。なお、この演習は学部（3,4年生）、研究大学院、公共政策大学院の合同授業とします。

This course teaches political economy of Asia and covers the fundamental and thorough principles of comparative politics and political economy. The detailed understanding of political economy of Asia is desirable for careers in public/NPO services and private business.

科目名：	アジア政治経済論演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	岡部 恭宜	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom コード：3cawrjw

Meet：https://meet.google.com/fji-dbek-ypy

実施方法：ハイブリッド方式を予定していますが、感染状況によって変更もあります。まずは Google Classroom に登録して担当教員からの連絡を待って下さい。

ハイブリッドで実施する場合、対面希望者は教室で、オンライン希望者は下記の Meet で、それぞれ参加して下さい。

1. 授業題目：

開発のグローバルヒストリー

2. 授業の目的と概要：

21世紀になって開発および開発協力（援助）の歴史研究が世界で盛んになってきました。研究対象の中心は例に漏れず欧米諸国ですが、最近では日本の開発協力の歴史を見直す動きも盛んです。この演習では、日本の開発協力の歴史に関する最新の研究に触れると同時に、比較の観点から欧米の開発援助史の研究にも焦点を当てます。また、途上国同士で行われる「南南協力」や、市民が主体となる国際ボランティア活動も取り上げることで、開発のグローバルヒストリーに接近したいと思います。

受講生の皆さんには、学術論文や研究書を読むことによって、比較政治学、国際政治経済学、歴史学における問題の立て方、分析方法、議論の仕方を知り、学んで欲しいと思います。また、自分が何か研究を行おうとする場合、既存の研究の内容や動向を知らなければ、学問上の貢献をすることはできません。講義や教科書で勉強するだけでは見えない、その先の風景を覗いてみたい学生の参加を歓迎します。

3. 学習の到達目標：

- ① 日本語や英語で書かれた社会科学の文献を正確に理解し、かつ適切に評価、批判する能力を養います。
- ② 比較政治学、国際政治経済学、歴史学の理論や議論を把握し、現実問題に適用する視点を養います。
- ③ 諸外国の政治、経済、社会、国際関係における様々な問題の実態や歴史を知り、理解を深めます。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

● 課題文献として例えば以下の文献を検討していますが、詳細は初回の授業で提示します。受講生の皆さんには、2週間毎に読書レポート（日本語）を授業前に提出してもらいます。授業では、各自が提出したレポートを踏まえて議論をします。

- ・ 下村恭民、2020年『日本型開発協力の形成——政策史1・1980年代まで』東京大学出版会。
- ・ 山田順一、2021年『インフラ協力の歩み——自助努力支援というメッセージ』東京大学出版会。
- ・ 佐藤仁、2021年『開発協力のつくられ方——自立と依存の生態史』東京大学出版会。
- ・ 荒木光弥（末廣昭ほか編）、2020年『国際協力の戦後史』東洋経済新報社。
- ・ プロジェクト・ヒストリーの書籍
- ・ Jon Pierre, ed. 2015. *The Oxford Handbook of Swedish Politics*, Oxford University Press. [Ch. 32, 34]
- ・ Carol Lancaster, 2006, *Foreign Aid: Diplomacy, Development, Domestic Policies*, University of Chicago Press.
- ・ Marc Frey, 2003, "Control, Legitimacy, and the Securing of Interests: European Development Policy in South-east Asia from the Late Colonial Period to the Early 1960s" *Contemporary European History* 12 (4).
- ・ Jim Tomlinson, 2003, "The Commonwealth, the Balance of Payments and the Politics of International Poverty: British Aid Policy, 1958–1971," *Contemporary European History* 12 (4).
- ・ Marc Frey and Sonke Kunkel, 2011, "Writing the History of Development: A Review of the Recent Literature," *Contemporary European History*, 20 (2).
- ・ Peter Kragelund. 2019. *South-South Development*. Routledge.
- ・ 岡部恭宜編、2018年『青年海外協力隊は何をもたらしたか——開発協力とグローバル人材育成 50年の成果』ミネルヴァ書房。
- ・ Sobocinska, A. (2017). How to win friends and influence nations: The international history of Development Volunteering. *Journal of Global History*, 12(1).

● 15回の進度予定は次の通り（変更はありえます）。

① 授業案内

②③ 課題文献 1 (以下、具体的な文献の順番は初回に指示します)

④⑤ 課題文献 2

⑥⑦ 課題文献 3

⑧⑨ 課題文献 4

⑩⑪ 課題文献 5

⑫⑬ 課題文献 6

⑭⑮ 課題文献 7

5. 成績評価方法：

読書レポートの提出、そのコメント・批判の内容と、議論への参加を評価します。

なお、欠席は2回まで認めますが(3回以上は単位なし)、それも、やむを得ない事情であり、事前に連絡してきた場合に限りです。

6. 教科書および参考書：

課題文献以外は特になし。

7. 授業時間外学習：

課題文献の読書とレポートの執筆。

8. その他：

初回の授業で、授業案内を詳しく行うので、履修希望者は必ず出席して下さい。なお、この演習は学部(3,4年生)、研究大学院、公共政策大学院の合同授業とします。

This course teaches political economy of Asia and covers the fundamental and thorough principles of comparative politics and political economy. The detailed understanding of political economy of Asia is desirable for careers in public/NPO services and private business.

科目名： 開発協力論演習	科目区分： 大学院科目
担当教員： 岡部 恭宜	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： 日本語
配当学年： -	対象学年： -
	単位数： 2
	週間授業回数： 1回毎週
	実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom： smcxvps

Meet： <https://meet.google.com/vvz-ntzk-ohy>

実施方法： ハイブリッド方式を予定していますが、感染状況によって変更もあります。まずは Google Classroom に登録して担当教員からの連絡を待って下さい。

ハイブリッドで実施する場合、対面希望者は教室で、オンライン希望者は下記の Meet で、それぞれ参加して下さい。

1. 授業題目：

日本の開発協力（援助）の多角的考察

2. 授業の目的と概要：

日本の開発協力（政府開発援助, ODA）は、「第二次世界大戦後の日本の外交政策の主要で、おそらくは最も重要な手段」と言われていますが、その評価は様々です。本演習では、政治経済学や国際政治学を中心に、さらには開発経済学、社会学、文化人類学の立場から、日本の国際協力（援助）について、その政策決定、役割、効果といった面に焦点を当てて考察します。日本の援助だけでなく、途上国の開発問題、日本外交、世界における日本の役割について考えたい学生を歓迎します。

授業では、全員が課題文献を読み、事前にレポートを提出した上で、文献の内容について議論するという形を取ります。

3. 学習の到達目標：

- ① 日本語で書かれた社会科学の文献を正確に理解し、かつ適切に評価、批判する能力を養います。
- ② 政治経済学や国際政治学、さらには隣接する社会科学の理論や議論を把握し、現実問題に適用する視点を養います。
- ③ 途上国の開発問題および日本政府の援助の実態を理解し、理解を深めます。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

- 以下の文献から複数を選択して読みます。受講生の皆さんには、2週間毎に読書レポート（日本語）を授業前に提出してもらい、授業では、各自が提出したレポートを踏まえて議論をします。

* 西垣昭、下村恭民、辻一人、2009年『開発援助の経済学——「共生の世界」と日本のODA（第4版）』有斐閣。

* JICA 研究所『プロジェクト・ヒストリー』シリーズ、ダイヤモンド社／佐伯印刷。

- 屋根もない、家もない、でも、希望を胸に：フィリピン巨大台風ヨランダからの復興
- 中米の子どもたちに算数・数学の学力向上を：教科書開発を通じた国際協力30年の軌跡
- いのちの水をバングラデシュに：砒素がくれた贈りもの
- プノンペンの奇跡：世界を驚かせたカンボジアの水道改革
- クリーンダッカ・プロジェクト：ゴミ問題への取り組みがもたらした社会変容の記録
- 西アフリカの教育を変えた日本発の技術協力：ニジェールで花開いた「みんなの学校プロジェクト」の歩み
- 中米の知られざる風土病「シャーガス病」克服への道：貧困の村を襲う昆虫サンガメの駆除に挑んだ国際プロジェクト
- マダム、これが俺たちのメトロだ！：インドで地下鉄整備に挑む女性土木技術者の奮闘記：ヒューマンヒストリー

* ウィリアム・イースタリー、2009年『傲慢な援助』東洋経済新報社。

* ジェフリー・サックス、2014年『貧困の終焉——2025年までに世界を変える』ハヤカワ文庫。

* 紀谷昌彦、山形辰史、2019年『私たちが国際協力する理由——人道と国益の向こう側』日本評論社。

* 川喜田二郎、1974年『海外協力の哲学』中公新書。

* 中根千枝、1978年『日本人の可能性と限界』講談社。

* 岡部恭宜編、2018年『青年海外協力隊は何をもたらしたか——開発協力とグローバル人材育成50年の成果』ミネルヴァ書房。

- 15回の進度予定は次の通り（変更はありえます）。

- ① 授業案内、基礎的な講義
- ②③ 課題文献1（以下、具体的な文献の順番は初回に指示します）
- ④⑤ 課題文献2

- ⑥⑦ 課題文献 3
- ⑧⑨ 課題文献 4
- ⑩⑪ 課題文献 5
- ⑫⑬ 課題文献 6
- ⑭⑮ 課題文献 7

5. 成績評価方法：

読書レポートの提出、その内容、議論への参加を評価します。

欠席は2回まで認めますが（3回以上は単位なし）、それも、やむを得ない事情であり、事前に連絡してきた場合に限りです。

6. 教科書および参考書：

課題文献以外なし。

7. 授業時間外学習：

課題文献の読書およびレポートの執筆。

8. その他：

初回の授業で、授業案内を詳しく行うので、履修希望者は必ず出席して下さい。なお、本演習は研究大学院、公共政策大学院、学部の合同授業とします。

This course teaches development cooperation and covers the fundamental and thorough principles of development aid policies. The detailed understanding of development cooperation is necessary for careers in public/NPO/voluntary services.

科目名：	民事手続法	科目区分：	大学院科目
担当教員：	今津 綾子	開講期：	2022
授業形態：	講義	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：
 クラスコード wsasrhp

質問等は、授業の前後又は google classroom 上で受け付ける。

実施方法： 対面

1. 授業題目：
民事手続法
2. 授業の目的と概要：
ドイツの民事訴訟法(ZPO)に関する特定の文献を講読することを通じて、わが国の民事訴訟法の母法である ZPO に関する基本的な知識を得るとともに、現在の議論状況を理解する。

The objectives of this course is to read the German text and grasp the outline of Civil Procedure Law in Germany.
3. 学習の到達目標：
ドイツの民事訴訟法学に関する基礎的知識を涵養するとともに、それを踏まえてわが国の民事訴訟法学におけるさまざまな議論に対する理解を深める。
4. 授業の内容・方法と進度予定：
参加者のうちから担当者を決め、指定されたドイツ語文献を講読する。
報告の内容にもとづいて、参加者と討論をおこなう。
5. 成績評価方法：
出席状況、議論への参加状況などを総合的に評価する。
6. 教科書および参考書：
授業中に指示します。
7. 授業時間外学習：
事前に教科書の指定された範囲を読解し、各回ごとに討論の準備をして授業に臨むこと。
8. その他：

科目名： 経済法	科目区分： 大学院科目
担当教員： 滝澤 紗矢子	開講期： 2022
授業形態： 講義	使用言語： 日本語
配当学年： -	対象学年： -
	単位数： 4
	週間授業回数： 2回毎週
	実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：43jmwhv Google classroom のコメント機能を通じて随時連絡を受け付ける。また、授業の進度に応じてオンライン（リアルタイム）で質問等を受け付ける機会を設ける。対面授業の場合には、授業の前後に担当教員に直接行うこともできる。

実施方法： 講義室が使えるようになるまでは、オンライン（オンデマンド）を中心に授業を進めつつ、オンライン（リアルタイム）で質問を受け付ける機会を設ける。講義室が使えるようになり次第、対面を中心として一部オンライン（オンデマンド）を併用して授業を進める。

1. 授業題目：

経済法

2. 授業の目的と概要：

日本における競争法・政策の基本を理解し、これについて論理的に思考できるようになることを目的とする。主に講義対象とする法律は、独禁法である。

This course teaches Competition Law and Policy which covers the fundamental and thorough principles of Antimonopoly Law in Japan.

3. 学習の到達目標：

独禁法の基礎と思考方法を体系的に習得する。

競争政策の現代的課題についても論理的に思考できるようになる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

I. 違反要件

1. 弊害要件総論

- ① 市場（1～3回）
- ② 反競争性（4～5回）
- ③ 正当化理由（6回）

2. 各違反類型

- ① 不当な取引制限（7～12回）
- ② 不公正な取引方法・私的独占（13～19回）
- ③ 事業者団体規制（20回）
- ④ 企業結合規制（21～23回）

3. 違反要件のその他の問題（国際事件等）（24回）

II. エンフォースメント

1. 公取委による事件処理（25～27回）

2. 刑罰（28回）

3. 民事訴訟（29回）

○ 総括と試験（30回）

5. 成績評価方法：

期末筆記試験による(期末筆記試験が行えない場合には、期末レポートとする。その場合には、授業期間中に中間レポートを課すので、当該課題提出者のみに、期末レポート提出を認める予定である)。

6. 教科書および参考書：

教科書： 白石忠志『独禁法講義（第9版）』（有斐閣）

参考書： 白石忠志『独占禁止法（第3版）』（有斐閣）
白石忠志『独禁法事例集』（有斐閣）

大久保ほか編『ケーススタディ経済法』（有斐閣）

7. 授業時間外学習：

授業時に次回の授業で扱う内容及び予習範囲を指示する。授業前には、該当範囲の教科書を読んてくること。
授業後は、授業内容を復習し、参考書で理解を深めること。

8. その他：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。
オンライン（オンデマンド）講義は、Google classroom で配信する。

科目名：	西洋法制史特論Ⅰ（イングランド法制史）	科目区分：	大学院科目
担当教員：	大内 孝	開講期：	2022
授業形態：	講義	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom 上にて連絡する。クラスコードは gutak6r

実施方法： 対面の予定だが、下記「その他」に注意すること。

1. 授業題目：

イングランド法制史

2. 授業の目的と概要：

以下の2点に焦点を絞って、イングランド法制史を略説する。

1. コモン・ローの形成
2. コモン・ローの近代化

本講義は、「法と歴史Ⅰ、Ⅱ」の発展・補論として位置づけられる。

Special lecture on the English common law in historical perspective

- ・ The formation of the “common” law
- ・ The modernization of the common law

3. 学習の到達目標：

法の形成・発展のあり方の多様性を知り、法と社会、あるいは法と人間とのかかわりについて考察する材料を得ることができる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

序説 西洋における「法の近代化」の二つの型

第1講 中世における裁判権の多元的構成

第2講 コモン・ローの成立

第1 封建制社会の動揺

第2 国王の刑事裁判権の集中化

第3 国王の民事裁判権の集中化

第4 陪審による審理の制度化

第5 国王裁判所の組織化と巡回裁判

第3講 コモン・ローの近代化

第1 「イングランド法とルネサンス」

第2 大法官府裁判所とエクイティ

第3 国王評議会の裁判所とローマ法

第4 コモン・ロー裁判所内部の管轄争い

第5 コモン・ローの近代化:「イングランド法とルネサンス」再考

5. 成績評価方法：

一回ないし複数回のレポート提出を受験要件としての期末試験（レポート成績を加味）によるか、あるいは複数回のレポートによる予定である。

6. 教科書および参考書：

特定の教科書はない。受講に有用な文献は、何らかの方法で指示する。

7. 授業時間外学習：

授業開始後に指示する。

8. その他：

本講義はその内容上、「法と歴史Ⅰ、Ⅱ」を既に履修していることを前提とする（厳密な意味での「履修要件」とする趣旨ではない）。次回開講は2022年度の予定。

なお、初回授業を対面で開始するが、万一出席人数が「対面授業」の許容人数を超えた場合はオンラインに移行せざるを得ない。人数を把握する必要性が高いため、意思ある者は履修登録とともに、可能な限り教室に出席すること。

科目名： 現代民法特論 I

科目区分： 大学院科目

担当教員： 池田 悠太

開講期： 2022

単位数： 2

授業形態： 講義

使用言語： 日本語

週間授業回数： 1回毎週

配当学年： -

対象学年： -

実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡は Google Classroom を用いて行う。クラスコードは「fh43ndt」。

実施方法： ハイブリッド（対面＋オンライン（オンデマンド））。ただし、当面は「オンライン（リアルタイム）＋オンライン（オンデマンド）」のハイブリッド形式とする（講義棟の復旧状況による。）。

1. 授業題目：

消費者法

2. 授業の目的と概要：

「民法」「民事訴訟法」などといった伝統的な分類とは別に、消費者に関する法として「消費者法」を観念することができ、実際に観念されてきた（もっとも、「消費」「消費者」とは何か、はそれ自体として大きな問題である。）。そのおそらく中心的な部分は、（広義の）「民法」として、あるいは一般法としての（狭義の）「民法」に対する特別法として、位置付けることができると考えられる。「現代民法特論 I」においては、その部分を主に取り上げつつ、その部分をよりよく理解するためにも、「消費者法」を全体として検討する。なお、検討にあたってはできるだけ判例・裁判例を多く取り上げることとしたい。そのため、具体的な法適用について検討する機会ともなろう。

This course will study the Japanese consumer law.

3. 学習の到達目標：

消費者法についての理解を深めるとともに、民法についての理解を深める。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

以下の内容についての講義による。

1. 序論
2. 消費者の取引の過程(1)
3. 消費者の取引の過程(2)
4. 消費者の取引の過程(3)
5. 消費者の取引の過程(4)
6. 消費者の取引の過程(5)
7. 消費者の取引の内容(1)
8. 消費者の取引の内容(2)
9. 消費者の取引の内容(3)
10. 消費者の取引の内容(4)
11. 消費者の安全(1)
12. 消費者の安全(2)
13. 消費者の安全(3)
14. 消費者の紛争
15. 総括・試験

5. 成績評価方法：

学期末の筆記試験による。

6. 教科書および参考書：

教科書として、河上正二＝沖野眞巳編『消費者法判例百選〔第2版〕』（有斐閣，2020年）を用いる。参考書として、中田邦博＝鹿野菜穂子編『基本講義消費者法〔第4版〕』（日本評論社，2020年），大村敦志『消費者法〔第4版〕』（有斐閣，2011年）などがあり、初回に紹介する。

7. 授業時間外学習：

予習として、（狭義の）民法についての理解を確認することや、講義を聴きながら作成したノート等を用いて適宜復習することが期待される。また、予習又は復習の過程で、判例教材等を用いて判例を読むことが望まれる。ただし、初回のための予習は不要である。

8. その他：

「民法総則」「契約法・債権総論」「不法行為法」を受講済あるいは受講中であることが望ましいが、自習することができれば十分である。

科目名：	現代民法特論Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	吉永 一行	開講期：	2022
授業形態：	講義	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

この授業では Google Classroom（クラスコード：5oifkq7）を用いる。教員のメールアドレスは Yoshinaga.TU+2022@gmail.com である。

実施方法：対面を原則とし、新型コロナウイルス感染症の状況に応じてオンライン（リアルタイム）にて実施するか、対面とオンラインのハイブリッドで行う。初回授業をオンライン（リアルタイム）でのみ行う必要がある場合には、下記 Google Classroom に Zoom アクセス用の URL を掲載する。

1. 授業題目：

近時の判例を通じて家族法の解釈論と政策論を学ぶ

2. 授業の目的と概要：

家族の間では様々な問題が生じる。その問題が裁判所に持ち込まれれば、裁判所は、民法を中心とした法律を適用してその解決を図る。もっとも、そこでいう「解決」は、1つには法律の適用によって処理できる部分（典型的には金銭の支払を求める権利の有無）を切り出して、制定（ないし改正）当時の価値観が埋め込まれた法律に照らして導き出されたものであり、「現代における家族の問題」の解決としては、二重の限界を抱え込んでいることになる。

こうした問題意識に照らして、本講義では、家族をめぐる最高裁判例や下級審裁判例を読み、それを2つの視点から批判的に検証することにした。1つは、法律の適用による解決を限界を超えた対応の要否の検証である。法律の改正（立法論）の検討がその際たるものであるが、既存の法律を前提にしながら社会制度を変容・充実させるという方法も考えられる。もう1つは、家族をめぐる価値観が変容し、また多様化していく中で、法律に埋め込まれた価値観は、どこまでが変わることなく維持・尊重され、どこからは革新を求められるのかの検証である。

In this lecture, students read the Supreme Court and lower court cases on family law and then critically examine them from two perspectives. The first is whether it is necessary to take action beyond the limits of solution by applying the law. The second is the perspective on how much the family values embedded in the law can be maintained.

3. 学習の到達目標：

家族法の近時の判例が、どのような事案についてどのような判断を示したかを知るとともに、それによって解決された、もしくは解決されなかった家族政策上の問題がどのようなものであるかを説明できるようになること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

学生の報告を中心として授業を進める。学生の報告は、初回授業で提示される報告テーマ一覧に示された判例について、どのような事案についてどのような判断が示されたのかを整理するとともに、それによって解決された、もしくは解決されなかった家族政策上の問題について、自分で文献を調べるなどして議論状況を整理することが必要である。初回授業でモデル報告を行う。

各回授業の後半は、学生からの質問に報告者が答える形でのディスカッションを行う。このため、受講生は、あらかじめ配布される報告レジュメに目を通し、質問を提出しておくことが必要である。

なお判例を読み解くために必要な基礎知識について、第2回・第3回授業で講義する。

1. ガイダンス・モデル報告（遺言執行者）
2. 研究倫理教育
3. 講義：家事調停・家事審判制度
4. 講義：信託法
5. 報告の作成
6. 報告1（嫡出推定と監護費用負担）
7. 報告2（性同一性障害と嫡出推定）
8. 報告3（嫡出推定と親子関係不存在確認請求）
9. 報告4（共同相続・遺産分割と預金債権）
10. 報告5（財産分離請求）
11. 報告6（子の引渡しと権利濫用）
12. 報告7（成年後見人の不正と損害賠償）
13. 報告8（財産承継と遺産分割）

14. 報告9（民事信託・家族信託と民法秩序）
15. 授業の総括と試験

なお、報告テーマの内容や順序は変更することがある。初回授業で指示する。

5. 成績評価方法：

期末試験 55%および平常点 45%

平常点は、報告（期間を通じて3回程度の提出を目安とする）および質問の内容によって評価する。

6. 教科書および参考書：

判例およびその評釈のリストを初回授業時に配布する。

7. 授業時間外学習：

報告担当回は報告レジュメを作成することが必要である。

報告担当回以外の回においては、報告レジュメをあらかじめ読み、質問を提出することが必要である。

8. その他：

オフィスアワーは随時アポイントを受け付けて実施する。冒頭掲載のメールアドレスから担当教員に連絡をとること。

科目名： 憲法演習Ⅱ	科目区分： 大学院科目
担当教員： 中林 暁生	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： 日本語
配当学年： -	対象学年： -
	単位数： 4
	週間授業回数： 2回隔週
	実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：w32buil

質問等はメールで随時受けつける。 akio.nakabayashi.a6@tohoku.ac.jp

実施方法： 対面

1. 授業題目：

憲法をめぐる諸問題

2. 授業の目的と概要：

憲法問題および憲法判例についての検討

We discuss various topics on Japanese constitutional law.

3. 学習の到達目標：

憲法問題についての思考能力を養う。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

比較憲法学的な視点も踏まえながら、日本の憲法問題についての検討を行う。

参加者は、前期には、合衆国最高裁判所の著名な判例についての報告を、後期には、日本の憲法学に影響を与えたアメリカの憲法学説についての報告を、それぞれ1回ずつ行う（各学期末に、各報告についてのレポートを提出する）。

5. 成績評価方法：

前期に1回、後期に1回レポートを提出することが単位取得要件である。成績は、報告、各回の発言、提出されたレポート等から総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

教科書 清水真人『憲法政治——「護憲か改憲か」を超えて（ちくま新書、2022年）

参考書 中林暁生＝山本龍彦『憲法判例のコンテキスト』（日本評論社、2019年）

7. 授業時間外学習：

開講時に指示する。

8. その他：

授業の連絡及び初回の講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

科目名：	比較憲法演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	佐々木 弘通	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコードは、2eiuwus。質問等は、対面式授業の後に受け付ける。

実施方法： 対面

1. 授業題目：

アメリカ憲法研究（原書購読）

2. 授業の目的と概要：

下記に指定するテキストを購読する。英文テキストの読解力を向上させるとともに、憲法問題に関する判断力を養成することが、本演習の目的である。

In this seminar, students will read materials on U.S. constitutional law in the original English language. We discuss both any language questions that arise and the substance of the materials.

3. 学習の到達目標：

英文テキストを読解する力の向上と、憲法問題に対する判断力の養成とが、目標となる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本講義は、すべて対面で授業を実施する。授業の連絡及び講義資料等の配信は、グーグル・クラスルームを使用する。

なお、上記の授業方法は、「新型コロナウイルス感染拡大防止のための東北大学の行動指針（BCP）」のレベル1における本学部の方針（2022年2月現在）に従ったものである。BCPレベルの変更や本学部の方針の変更に応じて、オンライン（リアルタイム型）に変更することがある。その場合には、対面授業やグーグル・クラスルーム等により伝達する。

下記に指定するテキストを購読する。参加者の英文読解力のレベルに応じてテキストを読み進める。

5. 成績評価方法：

出席と課題遂行度により評価する。

6. 教科書および参考書：

教科書

Charles Fried, The Cunning of Reason: Michael Klarman's 'The Framers' Coup', 116 MICH. L. REV. 981 (2018).

7. 授業時間外学習：

進度に応じた教科書の学習と、自らの発意による発展的学習。

8. その他：

教科書は各自で準備のこと（法学部図書室にも蔵書あり）。

科目名：	比較政治学演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	横田 正顕	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom を通じて連絡を行う。クラスコード：ju5dawj

実施方法： 開講時の状況により判断する。

1. 授業題目：

Thinking Clearly with Data を読む②

2. 授業の目的と概要：

数値データの統計解析は、現代の比較政治学の根本的な手法の一つとなっている。この授業では、著名な政治学者の手になる最新の教科書 Ethan Bueno De Mesquita and Anthony Fowler, Thinking Clearly With Data を使い、統計解析に必要な基本的な概念や考え方を、政治学的なテーマに沿って習得することを目的とする。

3. 学習の到達目標：

- 1) 統計的な因果分析に関わる初歩的な考え方と、その具体的応用を習得する。
- 2) 統計データを用いた政治学分析の意義と限界について学ぶ。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

この演習は初回（説明会）を除いて全8回でテキストの後半部分（CHAPTER10～17）を扱う。

参加者は各章を読んでその内容を理解し、疑問点や感想のほか、各章末の演習問題を解いてコメントペーパーとして事前に提出のこと。

授業では、各章における考え方や分析概念・基本用語の理解を踏まえて、演習問題に対する答えを考えていく。いわゆる報告者を置くことはないが、各自は自分が書いたコメントや解答について説明できるように準備しておくこと。

CHAPTER 10 Controlling for Confounders
 CHAPTER 11 Randomized Experiments
 CHAPTER 12 Regression Discontinuity Designs
 CHAPTER 13 Difference-in-Differences Designs
 CHAPTER 14 Assessing Mechanisms
 CHAPTER 15 Turn Statistics into Substance
 CHAPTER 16 Measure Your Mission
 CHAPTER 17 On the Limits of Quantification

5. 成績評価方法：

最低限の義務としての報告...65%
 授業への積極的参加度...25%
 出席...10%

6. 教科書および参考書：

主テキスト： Ethan Bueno De Mesquita and Anthony Fowler, Thinking Clearly With Data: A Guide to Quantitative Reasoning and Analysis, Princeton UP., 2021/11/16（参考文献については授業中に適宜紹介する。）

テキストは各自で購入することも可能であるが、未着等の危険性を考慮して教員側で調達する。個別の論点に関する参考図書は授業中に紹介する。

7. 授業時間外学習：

- 1) 各章の内容をよく読み込んで趣旨を理解する。
- 2) 各章末の演習問題を、他の参考書などを参照しながら自分の力で解いてみる。

8. その他：

この演習は前期の比較政治学演習Ⅰの内容を受けたものである。この演習を単独で履修することは妨げないが、初めて履修する者は、この演習で扱わない Chap 1～Chap 9 を独習しておくこと。

この演習は研究大学院前期課程と公共政策大学院の合同授業とする。

科目名： 刑法演習 I	科目区分： 大学院科目
担当教員： 成瀬 幸典	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： 日本語
配当学年： -	対象学年： -
	単位数： 2
	週間授業回数： 1回毎週
	実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

naruse@law.tohoku.ac.jp クラスコードは tdjdqgd です。

実施方法： 対面式で実施する予定です。

1. 授業題目：

ドイツ刑法に関する文献の講読

2. 授業の目的と概要：

ドイツ刑法に関する文献を精読し、わが国刑法理論に大きな影響を与え続けているドイツ刑法理論に関する理解を深める。

The objective of this course is for students to acquire deeper understanding of the theory of German criminal law, through an analysis of papers on German criminal law.

3. 学習の到達目標：

ドイツ刑法に関する理論的理解を深め、比較法的知見を獲得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

詳細は、参加者と意見交換しながら、第1回目の演習時に決定する。

5. 成績評価方法：

演習での発言などを総合して評価する。

6. 教科書および参考書：

第1回目の演習時に決定する。

7. 授業時間外学習：

次回の演習期日までに、指定された文献の該当箇所を精読し、問題意識を持って演習に臨むことができるようにしておくこと。

8. その他：

科目名： 刑事訴訟法演習

科目区分： 大学院科目

担当教員： 井上 和治

開講期： 2022

単位数： 2

授業形態： 演習

使用言語： 日本語

週間授業回数： 1回毎週

配当学年： -

対象学年： -

実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

y5gigvx

実施方法： 対面

1. 授業題目：

刑事証拠法判例研究

2. 授業の目的と概要：

刑事証拠法に関する重要な判例・裁判例を検討する。

3. 学習の到達目標：

①刑事証拠法に関する重要な判例・裁判例の意義を内在的・整合的に理解する。

②判例評釈の技法を習得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

報告担当者による報告（判例評釈の形式による）の後，その内容につき，全員で討論を行う。取り上げる判例・裁判例は，下記のを予定している。

第01回 最二小判平成 24・9・27 刑集 66 卷 9 号 907 頁

第02回 最一小決平成 25・2・20 刑集 67 卷 2 号 1 頁

第03回 最一小判昭和 53・9・7 刑集 32 卷 6 号 1672 頁

第04回 最二小判昭和 61・4・25 刑集 40 卷 3 号 215 頁

第05回 最二小判平成 15・2・14 刑集 57 卷 2 号 121 頁

第06回 最大判平成 29・3・15 刑集 71 卷 3 号 13 頁

第07回 最二小判昭和 41・7・1 刑集 20 卷 6 号 537 頁

第08回 最大判昭和 45・11・25 刑集 24 卷 12 号 1670 頁

第09回 最三小判昭和 58・7・12 刑集 37 卷 6 号 791 頁

第10回 東京高判平成 25・7・23 判時 2201 号 141 頁

第11回 最判平成 7・6・30 刑集 49 卷 6 号 741 頁

第12回 最判平成 23・10・20 刑集 65 卷 7 号 999 頁

第13回 東京高判昭和 58・1・27 判時 1097 号 146 頁

第14回 最二小決平成 17・9・27 刑集 59 卷 7 号 753 頁

第15回 最判平成 18・11・7 刑集 60 卷 9 号 561 頁

5. 成績評価方法：

演習における報告内容，討論への貢献度による。

6. 教科書および参考書：

判例・裁判例の原文は，演習中に配布する。その他の参考文献（関連する論文，評釈等）については，演習中に指示する。

7. 授業時間外学習：

演習中に指示する。

8. その他：

履修者は，法学部又法科大学院で開講されている刑事訴訟法関連科目を履修済みの者に限る。

履修を希望する者は，担当教員のウェブサイトに記載されているメール・アドレスに連絡すること。

科目名：	民法演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	池田 悠太	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡は Google Classroom を用いて行う。クラスコードは「4aejdzo」。

実施方法： 対面**1. 授業題目：**

民法文献講読——民法学者の法社会学

2. 授業の目的と概要：

民法学は法に関する学問であるとともに社会に関する学問であり、あるいは少なくともそうでありうるが、同じく社会と法を考察対象とする比較的新しい学問として、法社会学がある。近時の日本において、民法学と法社会学との距離は大きくなっているように思われるが、伝統的に日本の民法学者は法社会学に関心を寄せてきたと言える。本演習では、代表的な民法学者でもある川島武宜（1909-1992）及び来栖三郎（1912-1998）の、法社会学の又は法社会学に関する著作を読むことを通じて、民法学と法社会学について考える。著作としては、方法について論じたものと対象について論じたものとの双方を取り上げる。

In this seminar, we examine the sociology of law conducted or proposed by two Japanese civil-law scholars, Takeyoshi Kawashima and Saburo Kurusu.

3. 学習の到達目標：

法社会学との関係において、民法の内容や民法学の方法についての理解を深める。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

演習形式による。第1回に、担当教員が、内容的な問題提起を行うとともに、文献読解の際の注意点についての説明を行う。第2回以降は、7つの文献を取り上げて、どのような目的でどのような方法を用いてどのような内容が書かれているのか、それについて何が言えるか、などについて、担当者が報告を行い、それに基づいて全員で議論を行う。具体的には、たとえば、川島の著作として、「科学としての法律学」（1953年）、「近代法の体系と旧慣による温泉権」（1958年）、「農地相続と農地」（1965年）、「『法』の社会学理論の基礎づけ」（1972年）を、来栖の著作として、「法の解釈と法律家」（1954年）、「日本の養子法」（1960年）、「日本の手附法」（1964年）を、取り上げることを予定している。

5. 成績評価方法：

出席・報告・議論の状況による。

6. 教科書および参考書：

教科書は特に指定しない。参考書は初回に紹介する。

7. 授業時間外学習：

担当回については、報告を準備する。それ以外の回については、議論に参加する準備をする。

8. その他：

講義で行われることになる（民）法解釈とは別のレベルで（民）法学に触れたい、論文を読みたい、といった関心からの参加も歓迎する。

科目名：	民法演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	久保野 恵美 子	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom を利用します。クラスコードは、 nyaq4uf です。

実施方法： 授業は対面で実施予定です。

1. 授業題目：

家庭をめぐる裁判例を読む

2. 授業の目的と概要：

家庭をめぐる法と裁判について、家事審判等の裁判例を読み込むことを通じて、実体法と手続法の両面から考察をし、民法の家族法分野の理解を深める基盤を得ること及び将来において家事紛争に関わる実務的対応において活かすことのできる基礎的素養を培うことを目的とする。

This seminar focuses on process and practice of family law cases. Students are expected to read family law cases with understanding of the related acts.

3. 学習の到達目標：

民法の家族法分野について基礎的学習を終えていることを前提に、次の1、2に到達することを目標とする。

- 1 家事審判等の家庭をめぐる紛争に関わる裁判例を読み、問題の所在を理解し、解決の方策について考え、論じる能力を培うこと
- 2 家庭をめぐる紛争の解決の手続的側面について、その骨格と基本原則を理解すること

4. 授業の内容・方法と進度予定：

受講者各自によって基礎文献の購読、家事審判等の裁判例の熟読などが行われることを前提として、リポーターによる報告と全員による検討を通じて進行する予定である。

予定されるテーマ等は概要次のとおりである。

- 1 説明会
- 2 ガイダンスー文献案内等
- 3 家事事件の裁判例 (1)
- 4 家事事件の裁判例 (2)
- 5 家事事件の裁判例 (3)
- 6 家事事件の裁判例 (4)
- 7 家事事件の裁判例 (5)
- 8 家事事件の裁判例 (6)
- 9 家事事件の裁判例 (7)
- 10 家事事件の裁判例 (8)
- 11 家事事件の手続 (1) ー家事審判と人事訴訟・民事訴訟
- 12 家事事件の手続 (2) ー家事調停
- 13 家事事件の手続 (3) ー家庭裁判所調査官による調査
- 14 家事事件の手続 (4) ー子どもの意見表明、子どもの手続代理人
- 15 児童福祉法上の審判事件

なお、具体的にどのようなテーマを取り上げるか、また、演習をどのように進行させるかについては、受講者の意向にも配慮しながら決定したい。

5. 成績評価方法：

平常点により評価する。

6. 教科書および参考書：

必要な文献や裁判例については、ガイダンスで案内を行うが、本演習で扱う内容について予め概要をつかもうとする場合には、以下のような参考書を手にとってみて欲しい。

【参考書】

- ・高田裕成編著『家事事件手続法』(有斐閣、2014年)
- ・矢尾和子・大坪和敏編『裁判実務フロンティア 家事事件手続』(有斐閣、2017年)
- ・雑誌「家庭の法と裁判」の各号

7. 授業時間外学習：

演習科目においては、自分が報告を担当する回だけでなく、他のメンバーによる報告に際しても、十分な準備を行った上で出席し、積極的に質疑及び討論に参加しないと、演習を履修する意義が大きく減殺されてしまう。したがって、各回の授業に備えた十分な予習が必要となる。

8. その他：

- ・本演習は、「家族法」の講義を履修済み（又は同講義の対象となる分野を自習済み）であることを前提として進行する。
- ・受講希望者が13名を超えた場合には、選抜を実施する予定である。
- ・本演習は、学部の「民法演習」と合同で開講する。

科目名：	民法演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	鳥山 泰志	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

メールにて連絡すること (tori@law.tohoku.ac.jp) / クラスコード 6o4taqk

実施方法： 原則として対面式とする。

1. 授業題目：

民法実務演習

2. 授業の目的と概要：

判例を題材とする報告・討論をする。

3. 学習の到達目標：

民法に関する知識をより確実なものとするとともに、自分の考えを他人に伝え、他人の考えを理解する能力を高める。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

各回の題材となる判例をこちらで提示する。参加者の1人がそれを報告し、全員で議論する。初回と第2回は、判例の調査・報告をしたことがないものためにその方法を教授する。学生からの報告は、残りの回で行う。報告者の担当回数は、参加者の人数に応じて決めるが、最低、1回は報告してもらう。

5. 成績評価方法：

平常点（具体的には、報告の良し悪しと議論への参加状況）により評価する。

6. 教科書および参考書：

特に指定しない。

7. 授業時間外学習：

報告者が担当判例を徹底的に調べ上げることは当然のことである。報告しない者にも、一定の予習をすることで、議論に参加するための準備をしておくことが期待される。

8. その他：

民法総則を履修済みであることを前提に進める。

なお、本演習は、学部演習と合同で行う。

科目名：	民法演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	吉永 一行	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

この授業では Google Classroom（クラスコード： b2hgqv7）を用いる。教員のメールアドレスは Yoshinaga.TU+2022@gmail.com である。

実施方法： 対面を原則とし、新型コロナウイルス感染症の状況に応じてオンライン（リアルタイム）にて実施するか、対面とオンラインのハイブリッドで行う。初回授業をオンライン（リアルタイム）でのみ行う必要がある場合には、下記 Google Classroom に Zoom アクセス用の URL を掲載する。

1. 授業題目：

民法に関する日本語文献を読む。

2. 授業の目的と概要：

民法に関する日本語文献を講読し、日本民法学をめぐる幅広い問題について議論を行う。

Students read the literature on Japanese civil law and discuss a wide range of issues surrounding Japanese civil law.

3. 学習の到達目標：

文献の購読を通じて、民法に関する基本的知識とともに、選定されたテーマについての議論状況を把握する。さらに、法的議論の方法やその特徴などについても考察する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

毎回、報告担当者に文献の要約を提出してもらい、参加者全員で文献の内容を踏まえた議論を行う。

1. ガイダンス

2～15. 文献の講読と議論

5. 成績評価方法：

出席状況、議論への参加状況などを総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

受講者と相談の上、決定する。

7. 授業時間外学習：

担当回における要約の提出、担当以外の回における事前の検討を行う必要がある。

8. その他：

授業は隔週で開講する。開講日は初回授業日に発表する。

科目名：	民法演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	吉永 一行	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

この授業では Google Classroom（クラスコード：cgbsjak）を用いる。教員のメールアドレスは Yoshinaga.TU+2022@gmail.com である。

実施方法： 対面を原則とし、新型コロナウイルス感染症の状況に応じてオンライン（リアルタイム）にて実施するか、対面とオンラインのハイブリッドで行う。初回授業をオンライン（リアルタイム）でのみ行う必要がある場合には、下記 Google Classroom に Zoom アクセス用の URL を掲載する。

1. 授業題目：

民法に関するドイツ語文献を読む。

2. 授業の目的と概要：

民法に関するドイツ語文献を講読し、比較法的研究についての素養を修得する。

Students read the literature on German civil law and are trained on comparative legal research.

3. 学習の到達目標：

ドイツ語文献の購読を通じて、ドイツ民法に関する基本的知識とともに、選定されたテーマについての議論状況を把握する。さらに、得られた知識を通じて、日本における議論状況を相対化し、比較法的研究につなげる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

毎回、報告担当者にドイツ語文献の日本語訳を提出してもらい、参加者全員で検討する。適宜、内容についても議論を行う。

1. ガイダンス

2～15. 文献の講読と日本語訳の検討

5. 成績評価方法：

出席状況、議論への参加状況などを総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

受講者と相談の上、決定する。

7. 授業時間外学習：

担当回における翻訳の提出、担当以外の回における事前の検討を行う必要がある。

8. その他：

授業は隔週で開講する。開講日は初回授業日に発表する。

ドイツ語の能力について不安があれば、事前に担当教員に相談すること。

科目名：	民事手続法演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	今津 綾子	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

質問等は、授業の前後、又は google classroom 上で受け付ける。

実施方法： 対面

1. 授業題目：

民事手続法演習Ⅱ

2. 授業の目的と概要：

本演習では、民事訴訟法の基本的な理解を確認しつつ、実務的な観点を踏まえて問題を解決する能力を養うことを目的とする。本学法科大学院でも用いられている教材（三木浩一＝山本和彦編『ロースクール民事訴訟法（第5版）』）の中から重要と思われる問題を取り上げて学習することで、法科大学院での学習の橋渡しとなることを目指す。

This seminar teaches the basics of the Civil Procedural Law especially from practical points of view. The textbook in Tohoku Law school is used in this seminar: K.MIKI/K.YAMAMOTO, Law School; Civil Procedural Law.

3. 学習の到達目標：

1. 民事訴訟法の基本的理解を習得、再確認する。
2. 得られた知識が実務（判例）においてどのように用いられているのかを理解する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

1 形式

演習形式

受講者が任意のテーマについて報告をし、その後、全員で質疑応答します。

2 内容

- ・オリエンテーション（第1回）
- ・報告（第2－14回）

以下のものを予定していますが、希望により別の箇所を扱うこともできます。

- ①重複訴訟の禁止（Unit 1）
- ②当事者能力・当事者適格（Unit 4）
- ③確認の利益（Unit 5）
- ④処分権主義（Unit 7）
- ⑤弁論主義（Unit 9）
- ⑥釈明権（Unit 10）
- ⑦文書提出命令（Unit 13）
- ⑧一部請求（Unit 16）
- ⑨既判力の客観的範囲（Unit 17）
- ⑩既判力の基準時（Unit 18）
- ⑪既判力の主観的範囲（Unit 19）
- ⑫定期金賠償（Unit 20）
- ⑬訴訟承継（Unit 24）

- ・総括（第15回）

5. 成績評価方法：

担当回の報告内容と、各回の質疑応答での発言頻度及び内容により評価する。

6. 教科書および参考書：

教科書：三木浩一＝山本和彦編『ロースクール民事訴訟法（第5版）』（有斐閣）

参考書：三木浩一＝笠井正俊＝垣内秀介＝菱田雄郷『民事訴訟法〔第3版〕』（有斐閣、2018）

参考書：高橋宏志＝高田裕成＝畑瑞穂編『民事訴訟法判例百選』（有斐閣、2015）

7. 授業時間外学習：

担当回の報告にあたっては、文献や判例を調べたうえで、レジュメを作成すること。

担当回以外の授業では、事前に教科書の該当箇所を読み、わからないところを整理して臨むこと。

授業後は、内容を復習すること。

8. その他：

学部（民事訴訟法法曹実務演習）と合同で行います。

科目名：	商法演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	石川 真衣	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコード： vh2drmh 質問等の連絡方法は、Google Classroom で案内する。

実施方法： 対面（状況に応じて、オンライン（リアルタイム）にする可能性がある）

1. 授業題目：

フランス法文献購読

2. 授業の目的と概要：

フランス商法に関する文献購読を通じて、フランス私法及び商法の特徴、そしてわが国との共通点や違いについて理解することを目的とする。

This seminar aims to provide students a deeper understanding of French private law and commercial law through careful perusal of materials, as well as to acquire the basics of comparative legal research.

3. 学習の到達目標：

フランス私法・商法についての基本的知識を習得するとともに、わが国の商法の各種論点に関する理解を深めるための比較法的視点を得る。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

実施方法と購読する文献については、受講者の希望等も踏まえて、初回の演習時に決定する。各回の報告担当者が作成したフランス語文献の和訳を受講者全員で検討する。適宜受講者と討論も行う予定である。

第1回 ガイダンス

第2～15回 文献購読・和訳の検討

5. 成績評価方法：

平常点により評価する。

6. 教科書および参考書：

受講者と相談のうえ、決定する。

7. 授業時間外学習：

予め文献の指定された範囲を精読したうえで各回の授業に臨むこと。

8. その他：

フランス語の読解力を一定以上有することが必要となる。

科目名： 商法演習Ⅳ	科目区分： 大学院科目
担当教員： 脇田 将典	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： 日本語
配当学年： -	対象学年： -
単位数： 2	
週間授業回数： 1回毎週	
実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード： クラスコード： 7femaqt	
実施方法： 対面	
<p>1. 授業題目： 金融商品取引法</p> <p>2. 授業の目的と概要： 資本市場を規制する法として重要性を増している金融商品取引法を学ぶ。金融商品取引法を学んだことがない者が多いと考えられるため、基礎的な事項も取り扱う。ただし、基礎的な事項についても、教員が一方的に解説するのではなく、学生の報告に基づいて学ぶことになる。 In this course, students learn Financial Instruments and Exchange Act, which regulates the capital market in Japan. Each class is based on presentation by students.</p> <p>3. 学習の到達目標： 金融商品取引法の基礎を理解すること。法学についての調査と報告を効果的にできるようになること。</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： 本演習は対面で行う（ただし、今後のコロナの状況によっては変更する可能性がある）。 毎回数名の学生が、あらかじめ指定された資料について報告を行う。 演習は以下の順で行う予定である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 インTRODakション・金融商品取引法の基礎知識（第1回） 2 企業内容の開示規制（第2回～第3回） 3 金融商品取引業者の規制（第4回～第6回） 4 公開買付け規制、大量保有報告（第7回～第8回） 5 インサイダー取引規制（第9回～第10回） 6 相場操縦の規制（第11回～第12回） 7 金商法における有価証券（第13回） 8 投資信託・集団投資スキーム、デリバティブ取引（第14回～第15回） <p>5. 成績評価方法： 演習での報告と発言（100%）</p> <p>6. 教科書および参考書： 教科書 近藤光男ほか『基礎から学べる金融商品取引法』（弘文堂、2019） 参考書 黒沼悦郎『金融商品取引法（第2版）』（有斐閣、2020）</p> <p>7. 授業時間外学習： 指定された教科書・資料を読むこと。演習での報告の準備をすること。</p> <p>8. その他：</p>	

科目名： 商法演習V	科目区分： 大学院科目
担当教員： 森田 果	開講期： 2022
授業形態： 演習	単位数： 2
配当学年： -	使用言語： 2カ国語以上
	週間授業回数： 1回毎週
	実務・実践的授業：
連絡方法とクラスコード： usp5fgf	
実施方法： in person	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業題目： Seminar on Commercial Law 2. 授業の目的と概要： We are going to cover the recent trend of corporate/commercial law in the US. In every meeting, a single paper is selected beforehand and participants discuss them. 3. 学習の到達目標： Catching up the recent trend of the US corporate law. 4. 授業の内容・方法と進度予定： In each class meeting, a designated participant needs to sum up and present the contents of the reading assignment of the week. After her presentation, all the participants discuss the issue, including its applicability to Japan. 5. 成績評価方法： Class participation: 100% 6. 教科書および参考書： TBA 7. 授業時間外学習： Each participant is required to read the paper (30-100pages) beforehand. 8. その他： You can check the updates for this seminar at: http://www.law.tohoku.ac.jp/~hatsuru/ 	

科目名： 実証分析演習 I	科目区分： 大学院科目
担当教員： 森田 果	開講期： 2022
授業形態： 演習	単位数： 2
配当学年： -	使用言語： 2カ国語以上
	週間授業回数： 1回毎週
	実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

hahbuoj

実施方法： in person

1. 授業題目：

Introduction to Empirical Analysis (or Introduction to Empirical Legal Studies)

2. 授業の目的と概要：

Today many people realize that knowing and understanding data can make difference. Even the field of law, where textual and qualitative analyses have long been the tradition, is no exception. In order to understand the social impact of a specific legal rule, it would be better to rely on actual data.

The focus of this year is causal inference. In this seminar, we focus on how to implement causal inference employing statistical programming software. The main software is 'R'. R is an open software and you can download it for free.

3. 学習の到達目標：

Whatever field you are working on --- law, political science, and other social science ---, you will learn various techniques of quantitative empirical analysis.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

In each class meeting, a designated participant needs to sum up and present the contents of the reading assignment of the week. The reporter of the week is required to complement the reading assignments in order to help the understanding of other participants. Each participant should have a (laptop) PC in order to install R (and Rstudio) and to run practices. Although mathematics and programming are not prerequisites for this course, some basic knowledge of these areas will be helpful.

At the end of the seminar, each participant is required to present his or her own research agenda. Each participant can get feedback.

The topics covered in the seminar will include:

the basic mechanism of causal inference
various techniques of causal inference
introduction to R

5. 成績評価方法：

Class participation (80%)

Presentation at the end of the seminar (20%)

6. 教科書および参考書：

Tentatively, we are planning to use a textbook on causal inference, such as
Scott Cunningham, Causal Inference: Mixtape

7. 授業時間外学習：

It is highly recommended that you practice the analyses outside of class meetings because you can learn how to do statistical analysis only by practicing by yourself.

8. その他：

You can check the updates for this seminar at:

<http://www.law.tohoku.ac.jp/~hatsuru/>

科目名：	知的財産法演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	蘆立 順美	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡や質問の受付等は、Classroom を使用する。クラスコード：c7cme6i

履修希望者は、4月13日（水）17：00 までに担当教員まで Classroom を通じて連絡すること。

実施方法： 原則、対面で実施する。ただし、今後の状況や履修者の希望により、オンライン（リアルタイム）とする場合がある。

1. 授業題目：

知的財産法演習 I

2. 授業の目的と概要：

知的財産法に属する法律のうち、主に、著作権法や不正競争防止法に関する文献や裁判例を素材とし、同法の基本論点について検討することを通じて、これらの法律についての理解を深めることを目的とする。具体的なテーマは、参加者の関心に応じて決定する（参加者の関心によっては、上記以外の知的財産法に属する諸法を扱うこともある）。

This course aims to help each student to deepen his or her understanding of trademark law and unfair competition law through an analysis of famous cases and papers related to some fundamental issues.

3. 学習の到達目標：

各法の基本的内容と制度趣旨等の理解を深めるとともに、基本的論点について、問題状況を整理・分析し、検討・議論する能力を習得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本授業は、原則として対面で実施する予定である。ただし、コロナウィルスの状況により、オンライン（リアルタイム）に変更する可能性がある。

担当者が割り当てられた文献等について報告を行い、その後、全員で質疑・討論を行う。

報告者は、担当の文献等について熟読し、その内容を整理、分析したうえで報告することが求められる。参加者は、事前に文献を読んだうえで、積極的に議論に参加することが望まれる。したがって、履修者は知的財産法に関する基礎的知識を有していることが望ましい。

演習の進め方に関する詳しい説明、取り扱う内容や担当の割り当ての決定については第1回目に行うので、必ず出席すること。

5. 成績評価方法：

報告の内容、議論への参加状況、出席の状況を総合的に判断して行う。

6. 教科書および参考書：

文献は、適宜配布する。知的財産法の条文が記載された六法または法規集（コピーまたは電子媒体も可）を必ず用意すること。なお、条文は必ず最新のものを用意すること。

参考書等については、授業等で適宜紹介する。

7. 授業時間外学習：

授業前は、指定された文献を読み、内容や疑問点を確認しておくこと。授業後は、授業で扱った文献の内容、関連する学説や裁判例について復習し、扱った論点について考えを整理しておくこと。

8. その他：

知的財産法の講義を履修済みであることが望ましい。学部演習と合併開講。

科目名：	知的財産法演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	戸次 一夫	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	○

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：3ttapq4 質問等の連絡方法については、Google Classroom において周知する。

実施方法： 対面とオンライン(リアルタイム型)とを併用して実施する。

1. 授業題目：

知的財産法演習Ⅱ

2. 授業の目的と概要：

特許法に関する判例・裁判例や文献を素材として、同法の基本的論点についての検討を通し、同法の理解を深める。

This course aims to help each student to deepen his or her understanding of Patent Law through analysis of famous cases and papers related to some fundamental issues of Patent Law.

3. 学習の到達目標：

特許法に関する知識の定着を図り、理解を深めるとともに、判例・裁判例や文献を通し、法的論点について検討、議論する能力を習得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

①授業内容

報告担当者が割り当てられた判例・裁判例等について報告を行い、その後、参加者全員で質疑・討論を行う。

報告担当者は、判例・裁判例等を精読した上で論点を整理したレジュメを作成し、報告することが求められる。

報告担当者を割り当てていない回は、教員による特許法のポイント解説、判例・裁判例の解説及び質疑応答を行う。

参加者は、事前にレジュメ等を読んだ上で、積極的に議論に参加することが求められる。

本演習では、「発明・特許要件」、「権利取得手続」、「審判手続」、「審決取消訴訟」、「特許権の帰属」等の論点を扱う予定。

②進度予定

1. ガイダンス (演習の進め方の説明、判例・裁判例等の割当て等)

2. 特許法関連資料の収集方法 (図書館等の使い方)

3. ～5. 特許法のポイント解説

6. ～14. 判例・裁判例の検討等

15. 総括

5. 成績評価方法：

報告の内容、出席・議論への参加状況を総合的に判断して行う。

6. 教科書および参考書：

教科書：小泉直樹=田村善之編『別冊ジュリスト 244号 特許判例百選〔第5版〕』(有斐閣, 2019)

※ 最新の特許法の条文を各自準備し、持参すること (コピー、電子媒体も可)。

参考書：

(1) 平嶋竜太=宮脇正晴=蘆立順美『入門 知的財産法〔第2版〕』(有斐閣, 2020)

(2) 前田健=金子敏哉=青木大也 編『図録 知的財産法』(弘文堂, 2021)

(3) 島並良=上野達弘=横山久芳『特許法入門〔第2版〕』(有斐閣, 2021)

(4) 高林龍『標準 特許法〔第7版〕』(有斐閣, 2020)

7. 授業時間外学習：

報告担当者は、担当する判例・裁判例等について報告の準備を行う。他の参加者は、レジュメ、教科書の該当箇所等を事前に読み、検討を行っておく。

8. その他：

主として実践的教育から構成される実務・実践的授業/Practical business

科目名：	知的財産法演習Ⅲ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	戸次 一夫	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	○

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：hnpksjc 質問等の連絡方法については、Google Classroom において周知する。

実施方法： 本授業は、対面とオンライン(リアルタイム型)とを併用して実施する。

1. 授業題目：

知的財産法演習Ⅲ

2. 授業の目的と概要：

特許法に関する判例・裁判例や文献を素材として、同法の基本的論点についての検討を通し、同法の理解を深める。

This course aims to help each student to deepen his or her understanding of Patent Law through analysis of famous cases and papers related to some fundamental issues of Patent Law.

3. 学習の到達目標：

特許法に関する知識の定着を図り、理解を深めるとともに、判例・裁判例や文献を通し、法的論点について検討、議論する能力を習得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

①授業内容

報告担当者が割り当てられた判例・裁判例等について報告を行い、その後、参加者全員で質疑・討論を行う。

報告担当者は、判例・裁判例等を精読した上で論点を整理したレジュメを作成し、報告することが求められる。

報告担当者を割り当てていない回は、教員による特許法のポイント解説、判例・裁判例の解説及び質疑応答を行う。

参加者は、事前にレジュメ等を読んだ上で、積極的に議論に参加することが求められる。

本演習では、「特許権の効力と制限」、「特許権侵害」、「実施権」等の論点を扱う予定。

②進度予定

1. ガイダンス (演習の進め方の説明、裁判例等の割当て)
2. 特許法関連資料の収集方法 (図書館の使い方)
3. ～5. 特許法のポイント解説
6. ～14. 判例・裁判例の検討等
15. 総括

5. 成績評価方法：

報告の内容、出席・議論への参加状況を総合的に判断して行う。

6. 教科書および参考書：

教科書：小泉直樹=田村善之編『別冊ジュリスト 244号 特許判例百選〔第5版〕』(有斐閣, 2019)

※ 最新の特許法の条文を各自準備し、持参すること (コピー、電子媒体も可)。

参考書：

- (1) 平嶋竜太=宮脇正晴=蘆立順美『入門 知的財産法〔第2版〕』(有斐閣, 2020)
- (2) 前田健=金子敏哉=青木大也 編『図録 知的財産法』(弘文堂, 2021)
- (3) 島並良=上野達弘=横山久芳『特許法入門〔第2版〕』(有斐閣, 2021)
- (4) 高林龍『標準 特許法〔第7版〕』(有斐閣, 2020)

7. 授業時間外学習：

報告担当者は、担当する判例・裁判例等について報告の準備を行う。他の参加者は、レジュメ、教科書の該当箇所等を事前に読み、検討を行っておく。

8. その他：

主として実践的教育から構成される実務・実践的授業/Practical business

科目名： 英米法演習	科目区分： 大学院科目
担当教員： 芹澤 英明	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： 日本語
配当学年： -	対象学年： -
	単位数： 2
	週間授業回数： 1回毎週
	実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

クラスコード： mueuirn 対面により授業を実施する場合でも、クラスルームで連絡するので必ず登録すること。

実施方法：

1. 授業題目：

「最近のアメリカ合衆国最高裁判所の判例を読む」

2. 授業の目的と概要：

2021-2022 年度開廷期を中心に、ここ数年にアメリカ合衆国最高裁で出された判例を輪読する。憲法判例が中心であるが、刑事法、経済法、商事法の領域もとりあげる。2005 年に、最高裁首席裁判官が Rehnquist から Roberts に交代したことを受け、Rehnquist Court が 20 年間にわたって形成した判例法理が、Roberts Court の下でどのように継承されているかを追跡していく。また、2016 年 2 月に Scalia 裁判官死去によって発生した Gorsuch 裁判官任命、2018 年 6 月に引退した Kennedy 裁判官から Kavanaugh 裁判官への交替、2020 年 9 月の Ginsburg 裁判官死去に伴う Barrett 裁判官任命といった、裁判官構成の変化の判例法理への影響についても検討する。

In this seminar, we will look at recent Supreme Court cases, mainly taken from 2020-2021 October Term. Many are constitutional cases, but cases in criminal law, economic or business law may also be included. We will also discuss the legal theories of each Justice, especially jurisprudence of recently appointed Justices Gorsuch, Kavanaugh and Barrett following Justice Scalia's death, Justice Kennedy's retirement and Justice Ginsburg's death under Trump's presidency.

3. 学習の到達目標：

実際の最高裁の判例を精読することで、アメリカ法の基本的な考え方を修得するとともに、その評釈を、最終レポート（ゼミ論文）の形でまとめることで、法的文書作成に必要なリサーチや表現力の基礎的な力を涵養する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

1. ガイダンス
2. アメリカ合衆国最高裁の構成・手続・判例法の解説
3. 判例 1 の読解（全員による輪読）
4. "
5. "
6. 判例 2 の読解（全員による輪読）
7. "
8. 個別報告およびディスカッション（数件の判例を順次とりあげていく）
9. "
10. "
11. "
12. "
13. レポート（ゼミ論文）作成・添削指導
14. "
15. レポート（ゼミ論文）提出と講評

5. 成績評価方法：

演習における討論と最終レポート（ゼミ論文）を総合的に評価する。（最終レポートを提出しないと単位がとれないので注意すること。）

6. 教科書および参考書：

教材はプリントで配布する。

インターネット上の資料（<http://www.law.tohoku.ac.jp/~serizawa/>）その他参考文献は演習時に紹介する。

7. 授業時間外学習：

英語の判例・論文を読むので予習が必須。レポートの作成のため、図書館その他でリーガル・リサーチを行わなければならない。

8. その他：

主な教材は英語で提供される。英語の判例・文献を読む意欲がある者、英語の法律文献を用いて論文を作成する必要がある者、その他広く法律英語について興味がある者等向け。（今年度は法学部向け「英米法演習」との合併ゼミとして開講される。）

〈履修要件〉

人員十数名まで。

科目名： 法理学演習 I	科目区分： 大学院科目
担当教員： 樺島 博志	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： 日本語
配当学年： -	対象学年： -
単位数： 2	
週間授業回数： 1回毎週	
実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード： JM24600; yudyoko	
実施方法：	
<p>1. 授業題目： 現代型訴訟の事例研究（前半）</p> <p>2. 授業の目的と概要： The Seminar of Jurisprudence I deals with selected topics from the cases that are categorized as "public law litigation" in Japan. The purpose of discussion in it is to identify the problems intrinsic in the dispute resolution through the judicial instance.</p> <p>3. 学習の到達目標： 演習参加者は、現代型訴訟にかんする主題のなかから、自らの主題を設定し、これについて口頭で研究報告を行い、他の参加者からの質疑に答える。その際、学術研究の手法にもとづいて研究発表を行い、法理学の総合的見地から、現代型訴訟にかんする研究主題を論ずる能力を修得することを目標とする。</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： 1回のセッションは、約20分の研究報告、および、約60分の討議によって構成される。報告者は、研究報告に際し、A4の標準書式で1-2枚程度のハンド・アウトを用意することが求められる。参加者の人数に応じて、1人につき2-3回の研究報告をすることが期待される。 現代型訴訟にかかわる事例として、次の問題群を取り扱う。 1 ガイダンス・研究倫理 2-3 公害・環境訴訟 4-5 薬害訴訟 6-7 食品被害訴訟 8-9 製造物責任訴訟 10-11 企業犯罪刑事訴訟 12-13 戦後補償訴訟 14-15 情報・プライバシー訴訟</p> <p>5. 成績評価方法： 口頭による研究報告の内容40%、質疑に対する応答20%、および、学期末に提出すべき研究報告書の形式及び内容40%の観点から評価を行う。</p> <p>6. 教科書および参考書： 講義には必ず携帯用の六法（ポケット六法など）を持参すること。 事例集として、 「重要判例解説」各年度、ジュリスト臨時増刊 を用いる</p> <p>7. 授業時間外学習： 授業中に参照された理論書をあわせて適宜参照することをすすめる。</p> <p>8. その他：</p>	

科目名： 法理学演習Ⅱ

科目区分： 大学院科目

担当教員： 樺島 博志

開講期： 2022

単位数： 2

授業形態： 演習

使用言語： 日本語

週間授業回数： 1回毎週

配当学年： -

対象学年： -

実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

JM24700; hcm3n7o

実施方法：

1. 授業題目：

現代型訴訟の事例研究（後半）

2. 授業の目的と概要：

The Seminar of Jurisprudence II should develop further investigation conducted in the Seminar of Jurisprudence A. It therefore keeps dealing with selected topics from the cases that are categorized as "public law litigation" in Japan. The purpose of discussion in it is to identify the problems intrinsic in the dispute resolution through the judicial instance.

3. 学習の到達目標：

演習参加者は、現代型訴訟にかんする主題のなかから、自らの主題を設定し、これについて口頭で研究報告を行い、他の参加者からの質疑に答える。その際、学術研究の手法にもとづいて研究発表を行い、法理学の総合的見地から、現代型訴訟にかんする研究主題を論ずる能力を修得することを目標とする。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

1回のセッションは、約20分の研究報告、および、約60分の討議によって構成される。報告者は、研究報告に際し、A4の標準書式で1-2枚程度のハンド・アウトを用意することが求められる。参加者の人数に応じて、1人につき2-3回の研究報告をすることが期待される。

現代型訴訟にかかわる事例として、次の問題群を取り扱う。

1 ガイダンス・研究倫理

2-3 公害・環境訴訟

4-5 薬害訴訟

6-7 食品被害訴訟

8-9 製造物責任訴訟

10-11 企業犯罪刑事訴訟

12-13 戦後補償訴訟

14-15 情報・プライバシー訴訟

5. 成績評価方法：

口頭による研究報告の内容40%、質疑に対する応答20%、および、学期末に提出すべき研究報告書の形式及び内容40%の観点から評価を行う。

6. 教科書および参考書：

講義には必ず携帯用の六法（ポケット六法など）を持参すること。

事例集として、

「重要判例解説」各年度、ジュリスト臨時増刊

を用いる

7. 授業時間外学習：

授業中に参照された理論書をあわせて適宜参照することをすすめる。

8. その他：

科目名：	日本法制史演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	坂本 忠久	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

クラスコード evyfvop

実施方法： 対面式で行う

1. 授業題目：

日本法制史に関する諸問題。

2. 授業の目的と概要：

日本法制史に関する文献、基本史料の購読。

Subscribe literature and fundamental history materials about Japanese Legal History.

3. 学習の到達目標：

文献や基本史料の内容を理解する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

対面式の演習を行う予定である。

どのような文献、史料を購読するかは、参加者の専攻、希望等を考慮しつつ決定する予定である。

5. 成績評価方法：

文献、史料購読の理解度、報告の内容等を総合的に判断する。

6. 教科書および参考書：

コピー等を配布する。

7. 授業時間外学習：

コピー等の内容を復習する。

8. その他：

参加希望者は、初回時に必ず出席すること。

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

クラスコード evyfvop

科目名：	日本法制史演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	坂本 忠久	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：
実施方法：対面式で行う

1. 授業題目：

日本法制史に関する諸問題。

2. 授業の目的と概要：

日本法制史に関する文献、基本史料の購読。

Subscribe literature and fundamental history materials about Japanese Legal History.

3. 学習の到達目標：

文献や基本史料の内容を理解する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

どのような文献、史料を購読するかは、参加者の専攻、希望等を考慮しつつ決定する予定である。

5. 成績評価方法：

文献、史料購読の理解度、報告の内容等を総合的に判断する。

6. 教科書および参考書：

コピー等を配布する。

7. 授業時間外学習：

コピー等の内容を復習する。

8. その他：

参加希望者は、初回時に必ず出席すること。

科目名：	西洋法制史演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	大内 孝	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡及び資料等の配信は、当面、Google Classroom を使用して行う。クラスコードは yewtaxp

実施方法： 対面

1. 授業題目：

法制史に関する原書文献の講読

2. 授業の目的と概要：

原書講読によって、叙述される対象についてそのおおよそを理解するとともに、外国語読解の「忍耐力」を涵養する。

Reading and discussion of Blackstone's "Commentaries (1st ed., 1765-1769)", and word for word translation into Japanese

3. 学習の到達目標：

原書講読によって、叙述される対象についてそのおおよそを理解するとともに、外国語読解の「忍耐力」を涵養することができる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

今年度のテキストは、Sir William Blackstone, Commentaries on the Laws of England, 4 vols. (1st ed., 1765-1769) のうちから、具体的には参加者と相談の上で決める。

演習の進め方は、担当者が分担部分の全訳を予め作成の上、事前に配付し、他の参加者はそれを事前に入念に検討した上でのぞむものとする。

具体的な授業の形態は、COVID-19 の状況と、参加者数の状況とを勘案して柔軟に決定したいので、Google Classroom 上の連絡を常時注意されたい。現時点では対面授業を予定している。

参加希望者は Google Classroom 上の 資料：堀部政男「ウィリアム・ブラックストン」を熟読してくること。

5. 成績評価方法：

分担された全訳への取り組み具合と、毎授業時における取り組み具合とを勘案して評価する。

6. 教科書および参考書：

テキストは何らかの方法で配付する。

7. 授業時間外学習：

授業開始後に指示する。

8. その他：

参加を希望する者は、事前に教務係を通して必ず大内に連絡し相談すること。既に本演習に参加したことがあり大内との連絡方法を持っている者は、その方法で大内に参加の意思を伝えること。

科目名：	西洋法制史演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	大内 孝	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡及び資料等の配信は、当面 Google Classroom を使用して行う。クラスコードは yx2bbk3

実施方法： 対面

1. 授業題目：

法制史に関する原書文献の講読

2. 授業の目的と概要：

原書講読によって、叙述される対象についてそのおおよそを理解するとともに、外国語読解の「忍耐力」を涵養する。

Reading and discussion of Blackstone's "Commentaries (1st ed., 1765-1769)", and word for word translation into Japanese

3. 学習の到達目標：

原書講読によって、叙述される対象についてそのおおよそを理解するとともに、外国語読解の「忍耐力」を涵養することができる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

今年度のテキストは、Sir William Blackstone, Commentaries on the Laws of England, 4 vols. (1st ed., 1765-1769) のうちから、具体的には参加者と相談の上で決める。

演習の進め方は、担当者が分担部分の全訳を予め作成の上、事前に配付し、他の参加者はそれを事前に入念に検討した上でのぞむものとする。

なお、参加者の関心と実情を勘案し、参加者と相談のうえで、これとは大幅に異なる内容・方法に変更することがありうる（テキスト自体の変更をも含む）。

具体的な授業の形態は、COVID-19 の状況と、参加者数の状況とを勘案して柔軟に決定したいので、Google Classroom 上の連絡を常時注意されたい。

5. 成績評価方法：

分担された全訳への取り組み具合と、毎授業時における取り組み具合とを勘案して評価する。

6. 教科書および参考書：

テキストは何らかの方法で配付する。

7. 授業時間外学習：

授業開始後に指示する。

8. その他：

参加を希望する者は、事前に教務係を通して必ず大内に連絡し相談すること。既に本演習に参加したことがあり大内との連絡方法を持っている者は、その方法で大内に参加の意思を伝えること。

科目名： 租税法演習 I	科目区分： 大学院科目
担当教員： 他	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： 日本語
配当学年： -	対象学年： -
	単位数： 2
	週間授業回数： 1回毎週
	実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡その他やりとりは、Google Classroom にて行う。クラスコードは、

実施方法： 対面の形式で実施する。

1. 授業題目：

国際課税システムの改革

2. 授業の目的と概要：

現在、伝統的な国際課税システムは改革の時期を迎えていると評価されている。BEPS2.0 と呼ばれる動きは、その代表例である。しかし、それが如何なる意味で「改革」とされるのかは、担当者の見るところ明らかでない。それは、伝統的システムの構造を明晰に位置づけたうえで、現在の動きがそれとどのように異なるかが言語化されていないことによる。本授業は、国際課税についての最近の動きを検討することで伝統的システムが 100 年近くも生き延びた背景を探る。You learn the system of international taxation and its reform ideas in this seminar. Its object is to understand the movement which we call 'BEPS 2.0' and learn to explain ideas which you think are desirable.

3. 学習の到達目標：

さまざまな文書や論文を読むことによって、国際課税の基礎理論を知るとともに、その基礎理論に対する見直しの議論に対して個々の見解を語れるようになることを目標とする。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本授業のテーマに関わる公式文書や論文を報告者を立てて読み進める。OECD のデジタル経済関係の文書を候補として考えている。初回の授業時に、それぞれ自分が興味を持っているトピックを出してもらい、それに基づいて実際に読む文献を決定する。英語文献を読むことになる可能性が高い。最初の数回は、全員で同一の文献を読み進め、しばらくしたら、各回に報告者を立てて文献の内容を報告してもらい、その後全員で議論するという方式を採用する。最初の課題文献の有力な候補として、OECD (2021), Tax Challenges Arising from the Digitalisation of the Economy – Global Anti-Base Erosion Model Rules (Pillar Two): Inclusive Framework on BEPS, OECD, Paris (<https://www.oecd.org/tax/beps/tax-challenges-arising-from-the-digitalisation-of-the-economy-global-anti-base-erosion-model-rules-pillar-two.htm>) を挙げておく。

5. 成績評価方法：

平常点による。

6. 教科書および参考書：

授業中にその都度指示するが、とりあえず、増井良啓＝宮崎裕子『国際租税法〔第4版〕』（東京大学出版会、2019年）があると便利である。

7. 授業時間外学習：

各回の課題文献を読み、その内容を把握していることが求められる。

8. その他：

科目名：	租税法演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	藤原 健太郎	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

資料配付及び連絡は Google Classroom にて行う。クラスコードは、

実施方法： 対面の形式で行う。

1. 授業題目：

「公平」な租税とは何か？

2. 授業の目的と概要：

課税の公平性の意義について、歴史学・哲学・経済学等の様々な観点から考察を深めていく。You explore the fairness of taxation in this seminar.

3. 学習の到達目標：

公平な租税とは何かを巡るこれまでの膨大な議論を整理し、理解を深める。さらには、その理解を明晰に言語化できるようになることを目指す。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本授業は、研究大学院の修士及び博士の合同授業である。租税法・租税政策に関する論文を執筆する学生を主として念頭に置き、最初の数回で文献講読を行った上で、その後、各出席者において何回かの報告を行ってもらおう。まず、初回は、各自の研究テーマについて披露していただく。それを踏まえて最初に講読する文献を決定する。報告の回については、最初に報告担当者が報告を行った上で、全員で議論を行う。

5. 成績評価方法：

平常点による。

6. 教科書および参考書：

参考文献については、授業内で適宜指示を行う。

7. 授業時間外学習：

課題文献をあらかじめ読むこと。参加人数次第であるが、一人当りの報告回数がかかなり多くなることを見込まれるので、報告準備が授業時間外学修の大半を占めることになるだろう。

8. その他：

科目名：	現代政治分析演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	金子 智樹	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡は Google Classroom で行います（クラスコードは gri4dfg）。授業担当者の連絡先は tomoki.kaneko@tohoku.ac.jp です。

実施方法： 対面**1. 授業題目：**

政治データ分析入門

2. 授業の目的と概要：

本演習では、現代政治に関するデータを分析するために必要な基本知識を学び、実際に分析作業に取り組みます。高度な分析手法を知ることよりも、データを取り扱って分析するための基本を身につけることを目指しますので、統計学などの事前知識は不要です。「データ分析に関心はあるが敷居が高そう」と思っている皆さんの参加を歓迎します。

In this seminar, students will learn the basic knowledge necessary to analyze data on contemporary politics. The aim of this course is to acquire the basics of handling and analyzing data, rather than to know advanced analytical methods. No prior knowledge of statistics is required.

3. 学習の到達目標：

データ分析の基本を座学・実学の両面から学ぶことで、政治学（より一般的には社会科学）のデータを定量的に考察するための視座を獲得することが目標になります。また、各参加者のプログラミングに対する心理的なハードルを取り払うことも目指します。データ分析に対する需要が高まっている現代社会において、主体的に分析に取り組める人材になることが大きな目標です。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

各回の授業は、授業担当者によるレクチャー（データ分析の考え方や実際の分析方法）と、グループワーク（分析の練習やディスカッション）から構成されます。自分一人では分からない疑問でも、参加者同士が助け合うことで解決できることがあります。

実際の分析では、フリーソフトの RStudio を用います。RStudio がインストールされたノート PC を、毎回の授業に持参するようにしてください（詳細は初回授業で説明）。PC の OS は特に問いません（授業担当者は Windows を用いて解説します）。

また、中間レポートと学期末レポートでは、参加者それぞれが取り組んだデータ分析の結果を報告してもらいます。参加者全体の意向によっては、簡単なインターネット調査の実施も経験し、得られたデータの分析をレポート課題とすることも検討します。

新型コロナウイルスの感染拡大状況を注視しながら、基本的には対面で実施する予定です。ただし、場合によってはオンライン形式での実施に切り替える可能性もあり得ます。諸連絡は Google Classroom 経由で行いますので、こまめにチェックするようにしてください。

5. 成績評価方法：

平常点 50%、中間レポート 20%、学期末レポート 30%です。平常点はグループワークでの積極性を中心に評価します。また各レポートに関しては、分析の正しさだけでなく内容のオリジナリティなども評価対象です。

演習授業ですので、全ての授業回への参加が原則です。新型コロナウイルス感染などの止むを得ない事情を除き、欠席は大幅に減点します。

6. 教科書および参考書：

教科書の指定はありませんが、意欲のある人は下記の参考書（あくまで一例）を入手しておくことで予習・復習がスムーズになるでしょう。

- 今井耕介著、粕谷祐子・原田勝孝・久保浩樹訳（2018）『社会科学のためのデータ分析入門 上・下』岩波書店。
- 浅野正彦・矢内勇生（2018）『Rによる計量政治学』オーム社。

7. 授業時間外学習：

授業内のグループワークだけでなく、各回のレクチャーの内容の復習は必須となります。データ分析は「習うより慣れろ」という部分が大きく、積極的に分析に親しむことが学修のためにはとても重要です。ゼミ生同士で疑問点などをお互いに教え合うことも推奨します。本演習では自主性が何よりも大事である点に留意してください。

8. その他：

履修を検討している人は、Google Classroom に登録した上で、初回の授業に必ず参加するようにしてください。

なお本演習は、学部・公共政策大学院・研究大学院（修士課程）の合同開講です。

科目名：	現代政治分析演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	金子 智樹	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡は Google Classroom で行います（クラスコードは rk1ee7a）。授業担当者の連絡先は tomoki.kaneko@tohoku.ac.jp です。

実施方法： 対面

1. 授業題目：

現代政治分析文献講読—英文ジャーナルを題材に

2. 授業の目的と概要：

本演習では、政治学の英文ジャーナル（APSR、AJPS、JOP など）に掲載された論文を講読します。トップジャーナルに掲載された実証研究の水準を検討することに加え、研究者に必要な英文速読能力を養うことが授業の目的です。

In this seminar, students will read articles published in journals of political science (APSR, AJPS, JOP, etc.). The main purpose of this course is to examine the standard of empirical research published in top journals and to develop the speed-reading skills necessary for researchers.

3. 学習の到達目標：

「有名なジャーナルに掲載＝優れた論文」というわけでは必ずしもありませんが、海外のトップジャーナルで発表されている研究の水準を知ることは、政治学の現在地を学ぶ上で重要です。本演習を通して、各参加者がそれらの論文に対する評価軸を持てるようになることが期待されます。毎週一定のペースで英語論文を講読して速読能力を鍛えることも、特に研究者志望の皆さんにとっては目標になります。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

American Political Science Review、American Journal of Political Science、Journal of Politics などのジャーナルに掲載された実証研究の論文を、毎週 2 本ずつ読み進めます。どの論文を取り上げるかは、参加者の興味関心も考慮しながら決定します。

参加者（全員）：それぞれの論文を読み、前日までにコメント（論文に対する評価や疑問など）を共有します。各論文の担当者：論文の内容をまとめたレジュメと、他の参加者からのコメントを再構成したコメントペーパーを作成します。授業では、まずレジュメの内容を報告し、コメントペーパーに基づいてディスカッションをリードします。

新型コロナウイルスの感染拡大状況を注視しながら、基本的には対面で実施する予定です。ただし、場合によってはオンライン形式での実施に切り替える可能性もあり得ます。諸連絡は Google Classroom 経由で行いますので、こまめにチェックするようにしてください。

5. 成績評価方法：

平常点 100%です。自分が担当した論文の報告内容、毎回のコメント提出、ディスカッションにおける積極性などを総合的に評価します。

演習授業ですので、全ての授業回への参加が原則です。新型コロナウイルス感染などの止むを得ない事情を除き、欠席は大幅に減点します。

6. 教科書および参考書：

特に指定しません。

7. 授業時間外学習：

毎回の演習でアサインされた論文を読むだけでは、その研究の背景や先行研究との関係などを十分に知ることはできません。授業時間外では、関連する様々な文献を渉猟する積極性が各参加者に求められます。

8. その他：

履修を検討している人は、Google Classroom に登録した上で、初回の授業に必ず参加するようにしてください。

なお本演習は、研究大学院（修士課程・博士課程）の合同開講です。

科目名：	現代政治分析演習Ⅲ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	金子 智樹	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡は Google Classroom で行います（クラスコードは s63r2ee）。授業担当者の連絡先は tomoki.kaneko@tohoku.ac.jp です。

実施方法： 対面**1. 授業題目：**

現代政治分析文献講読——モノグラフを題材に

2. 授業の目的と概要：

本演習では、近年に出版された政治学の研究書を講読します。その多くは著者の博士論文を基に書かれたモノグラフであり、「政治学の博士論文を執筆するとはどのような営みか」を学ぶことが授業の目的です。高い学修意欲を持つ皆さんの参加を歓迎します。

In this seminar, students will read research books on political science published in recent years (monographs based on the author's doctoral dissertation). The main purpose of this course is to learn what kind of activity it is to write a dissertation in political science.

3. 学習の到達目標：

近年出版された単著の書籍を講読し、政治学の博士論文執筆に求められる水準を知ることが大きな目標になります。各参加者が（狭い意味での）研究関心以外の分野を学び、自身の研究の幅や視野を広げることが求められます。また特に留学生の参加者は、日本語の重厚な研究図書を精読する経験を積むことも目的となります。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本演習は、隔週・2限連続で開講します。計7冊の文献を講読することになりますが、それぞれページ数が多く比較的高価な書籍であり、参加者の時間的・金銭的な負担は重い授業になります。なお、1名以上の参加希望者がいれば開講しますので、ごく少人数の演習となる可能性もあり得る点に留意してください。

各回の授業は下記のように進める予定です。

参加者（全員）：それぞれの書籍を読み、前日までにコメント（学術的な評価や疑問点など）を共有します。

各回の担当者：書籍の内容をまとめたレジュメと、他の参加者からのコメントを再構成したコメントペーパーを作成します。授業では、まずレジュメの内容を報告した上で、コメントペーパーに基づいてディスカッションをリードします。

2022年3月時点では、下記の7冊の書籍を講読することを予定しています（授業までの出版状況によって一部を差し替える可能性あり）。

- 原田峻（2020）『ロビイングの政治社会学：NPO 法制定・改正をめぐる政策過程と社会運動』有斐閣。
- 千葉涼（2021）『ニュースの多様性とは何か：データ分析で問い直すジャーナリズムのあり方』勁草書房。
- 三谷文栄（2021）『歴史認識問題とメディアの政治学：戦後日韓関係をめぐるニュースの言説分析』勁草書房。
- 朴志善（2021）『立法前協議の比較政治：与党内不一致と日韓の制度』木鐸社。
- 米岡秀眞（2022）『知事と政策変化：財政状況がもたらす変容』勁草書房。
- 渡邊有希乃（2022）『競争入札は合理的か：公共事業をめぐる行政運営の検証』勁草書房。
- 具裕珍（2022）『保守市民社会と日本政治 日本会議の動員とアドボカシー：1990-2012』青弓社。

新型コロナウイルスの感染拡大状況を注視しながら、基本的には対面で実施する予定です。ただし、場合によってはオンライン形式での実施に切り替える可能性もあり得ます。諸連絡は Google Classroom 経由で行いますので、こまめにチェックするようにしてください。

5. 成績評価方法：

平常点 100%です。自分が担当した書籍に関する報告内容、毎回のコメント提出、ディスカッションにおける積極性などを総合的に評価します。

演習授業ですので、全ての授業回への参加が原則です。新型コロナウイルス感染などの止むを得ない事情を除き、欠席は大幅に減点します。

6. 教科書および参考書：

各回で取り扱う書籍以外には特に指定しません。

7. 授業時間外学習：

各回の授業でアサインされた書籍を読むだけでは、その研究を十分に咀嚼して評価することはできません。関連する先行研究を渉猟し、著者のこれまでの研究経緯などを理解した上で演習に参加することが期待されます。

8. その他：

履修を検討している人は、**Google Classroom** に登録した上で、初回の授業に必ず参加するようにしてください。

なお本演習は、研究大学院（修士課程・博士課程）の合同開講です。

科目名：	西洋政治思想史演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	鹿子生 浩輝	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

hiroki.kakoo.d5@tohoku.ac.jp クラスコード cwz7idl

実施方法： 対面（コロナウィルスの状況に応じて変更することがある）

1. 授業題目：

西洋政治思想史 I（院ゼミ）

2. 授業の目的と概要：

この授業では、政治思想史の古典を講読する。授業の重要な目的は、学生が古典的著作の内容を正確に読み取る力を涵養することであり、プレゼンテーションおよびディスカッションの能力を陶冶することである。

The aim of this course is to help students read a historical book with accuracy and to improve the students' abilities to communicate and express their opinions. This course offers an opportunity to deepen the understanding of basic principles related to political science.

3. 学習の到達目標：

- ①テキスト（文献）の議論の内容を正確に理解すること。
- ②そのために必要な歴史的・政治的知識を獲得すること。
- ③発話やプレゼンテーションの能力を高めるとともに、他の参加者の意見を真摯に聞く姿勢を涵養すること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

各回、報告者による報告、質疑応答の順で構成する。参加者には参加と予習、および積極的なコミットメントが不可欠である。報告者は、該当範囲のレジュメ、その他の参加者は、コメントを準備する必要がある。なお、政治思想史を専攻していない参加者も歓迎する。ホブズ『リヴァイアサン』を講読する予定だが、参加者の数や質に応じて変更することもありうるため、初回の授業にはテキストを準備しておく必要はないが、必ず参加すること。差し当たり、次のような内容で進めていく。

1. オリエンテーション
2. 人間
3. 感覚
4. 造影
5. 言葉
6. 推理と科学
7. 情念
8. 論究の解決
9. 徳性
10. 知識の主題
11. 力と価値
12. 態度
13. 宗教
14. 人類の幸福
15. 自然法と契約

5. 成績評価方法：

平常点（テキストの正確な理解、発言の回数や質など）。

6. 教科書および参考書：

ホブズ『リヴァイアサン』（中公クラシックス）。参考書は必要に応じて演習の際に提示する。

7. 授業時間外学習：

上記の通り。

8. その他：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行うことを原則とする。

科目名：	西洋政治思想史演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	鹿子生 浩輝	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

hiroki.kakoo.d5@tohoku.ac.jp クラスコード kvo25lg

実施方法： 対面（コロナウィルスの状況に応じて変更することがある）

1. 授業題目：

西洋政治思想史Ⅱ

2. 授業の目的と概要：

この授業では、政治思想史の古典を講読する。授業の重要な目的は、学生が古典的著作の内容を正確に読み取る力を涵養することであり、プレゼンテーションおよびディスカッションの能力を陶冶することである。

The aim of this course is to help students read a historical book with accuracy and to improve the students' abilities to communicate and express their opinions. This course offers an opportunity to deepen the understanding of basic principles related to political science.

3. 学習の到達目標：

- ①テキスト（文献）の議論の内容を正確に理解すること。
- ②そのために必要な歴史的・政治的知識を獲得すること。
- ③発話やプレゼンテーションの能力を高めるとともに、他の参加者の意見を真摯に聞く姿勢を涵養すること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

各回、報告者による報告、質疑応答の順で構成する。参加者には参加と予習、および積極的なコミットメントが不可欠である。報告者は、該当範囲のレジュメ、その他の参加者は、コメントを準備する必要がある。なお、政治思想史を専攻していない参加者も歓迎する。ホブズ『リヴァイアサン』を講読するが、参加者の数や質に応じて変更することもありうるため、初回の授業にはテキストを準備しておく必要はないが、必ず参加すること。差し当たり、次のような内容で進めていく。

1. オリエンテーション
2. コモンウェルス
3. 設立による主権
4. 父権
5. 臣民の組織
6. 主権の代行者
7. コモンウェルスの繁栄
8. 忠告
9. 市民法
10. 犯罪
11. 処罰と報酬
12. コモンウェルスの解体
13. 主権的代表
14. 自然による王国
15. 総括

5. 成績評価方法：

平常点（テキストの正確な理解、発言の回数や質など）。

6. 教科書および参考書：

ホブズ『リヴァイアサン』（中公クラシックス）。参考書は必要に応じて演習の際に提示する。

7. 授業時間外学習：

上記の通り。

8. その他：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行うことを原則とする。

科目名： 行政学演習 I	科目区分： 大学院科目
担当教員： 西岡 晋	開講期： 2022
授業形態： 演習	単位数： 2
配当学年： -	使用言語： 日本語
	週間授業回数： 1回毎週
	実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

クラスコード： g6zn4kh 質問等は、メールで随時受け付ける。susumu.nishioka.d3@tohoku.ac.jp

実施方法： リアルタイム（新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていれば対面に変更する可能性もある）

1. 授業題目：

公共政策の分析

2. 授業の目的と概要：

行政の対外的活動は公共政策として表される。本演習では受講生が政策研究の手法を身に付け、自ら公共的課題を発見・分析し、課題の解決に向けた提言を行い、それらを通じて公共政策に対する理解を深めるとともに、社会に対する関心を高め、主体的・能動的に思考・分析するための基礎的技法を習得することを目的とする。なお、具体的な内容や進度は受講生と相談の上、決定する。行政学演習 I は、II よりも基礎的な内容となる。

The goal of this seminar is that students will obtain academic and social skills through reading books and articles about public administration, presentation and discussion. In this term, we will read the textbook on public policy studies written in English and then the students will analyze policy cases by themselves following the guidance of the textbook.

3. 学習の到達目標：

演習における学術書・論文の読解、報告、討論などを通じて学術的な作法と技法を身につけ、大学生が備えておくべき知的技能を習得することが最終的な目標である。

4. 授業の内容・方法と進捗予定：

本講義は、すべてオンライン（リアルタイム型）で授業を実施する。ただし、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていれば対面に変更する可能性もある。授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

授業の内容・方法・進捗予定は以下の通りだが、変更もありうる。

授業目的と合致する学術文献を輪読し、方法論や理論を習得する。さらに余裕があれば、国や地方自治体などで行われている公共政策について、グループもしくは単独で研究を行う。その間、レジュメ等を用いて発表を数回行い、その場で議論し、研究を深める。

今期は、まず、英語で書かれた公共政策の教科書を1章ずつ読み進めていく。余裕があれば、教科書の内容を踏まえて、各自で事例研究を行う。なお、教科書を読み終えることができなかった場合、後期の行政学演習 II で引き続き輪読する予定である。

ガイダンス（第1回）

第1部 過程

政策過程を理解する（第2回）

公共政策（第3回）

政策形成の二重構造（第3回）

アジェンダを設定するにはどうしたら良いか（第4回）

第2部 政策

政策手段を理解する（第5回）

政策手段を選択しデザインするにはどうしたら良いか（第6回）

公共政策を実施するにはどうしたら良いか（第7回）

政策を評価するにはどうしたら良いか（第8回）

第3部 能力

能力を理解する（第9回）

ステークホルダーとはどう関われば良いか（第10回）

公共政策を調整するにはどうすれば良いか（第11回）

制度とどう向き合えば良いか（第12回）

結論（第13回）

事例研究（第14回）

まとめ（第15回）

5. 成績評価方法：

平常点（出席、報告、議論への参加）によって評価する。

6. 教科書および参考書：

教科書：Anke Hassel and Kai Wegrich, How to Do Public Policy, Oxford University Press, 2022 を用いる予定。

その他の文献は開講時に紹介する。

7. 授業時間外学習：

輪読、調査、報告の準備など。

8. その他：

参加希望者は初回の授業に出席すること。なお、本演習は学部演習との合併授業である。

科目名： 行政学演習Ⅱ

科目区分： 大学院科目

担当教員： 西岡 晋

開講期： 2022

単位数： 2

授業形態： 演習

使用言語： 日本語

週間授業回数： 1回毎週

配当学年： -

対象学年： -

実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

クラスコード： zpkbrvk 質問等は、メールで随時受け付ける。susumu.nishioka.d3@tohoku.ac.jp

実施方法： リアルタイム（新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていれば対面に変更する可能性もある）

1. 授業題目：

政策スタイルの研究

2. 授業の目的と概要：

行政の対外的活動は公共政策として表される。本演習では受講生が政策研究の手法を身に付け、自ら公共的課題を発見・分析し、課題の解決に向けた提言を行い、それらを通じて公共政策に対する理解を深めるとともに、社会に対する関心を高め、主体的・能動的に思考・分析するための基礎的技法を習得することを目的とする。なお、具体的な内容や進度は受講生と相談の上、決定する。行政学演習Ⅱは、Ⅰよりも応用的な内容となる。

The goal of this seminar is that students will obtain academic and social skills through reading books and articles about public administration, presentation and discussion. In this term, we will read books and articles on policy styles written in English and then the students will analyze policy style in Japan.

3. 学習の到達目標：

演習における学術書・論文の読解、報告、討論などを通じて学術的な作法と技法を身につけ、大学生が備えておくべき知的技能を習得することが最終的な目標である。

4. 授業の内容・方法と進捗予定：

本講義は、すべてオンライン（リアルタイム型）で授業を実施する。ただし、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていれば対面に変更する可能性もある。授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

授業の内容・方法・進捗予定は以下の通りだが、変更もありうる。

授業目的と合致する学術文献を輪読し、方法論や理論を習得する。さらに、国や地方自治体などで行われている公共政策について、グループもしくは単独で研究を行う。その間、レジュメ等を用いて発表を数回行い、その場で議論し、研究を深める。

今期は、まず、英語で書かれた政策スタイルに関する先行研究を輪読する。つぎに、日本の政策スタイルの特徴について、制度や文化などに焦点を当てながら、検討する。なお、前期の行政学演習Ⅰの教科書（How to Do Public Policy）を読み終えることができなかった場合は、演習Ⅱでも引き続き輪読する予定である。

ガイダンス（第1回）

政策のスタイルを理解する（第2回）

国毎の政策スタイルの違い（第3回）

政策領域毎のスタイルの違い（第4回）

ガバナンスのスタイル（第5回）

アジェンダ・セッティングのスタイル（第6回）

リーダーシップのスタイル（第7回）

政策実施のスタイル（第8回）

日本の政策スタイルの特徴①（第9回）

日本の政策スタイルの特徴②（第10回）

日本の政策スタイルの特徴③（第11回）

政策スタイルと文化①（第12回）

政策スタイルと文化②（第13回）

政策スタイルと文化③（第14回）

まとめ（第15回）

5. 成績評価方法：

平常点（出席、報告、議論への参加）によって評価する。

6. 教科書および参考書：

文献は以下のものなどを予定しているが、詳細は開講時に紹介する。

1. Michael Howlett and Jale Tosun (eds.) The Routledge Handbook of Policy Styles, Routledge, 2021.

2. ミシェル・ゲルファンド 『ルーズな文化とタイトな文化—なぜ〈彼ら〉と〈私たち〉はこれほど違うのか』 (田沢恭子訳)、白揚社、2022年

7. 授業時間外学習：

輪読、調査、報告の準備など。

8. その他：

参加希望者は初回の授業に出席すること。なお、本演習は学部演習との合併授業である。

科目名：	日本政治外交史演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	伏見 岳人	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

l3uergd

実施方法： 対面

1. 授業題目：

日本政治外交史文献購読

2. 授業の目的と概要：

この授業は、日本政治外交史の近年の研究動向を理解するために、複数の研究書を読み比べて、その特徴などを多角的に検討するものである。今年度は、1920年代の日中関係と政党政治に関する研究書を講読する予定である。

3. 学習の到達目標：

日本政治外交史に関する研究書を独力で読み解き、研究動向について理解を深めること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

授業は、担当者による報告と、全体での討論を中心に行う。詳しい授業計画は初回の授業時に説明する。

授業は、原則として対面型で実施する。

1 イントロダクション 2 文献講読(1) 3 文献講読(2) 4 文献講読(3) 5 文献講読(4)
6 文献講読(5) 7 文献講読(6) 8 文献講読(7) 9 文献講読(8) 10 文献講読(9)
11 文献講読(10) 12 文献講読(11) 13 文献講読(12) 14 文献講読(13) 15
まとめ

This objective of the seminar is to learn about political and diplomatic history of modern Japan in the 1920's. Participants need to read Japanese research books on the topic and attend all the classes in Kawauchi campus.

5. 成績評価方法：

平常点(100%)

6. 教科書および参考書：

- ・小林道彦『政党内閣の崩壊と満州事変』ミネルヴァ書房、2010年
- ・服部隆二『東アジア国際環境の変動と日本外交』有斐閣、2001年

7. 授業時間外学習：

授業の予習復習が必要となる。

8. その他：

公共政策大学院との合併授業である。就職活動と両立したい修士2年生には、報告担当回を優先的に選択できるなどの配慮を考えている。

授業担当者の連絡先は以下の通り。fushimi@law.tohoku.ac.jp

科目名：	日本政治外交史演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	伏見 岳人	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

uibr74e

実施方法： 対面

1. 授業題目：

日本政治外交史史料講読

2. 授業の目的と概要：

近代日本の政治や外交について研究する際に必要となる史料の読解力を向上させることを目的とする演習である。参加者は、毎回指定された史料を事前に判読し、その翻刻を作成した上で授業に臨むことになる。

3. 学習の到達目標：

近代日本の資料を独力で読み解き、その意味や背景を理解できるようになること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

くずし字と呼ばれる草書体や変体仮名を含む墨で書かれた史料を丁寧に判読していくことになる。この読解力の向上のためには反復練習が有効であり、そのための努力を厭わない参加者を歓迎する。講読する史料は、参加者の関心を踏まえた上で決定するが、今年度は、後藤新平の日記のうち、関東大震災後の復興院総裁時代などを精読する予定である。また参加人数によっては、近年に発表された専門書の講読を行うこともある。

The aim of this seminar is to help students to learn about the political leadership of Goto Spimpei (1857-1929), who served as the minister of interior affairs, minister of foreign affairs, and governor of Tokyo city hall. Participants are required to read his handwritten diaries and to attend all the classes in Kawauchi campus.

5. 成績評価方法：

報告や議論をもとに総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

テキストのコピーは当方で用意する。くずし字辞典を一冊(児玉幸多編『くずし字用例辞典 普及版』〔東京堂出版、1993年〕など)、各自で購入しておくこと。

7. 授業時間外学習：

テキストの読解には一定の予習時間が求められる。

8. その他：

公共政策大学院との合併授業である。就職活動と両立したい修士2年生には、報告担当回を優先的に選択できるなどの配慮を考えている。

履修を検討している場合は、授業担当者に事前に連絡すること。授業担当者のメールアドレスは、以下の通り。fushimi@law.tohoku.ac.jp

科目名：	国際法演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	西本 健太郎	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google classroom (code:ktx7h7m)

Email: nishimoto@law.tohoku.ac.jp

実施方法： 対面

In person

1. 授業題目：

新型コロナウイルス感染症と国際法 COVID-19 and International Law

2. 授業の目的と概要：

本演習では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な蔓延によって引き起こされた様々な問題とそれへの対応について、国際法の観点から検討する。COVID-19は感染症への国際的対応という直接的な問題を提起したのみならず、国際法が規律する幅広い事項について極めて例外的な事態をもたらし、様々な国際法上の問題を生じさせることになった。このような例外的な状態で生じた諸問題の検討は、既存の法の本質を明らかにすることにつながる。そこで、本演習ではCOVID-19に関連する具体的な問題について、どのような国際法上の規則・制度が関係し、それらについてどのような議論が行われているのかについて詳しく検討する。この検討を通じて、具体的な事案に即して国際法の概念及び規則を運用する能力を向上させることが本演習の目的である。

In this seminar, we will examine, from the perspective of international law, the various issues caused by the global spread of a new coronavirus disease (COVID-19) and the responses to them. COVID-19 has not only raised the direct issue of the international response to infectious diseases but has also created a very exceptional situation with respect to a wide range of matters governed by international law, giving rise to a variety of international law issues. An examination of the problems that have arisen under such exceptional conditions will help to clarify the nature of existing law. Therefore, in this seminar, we will examine in detail the various issues related to COVID-19, the applicable international law rules and regimes, and the ongoing discussions about them. The purpose of this seminar is to improve the students' ability to apply the concepts and rules of international law to specific cases through this exercise.

3. 学習の到達目標：

国際法上の問題について専門的な文献を読解し、具体的な問題に関する国際法の解釈・適用のあり方について理解できるようになること。また、具体的な法的問題について調査し理解した内容を整理して発表し、他の参加者と議論ができるようになること。

This course aims for students to be able to read academic literature on international legal issues and understand how international law

4. 授業の内容・方法と進度予定：

COVID-19について特集した『国際法外交雑誌』120巻1・2号（2021年）所収の諸論文を手がかりに、COVID-19によって生じた国際法上の問題を検討する。まずは論文の読解を通じて、COVID-19が国際法にもたらした問題がどのようなものであるかを把握する。その上で、論文が対象としている問題に関連する既存の国際法の規則・制度がどのようなものであり、既存の法との関係でどのような議論がなぜ行われているのかを整理・分析する。

授業の冒頭の数週は、COVID-19と国際法に関する概略や国際法文献の調べ方等に関する講義に当てる。その後は各回で1つの論文を取り上げ、割り当てられた報告者が論文の要旨と対象となっている国際法上の問題に関する追加的な調査の結果を発表する形で授業を進める。その上で、他の受講者も対象論文を各自検討してきたことを前提に、報告者による発表に対する質疑応答・討論を行う。各参加者は少なくとも1回は報告を行うものとする。ただし、受講者が少数であるなど、以上の方法によりがたい場合には授業方法を変更する場合がある。また、冒頭の講義部分の回数については、参加人数に応じて調整する。

具体的な進行予定は以下の通りである：

1. イントロダクション（第1回）
2. 国際法文献の調べ方（第2回）
3. 「感染症が国際法学に与える影響」（第3回）
4. 「感染症への国際的対応の歴史」（第4回）

5. 「世界保健機関（WHO）・国際保健規則（IHR）の機能」（第5回）
4. 学生による報告とこれに基づく討議（第6回～第14回）
5. 総括（第15回）

本演習は、学部のガイドライン上許容される場合には基本的に対面（または少なくともハイブリッド形式）で実施する。これが困難な場合には、リアルタイムのオンライン授業として実施する。

The issues concerning COVID-19 and international law will be considered based on articles in *Kokusaiho Gaiko Zasshi*, Vol. 120 (1-2) (2021), which featured COVID-19. First, by reading the articles, we will try to understand the problems raised by COVID-19 for international law. Then, we will sort out and analyze the existing rules and institutions of international law that are relevant to the issues covered by the article and consider the discussions that are taking place.

The first few weeks of the course will be devoted to lectures on COVID-19 and international law in general and how to look for international law materials. After that, the course will proceed based on presentations on one of the articles by an assigned presenter. The presentation should consist of a summary of the article and the results of additional research on the international law issues covered in the article. The presentation will be followed by a question-and-answer session and a discussion on the overall topic. Each participant is expected to make at least one presentation. However, the class method may be changed if the above method is not feasible due to a small number of participants. The number of lectures at the beginning will be adjusted according to the number of participants.

The course is planned to proceed as follows:

1. Introduction (week 1)
2. Guide to Conducting Research in International Law (week 2)
3. 「感染症が国際法学に与える影響」(week 3)
4. 「感染症への国際的対応の歴史」(week 4)
5. 「世界保健機関（WHO）・国際保健規則（IHR）の機能」(week 5)
4. Student Presentations and Discussions (week 6 to 14)
5. Concluding Discussions (week 15)

This seminar will be conducted in person (or at least in a hybrid format) if the departmental guidelines allow. If this is not possible, the class will be taught as a real-time online class.

5. 成績評価方法：

授業中の報告内容（60%）及び議論への貢献（40%）によって評価する。

Grading will be based on assignments (60%), and contributions to the discussion in class (40%)

6. 教科書および参考書：

教材を適宜配布する。

Materials will be distributed as appropriate.

7. 授業時間外学習：

事前に検討対象となる文献を読解し、詳細に検討しておくことが授業参加の前提になる。

Students must read and study relevant materials in detail before attending class.

8. その他：

本演習の参加者は「国際法」を履修しているか、国際法の基本的な事項について理解していることが望ましい。本演習は日本語で実施する。

Those intending to participate in this seminar should have taken the course on "International Law" or have a basic understanding of international law. This course will be conducted in Japanese.

科目名：	国際法演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	植木 俊哉	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

質問等は、Google Classroom 又はメールで随時受け付ける。メールアドレス：ueki@law.tohoku.ac.jp

実施方法： 当面はオンラインで実施する。但し、参加者の希望等を踏まえて変更する場合がある。

1. 授業題目：

国際法理論研究

2. 授業の目的と概要：

演習参加者各自が、国際法に関する各自の研究課題や最近の国際判例等に関する報告を行い、それに基づき質疑応答や討論等を行うことを通じて、国際法上の諸問題に関する専門的分析・検討を行う。

The purpose of this seminar is to develop each participant's academic skills of legal analysis on international law through his/her presentations and discussions on legal issues of international law during the seminar.

3. 学習の到達目標：

国際法の専門的研究に取り組むための各種の能力（研究課題の選択や問題設定の仕方、資料収集や分析の方法、報告レジュメの作成方法、プレゼンテーションや質疑応答の技法等を含む）を修得することを目標とする。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

演習参加者各自が、国際法上の研究課題や最近の国際判例等を取り上げて報告を行い、それに基づき参加者全員で質疑応答及び討論等を行う。質疑応答と討論においては、演習参加者全員が積極的にこれに貢献することが求められる。

Each participant shall make his/her presentation either on his/her own reserach topic on international law or on some judgements/decisions by International Trubunals or Courts relating to international law. Based upon these presentations, all participants will make discussions on related legal issues of international law. Each participant is expected to make some contributions through his/her presentations and discussions during the seminar.

5. 成績評価方法：

演習参加者各自が演習において行った報告の内容、毎回の演習での質疑応答や討論等における貢献状況等を総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

演習の中で使用する教科書及び参考書等は特に指定しないが、編集代表植木俊哉・中谷和弘『国際条約集 2022 年版』（有斐閣，2022 年）は毎回の演習の際に使用するのので、各自持参することが望ましい。

7. 授業時間外学習：

授業時間外にも、国際的な諸問題や事件等に幅広い関心と興味を抱くことが重要である。

8. その他：

演習参加者には、国際法に関する基礎的な専門知識と、国際法上の諸課題の探究に取り組む学問的意欲の双方が必要である。

科目名：	国際法演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	西本 健太郎	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google classroom (code: kfzmqgm)

実施方法： In person

1. 授業題目：

The Concept of Due Diligence in International Law

2. 授業の目的と概要：

The objective of this course is for students to acquire a deeper understanding of how the international legal system works by focusing on an important concept of international law that cuts across various fields of international law.

3. 学習の到達目標：

This course aims for students to acquire a better understanding of international law and foster their abilities in conducting research in this field. In particular, this course aims to enhance students' ability to accurately comprehend international law m

4. 授業の内容・方法と進度予定：

The course will be conducted in person unless the COVID-19 situation makes this impossible. Depending on the circumstances, there is a possibility of a transition to a hybrid or fully online format. However, the classes will be held as real-time meetings, even if the hybrid or online format is adopted.

Participants will make presentations (20-30 minutes) based on the allocated book chapter. They will be expected to report on what is discussed in the chapter and to extend the discussion through additional research and evaluation. The presentation will be followed by a discussion by all the participants (The format may be adjusted depending on the number of participants.).

The class will be based on the following book: Heike Krieger, Anne Peters, and Leonhard Kreuzer (eds.), *Due Diligence in the International Legal Order* (Oxford University Press, 2020). Further materials may be designated, depending on the interests of the participants.

The course is planned to proceed as follows (subject to modifications due to the number of participants)

- Introduction to the Course (week 1)
- Due Diligence in International Law (ch. 1) (week 2)
- Due Diligence and General International Law (ch. 2 to 6) (week 3 to 7)
- Student presentations based on selected chapters (week 8 to 14)
- Chapter 21: Conclusion (week 15)

5. 成績評価方法：

Grading will be based on the quality of the presentations (60%) and participation in the discussions (40%).

6. 教科書および参考書：

Heike Krieger, Anne Peters, and Leonhard Kreuzer (eds.), *Due Diligence in the International Legal Order* (Oxford University Press, 2020).

7. 授業時間外学習：

Students will be required to make preparations for their presentations and read the text for the discussions each week.

8. その他：

This course will be conducted in English.

科目名：	国際法演習Ⅲ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	西本 健太郎	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom class code: wrmtc4r

Email: nishimoto@law.tohoku.ac.jp

実施方法： In person (online participation will be possible for participants unable to enter Japan)

1. 授業題目：

Contemporary Issues in the International Law of the Sea

2. 授業の目的と概要：

This course will focus on the current legal regime of the international law of the sea, through discussions on various contemporary issues in this field. It will cover issues such as validity of baselines, navigational rights, exploration and exploitation of natural resources, maritime delimitation, measures against piracy, regulation of international fisheries, protection of the maritime environment and dispute settlement. Special attention will be given to ongoing maritime disputes in Asia.

3. 学習の到達目標：

The goal of the course is for students to acquire an understanding of the legal regime of the international law of the sea, and to improve their ability to make presentations and engage in discussions in English.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

The course will be conducted in person, provided that it is permissible under the faculty's guidelines and that all participants are able to attend. Otherwise, the course will be conducted online in real-time.

This course will start with a short lecture-style introduction. This introductory part will be followed by sessions that will each focus on a specific issue. In this part, each participant (or a group of participants, depending on the size of the class) will be asked to prepare answers and explanations to questions related to a particular issue. Participants will give a 20-minute presentation based on their preparations, which will be followed by a general discussion on the topic. Although some basic material will be provided, participants are expected to do additional research on their own in preparing for the presentations.

The course schedule is as follows (subject to adjustments depending on the number of participants):

1. Introduction (week 1)
2. Guide to Conducting Research in International Law (week 2)
3. Recent Developments in the Law of the Sea (week 3 to 5)
4. Student Presentations and Discussions (week 6 to 14)
5. Concluding Discussions (week 15)

5. 成績評価方法：

Grading will be based on the quality of the presentations (60%) and participation in the discussions (40%).

6. 教科書および参考書：

Materials for the course will be provided by the instructor. Students may wish to refer to the following textbooks for reference.

- Yoshifumi Tanaka, *The International Law of the Sea* (3rd ed., Cambridge University Press, 2019).
- Donald R. Rothwell and

7. 授業時間外学習：

Students will be required to allocate a substantial amount of time to prepare for their presentations and to engage in the discussions.

8. その他：

This course will be conducted in English. Materials will be distributed on Google classroom.

科目名：	国際法演習IV	科目区分：	大学院科目
担当教員：	西本 健太郎	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom (code: lqbsx6a)

実施方法： In person

1. 授業題目：

Fundamental Issues in the International Law

2. 授業の目的と概要：

This course aims to allow students to acquire and extend their knowledge of international law through discussions on fundamental issues in various fields of international law. It will cover topics such as the sources of international law, the relationship between international and national law, the law of treaties, jurisdiction and immunities, state responsibility, the law of international organizations, the use of force, and international dispute settlement.

3. 学習の到達目標：

The goal of this course is for students to acquire a deeper understanding of some of the most important issues in international law. A further goal is for students to improve their ability to engage in discussions in English.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

The course will be conducted in a hybrid format (in-person class with the option of attending online). There is a possibility of a transition to a fully online format if required by the faculty's guidelines concerning COVID-19.

The course will be based on discussions concerning fundamental issues in international law. Each week, a chapter of the textbook will be designated together with a set of questions related to some of the most important issues discussed in the chapter. In each class, participants will be asked to answer and discuss the questions to confirm their understanding of the relevant rules and principles of international law.

The course is planned to proceed as follows:

1. Introduction
2. The Nature and Development of International Law
3. Sources of International Law
4. The Relations of International and National Law
5. International Organizations
6. Common Spaces and Cooperation in the Use of Natural Resources
7. Legal Aspects of the Protection of the Environment
8. The Law of Treaties
9. Sovereignty and Equality of States; Jurisdictional Competence
10. Privileges and Immunities of Foreign States
11. The Conditions for International Responsibility
12. Consequences of an Internationally Wrongful Act
13. International Human Rights
14. Third Party Settlement of International Disputes
15. Use or Threat of Force by States

5. 成績評価方法：

Grades will be assessed based on participation in the discussions in class and the degree to which the participant demonstrated his or her understanding of the issues in answering the questions in class.

6. 教科書および参考書：

James Crawford, Brownlie's Principles of Public International Law (9th ed., Oxford University Press, 2019).

7. 授業時間外学習：

Students will be required to read the designated section of the textbook and think about the questions for discussion in class in advance.

8. その他：

This course will be conducted in English.

科目名：	国際私法演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	井上 泰人	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード： 実施方法： 対面			
<p>1. 授業題目： 国際私法演習 I</p> <p>2. 授業の目的と概要： This course aims at improving the comprehension on Japanese rules on private international law through the analysis of English texts of judgments delivered by the Japanese Supreme Court.</p> <p>3. 学習の到達目標： The students are expected to acquire the exact knowledge on the Japanese case-law of private international law as well as to learn multiple viewpoints to it through the course.</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： In each class meeting, a designated participant, or a reporter, gives a presentation on, such as, the outline of the case, legal problems at issue, the decisions made by the Supreme Court, and the opinion of the reporter, followed by exchange of opinions by all participants. The reporter notices other participants on which case s/he reports in advance so as to give them the opportunity to read and study the text prior to the class meeting.</p> <p>5. 成績評価方法： Class participation.</p> <p>6. 教科書および参考書： English texts of judgments by the Japanese Supreme Court and other relevant resources. (https://www.courts.go.jp/app/hanrei_en/search?)</p> <p>7. 授業時間外学習： Reporters are required to prepare the presentations, whereas other participants are to get prepared for the exchange of opinions before the class meetings.</p> <p>8. その他： Discussion in English is preferred, but not obligatory.</p>			

科目名：	国際関係論演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	戸澤 英典	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

クラスコード：uvtfbf7

なお、割り当てのクラスコードは学部（JB61702: uvtfbf7）、研究大学院（JM28310: gsdictf）、公共政策大学院（JMP0210: v5on5ib）で別々となっているが、 uvtfbf7 に統一して連絡を行う。

実施方法： 対面

1. 授業題目：

国際関係論演習 I Seminar on International Relations I

2. 授業の目的と概要：

この演習では、現代の国際社会で発生する様々な問題に対する分析能力の涵養を目指して、国際関係論の重要トピックに関する文献・資料を読みすすめる。前期の演習では、現在進行中であるロシアによるウクライナ侵攻および新型コロナウイルスによる世界政治の影響を中心に、最新の研究文献や現状分析を読み解く。その際、「ポストコロナの世界」を形づくる諸要因——中国の習近平体制やロシアのプーチン体制など権威主義体制の強まり、バイデン米政権の動向、パンデミック／難民対策にあたる国際機関のあり方、国際・国内で広がる格差——にも目を向けることとなろう。

This seminar focuses on contemporary issues of international relations, such as Russian invasion of Ukraine, global governance struggling with COVID-19, etc. Students completing this course should be able to demonstrate a basic understanding of the major aspects, and the relevant knowledge of law and politics, surrounding World Order with/after COVID-19.

3. 学習の到達目標：

世界政治の重要トピックに関する理解。外国語および日本語の文献および資料読解能力。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

隔週の授業では、上記のトピックに関する内外の文献を集中的に講読する。さらに、最新の状況に関する報道や論評等も各自に報告してもらいながら授業を進める。

5. 成績評価方法：

授業中の報告および平常点で評価。

6. 教科書および参考書：

講読する文献および参考文献については開講時に指定する。

7. 授業時間外学習：

授業前は指定文献を講読し、割り当てのものについてはレジュメを作成すること。授業後は、各自の関心事項を発展的に深めるべく、関連文献に当たること。

8. その他：

履修希望者は4月8日（金）4限／4月15日（金）4限の時間帯に行う説明会のどちらかに参加すること。
大学院演習と合併。

科目名：	国際関係論演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	戸澤 英典	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

クラスコード：3nzxx3g

実施方法： 対面

1. 授業題目：

国際関係論演習Ⅱ Seminar on International Relations II

2. 授業の目的と概要：

この演習では、現代の国際社会で発生する事象や問題に対する分析能力の涵養を目指して、国際関係論の重要トピックに関する文献・資料を読みすすめる。

3. 学習の到達目標：

日本語文献・外国語文献（主に英語）の文献読解能力と、ペーパーの作成能力。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

東西冷戦終焉により国際関係論の「パラダイム転換」が生じてから既に 30 年近くの時が過ぎたが、ポスト冷戦後の世界秩序は今なお不透明なままであり、「新世界無秩序」という表現も（残念ながら）的を得ていたとすら思われる現状となっている。特に、2020 年春にパンデミックとなり世界を一変させた COVID-19 および 2022 年春のロシアによるウクライナ侵攻は、人類の生存にすら関わるものであり、その帰趨は予断を許さない。加えて、COVID-19 以前からの諸問題——中国の習近平体制やロシアのプーチン体制など権威主義体制の強まり、国際・国内で広がる格差社会の進行とリベラリズムの退潮、グローバル・ガバナンスの機能不全——は深刻度を増している。

そこで、後期の演習では、時事的なテーマをいくつか選び、理論的な研究とも突き合わせながら検討していく。具体的なトピックについては、開講時の国際情勢を踏まえ、受講者とも相談の上で決定する。また、アクチュアルな問題を扱う上で必須であるインターネットでの情報収集も行い、オンライン資料の分析能力の向上も図る。

This seminar serves as a forum for discussing new research topics in the field of International Relations (IR). The topics will be chosen according to participants' interests. Students completing this course should be able to demonstrate a basic understanding of the major aspects of international relations and write an analytical paper on a chosen topic.

5. 成績評価方法：

授業中の報告および学期末のレポート（ゼミ論文）で評価。

6. 教科書および参考書：

全員で講読する文献および各トピック別の参考文献については追って指示する。

7. 授業時間外学習：

授業前は指定文献を講読し、割り当てのものについてはレジュメを作成すること。授業後は、各自の関心事項を発展的に深めるべく、関連文献に当たること。

8. その他：

履修希望者は 10 月 7 日（金）4 限／10 月 14 日（金）4 限の時間帯に行う説明会のどちらかに必ず参加すること。

学部演習と合併。

科目名：	外国法文献研究Ⅰ（英米法）	科目区分：	大学院科目
担当教員：	芹澤 英明	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコード fysrdxr

講義室：片平 206 演

実施方法： 対面

1. 授業題目：

最新アメリカ法判例・文献研究

2. 授業の目的と概要：

ここ数年の間に出されたアメリカ合衆国最高裁判決を原文(英文)、及び関連文献(判例評釈・論文類)を精読することにより、英米法（特にアメリカ法）に対する理論的・学問的理解を深めるための基礎的な訓練を行う。

The focus is on close reading of selected recent U.S. Supreme Court cases and related commentaries and law review articles.

Students are invited to train themselves to acquire the basic skills and knowledge necessary to the understanding of American legal practice and recent theoretical developments of American law.

3. 学習の到達目標：

研究者志望の者だけでなく、実務法曹を目指す者が、将来、法律実務（国際法務を含むがそれに限らない）にたずさわりながら、大学等の研究機関で、より高度な法学研究を続けるための基礎力を養成する。

英米法分野を研究するときに必要とされる判例読解能力を涵養し、判例に内在する理論の分析方法を修得した上で、理論と実務の緊密な関連性について理解する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

授業は、個人指導ないしグループ指導のためのテュートリアル（tutorial）方式で行う。

1. ガイダンス
2. 判例・文献の解説・選択
3. テュートリアル（予習を前提にした文献読解・質疑応答・個別指導）
4. //
5. //
6. //
7. //
8. //
9. //
10. //
11. //
12. //
13. ゼミレポート作成指導・添削
14. //
15. ゼミレポートの提出および講評

5. 成績評価方法：

最終ゼミレポートにより評価する。ゼミレポートは、脚注付きの小論文形式とし、内容については、リーガル・リサーチを行った上で、授業で精読した文献ないし判例の紹介を行うものとする。

6. 教科書および参考書：

合衆国最高裁判決の原文プリント。

その他、判例読解のために参考となりかつアメリカ法理論の傾向を示す文献類をプリントして配布する。

7. 授業時間外学習：

8. その他：

研究大学院修士課程・博士課程と法科大学院課程との共通科目として開講される。片平キャンパスの法科大学院で開講される。

科目名：	外国法文献研究Ⅲ（フランス法）	科目区分：	大学院科目
担当教員：	嵩 さやか	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

質問は、授業後に受け付けるほか、随時 Google Classroom（クラスコード：qn3xwex）上で受け付ける。

実施方法： 原則として、対面で実施するが、新型コロナウイルス感染症の状況によりオンライン（リアルタイム）に切り替える場合がある。

1. 授業題目：

外国法文献研究Ⅲ（フランス法）

2. 授業の目的と概要：

この授業は、フランス法に関心を持つ研究大学院の学生を対象に、法についてフランス語で書かれた文献を読むことを通じて、フランスの法・文化・社会に対する理解を深めることを目的とする。さらに、フランスを鏡として、日本法の理解を深めることも、重要な目的である。

3. 学習の到達目標：

フランス語の法律文献を正確に訳すことができ、さらにその内容について理解し検討することができる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

1. 授業内容

フランス法に関するフランス語の文献を受講者とともに読解し、日本法と比較しながらフランス法制の特徴等を検討する。

2. 教育方法

各受講者が、毎回、教材の指定された部分の翻訳を提出し、他の受講者と担当教員とその内容について検討・質疑を行う形式で進める。なお、必要に応じてフランスの法律等を参照できるよう、PC等の持参が望ましい。

本演習は、対面実施の予定であるが、新型コロナウイルス感染症の状況によりオンラインに変更する可能性がある。レジュメ等の配布は、Google Classroom（クラスコード：qn3xwex）にて行う。

3. 予定

第1回 ガイダンス・教材の説明

第2回 ”L'articulation entre la solidarité familiale et la solidarité collective”第2部第1章イントロダクションの読解・質疑応答

第3回 上記資料 第2部第1章第1節の一部の読解・質疑応答

第4回 上記資料 第2部第1章第1節の一部の読解・質疑応答

第5回 上記資料 第2部第1章第1節の一部の読解・質疑応答

第6回 上記資料 第2部第1章第1節の一部の読解・質疑応答

第7回 上記資料 第2部第1章第1節の一部の読解・質疑応答・日本法との比較

第8回 上記資料 第2部第1章第2節の一部の読解・質疑応答

第9回 上記資料 第2部第1章第2節の一部の読解・質疑応答

第10回 上記資料 第2部第1章第2節の一部の読解・質疑応答

第11回 上記資料 第2部第1章第2節の一部の読解・質疑応答

第12回 上記資料 第2部第1章第2節の一部の読解・質疑応答

第13回 上記資料 第2部第1章第2節の一部の読解・質疑応答・ゼミレポートの作成方法指導

第14回 上記資料 第2部第1章第2節の一部の読解・質疑応答・日本法との比較

第15回 上記資料 第2部第1章の総括と質疑応答・日本法との比較

※教材読解の進捗は受講者の人数・フランス語能力等によって変動する。

各回の授業内容についてはその都度具体的に周知する。

5. 成績評価方法：

毎回の授業における翻訳および質疑応答、授業への取り組みの状況を評価対象とする「平常点」（50%）と、「レポート試験」（50%）による。なお、成績評価に際しては、上記の＜学修の到達目標＞が指標の1つとなる。

6. 教科書および参考書：

Floriane Maisonnasse, L'articulation entre la solidarité familiale et la solidarité collective, LGDJ, 2016の一部。

7. 授業時間外学習：

次回分として指定された箇所の邦語訳を作成する。その他の詳細は、授業中に指示する。

8. その他：

質問は適宜、授業後に受け付ける。

本授業は法科大学院との合併により開講する。

科目名：	ヨーロッパ政治史演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	平田 武	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：amg3zuw

質問等は授業内に受け付ける。

実施方法： 対面での実施を予定しているが、COVID-19の感染状況によっては、オンラインでの開催となる場合もある。

1. 授業題目：

「国家形成の観点から見たハプスブルク帝国の近代史」

2. 授業の目的と概要：

近年のハプスブルク君主国史研究においては、後継諸国の国民史的視点に基づくバイアスから自由な、むしろ国民史的視点には批判的な立場からの修正史の試みが盛んに行われているが、こうした修正史の成果を踏まえて、国家形成の観点からハプスブルク君主国の近代史（18世紀末から第一次大戦まで）について書かれた著書を扱う。王朝国家のアナクロニズム的残滓であるとか、「諸民族の牢獄」であるとか、経済後進地域であったといった描写は、いずれも近年の修正史の批判に晒されており、同書はヨーロッパ列強に共通する国家形成や多様な住民の統合といった課題に直面した一大国が経験した近代を、今日の欧州統合が多文化主義の文脈の中で進められていく状況と類似した過程として捉えて、ハプスブルク君主国の近代史を描こうと試みている。

本演習では、昨年に続き、この著書を題材として取り上げ、ハプスブルク君主国の近代史を検討する。

John Deak, *Forging a Multinational State: State Making in Imperial Austria from the Enlightenment to the First World War* (Stanford, Cal.: Stanford University Press, 2015).

This seminar deals with state-building in the Habsburg Empire from the late 18th century to the World War I from the view-point of multiculturalism based on the text cited above.

3. 学習の到達目標：

英語で書かれた歴史学文献を購読して、その内容を咀嚼した上で、学問的・批判的に討論する能力を身につけること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

演習は、毎回教材のうちの30～50頁ほどを（参加者の人数等を勘案してペース配分を決める）、担当者にレジュメ（B4三枚～四枚程度）を作成して報告してもらい、それに基づいて討議を行う形式で進める。演習参加者には、毎回の出席と議論への参加が要請されることは言うまでもなく、少なくとも1回は報告を担当してもらうことになる。参加者には毎回相当量の英文を読み進めていく根気が必要となる。

5. 成績評価方法：

参加者の報告と、質疑・討論への参加に基づいて行う。

6. 教科書および参考書：

教材はこちらで用意する。参考文献は、演習の中で適宜紹介する。

7. 授業時間外学習：

毎回の演習の前に参加者は、テキストの該当箇所を一読しておくこと。報告者は、担当箇所を読んだ上で、レジュメを作成する。レジュメの作成には、最低でも2週間はかかると考えた方がよい。レジュメの事前チェックを要望する場合には、教員と日程調整を行うこと。

8. その他：

参加希望者は開講日の説明会（追ってクラスルームで連絡する）に出席すること。学部・公共政策大学院と合併。他研究科（修士課程）大学院生の履修も認める。

科目名：	ヨーロッパ政治史演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	平田 武	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：jiwf2de

質問等は授業内に受け付ける。

実施方法： 対面での実施を予定しているが、COVID-19の感染状況によっては、オンラインでの開催となる場合もある。

1. 授業題目：

「国家形成の観点から見たハプスブルク帝国の近代史」

2. 授業の目的と概要：

近年のハプスブルク君主国史研究においては、後継諸国の国民史的視点に基づくバイアスから自由な、むしろ国民史的視点には批判的な立場からの修正史の試みが盛んに行われているが、こうした修正史の成果を踏まえて、国家形成の観点からハプスブルク君主国の近代史（18世紀末から第一次大戦まで）について書かれた著書を扱う。王朝国家のアナクロニズム的残滓であるとか、「諸民族の牢獄」であるとか、経済後進地域であったといった描写は、いずれも近年の修正史の批判に晒されており、同書はヨーロッパ列強に共通する国家形成や多様な住民の統合といった課題に直面した一大国が経験した近代を、今日の欧州統合が多文化主義の文脈の中で進められていく状況と類似した過程として捉えて、ハプスブルク君主国の近代史を描こうと試みている。

本演習では、前期に続き、この著書を題材として取り上げ、ハプスブルク君主国の近代史を検討する。

John Deak, *Forging a Multinational State: State Making in Imperial Austria from the Enlightenment to the First World War* (Stanford, Cal.: Stanford University Press, 2015).

This seminar deals with state-building in the Habsburg Empire from the late 18th century to the World War I from the view-point of multiculturalism based on the text cited above.

3. 学習の到達目標：

英語で書かれた歴史学文献を購読して、その内容を咀嚼した上で、学問的・批判的に討論する能力を身につけること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

演習は、毎回教材のうちの30～50頁ほどを（参加者の人数等を勘案してペース配分を決める）、担当者にレジュメ（B4三枚～四枚程度）を作成して報告してもらい、それに基づいて討議を行う形式で進める。演習参加者には、毎回の出席と議論への参加が要請されることは言うまでもなく、少なくとも1回は報告を担当してもらうことになる。参加者には毎回相当量の英文を読み進めていく根気が必要となる。

5. 成績評価方法：

参加者の報告と、質疑・討論への参加に基づいて行う。

6. 教科書および参考書：

教材はこちらで用意する。参考文献は、演習の中で適宜紹介する。

7. 授業時間外学習：

毎回の演習の前に参加者は、テキストの該当箇所を一読しておくこと。報告者は、担当箇所を読んだ上で、レジュメを作成する。レジュメの作成には、最低でも2週間はかかると考えた方がよい。レジュメの事前チェックを要望する場合には、教員と日程調整を行うこと。

8. その他：

参加希望者は開講日の説明会（追ってクラスルームで連絡する）に出席すること。学部・公共政策大学院と合併。他研究科（修士課程）大学院生の履修も認める。

科目名：	法律フランス語演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	榎橋 明香	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡は、Google Classroom（クラスコード：mnqfd46）を通じて行う予定である。

実施方法： 対面又はオンライン（リアルタイム）

1. 授業題目：

法律フランス語演習

2. 授業の目的と概要：

フランス法に関する基礎的な知識を身につけるため、フランス法の法学入門の教科書を講読する。

To acquire basic knowledge about French law, we read an introductory textbook.

3. 学習の到達目標：

今後フランス法を自分自身で研究していくために必要な基礎的な知識や語彙を獲得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

この授業は、オンライン（リアルタイム型）で行い、授業の連絡及び講義資料の配信は Google Classroom を利用する。ただし、必要とされる新型コロナウイルス感染症対策の状況に応じ、教室での対面形式とする可能性もある。決定次第、Google Classroom のストリームによって通知する。

民法及び比較法を専門とするモンプリエ大学のレミー・カブリヤック教授による『法学入門』を教科書として用いる。講義は、受講者が教科書の指定された部分について予習していることを前提に、担当教員と受講者との質疑応答により進行する。現段階では、以下のようなテーマを予定している。

- 1 法の性質，役割及び基礎
- 2 法の改正，適用及び調査
- 3 民法の進化と現在の状況
- 4 法における分類
- 5 法律の階層
- 6 法律の場所的・時間的適用範囲
- 7 判例と慣習
- 8 法の一般原則，学説
- 9 法源の動揺と対策
- 10 立証
- 11 審級
- 12 訴訟手続の展開
- 13 法曹
- 14 （調整日 第1回から第13回の進行に遅れがなかった場合はテーマ講義を行う）
- 15 総括と期末試験

5. 成績評価方法：

授業への参加態度を 50%，期末試験の結果を 50%として評価する。

6. 教科書および参考書：

R.CABRILLAC, Introduction générale au droit, Dalloz, 14e édition.

なお，必要な条文は適宜配布する。

7. 授業時間外学習：

予習としては，毎回指定の教科書を 20 頁程度読み，概要を理解する必要がある（教科書は分かりやすい表現で書かれているので，それほど心配する必要はない）。復習としては，授業での解説を念頭に置き，教科書をもう一度正確に読むことが望ましい。

8. その他：

参加を希望する者は，メール又は Google Classroom を通じて担当教員に事前に必ず連絡を行ってほしい（参加者の有無を把握するとともに，第1回の資料を事前に配布するためである）。

科目名：	民法研究会	科目区分：	大学院科目
担当教員：	鳥山 泰志	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	4
		週間授業回数：	変則
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom／クラスコード：tupvuxp

実施方法： 当面の間はオンライン（リアルタイム）とする。

1. 授業題目：

民法研究会

2. 授業の目的と概要：

民事法学の研究課題又は民事分野の重要判例について研究報告して議論を行う。

In this workshop, the participants report and discuss the topics of civil law or the important jurisprudences.

3. 学習の到達目標：

民事法学の研究者としての基礎的能力を培う。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

・本演習では、主として次の2つの事項を扱う。

- ① 近時の最高裁判決の判例評釈
- ② 民事法に関わる個別のテーマの研究

・演習の進め方としては、各回に、参加者の報告に基づき、参加者全員で議論する。原則として、所定回の報告を行うことが単位取得の要件である。

・本演習は、「民法研究会」として、民法担当教員が全員出席するほか、本学及び他大学の民事法研究者等が参加することもある。

・演習は、原則として月1回程度行われる。その日程及び内容の詳細については、その都度掲示などにより通知する。

5. 成績評価方法：

報告の内容、議論参加の状況に基づいて、行う。なお、所定回数の報告を行うことが単位取得の要件となる。

6. 教科書および参考書：

毎回、事前に参考文献を通知する。

7. 授業時間外学習：

事前に通知される参考文献により十分な予習をして参加することが求められる。

8. その他：

科目名：	社会法研究会 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	桑村 裕美子、 嵩 さやか	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	変則
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

基本的にメールにて連絡する。

Google Classroom のクラスコード：ph4b4xx

実施方法： オンライン（リアルタイム）。ただし、今後の COVID-19 の状況次第では、対面に切り替える場合もある。

1. 授業題目：

社会法研究会 I

2. 授業の目的と概要：

本研究会は、労働法・社会保障法の研究者・実務家および大学院生で構成され、判例評釈や研究報告を通して先端的なテーマ・論点について議論し、より専門的なテーマについての理解を深めることを目的とする。さらに、本研究会での報告を通じて、判例評釈の方法や研究の進め方について学ぶことも重要な目的のひとつである。

This seminar is composed of researchers, practitioners (lawyers etc.), and graduate students of labor law and social security law. By discussing advanced themes and issues through judicial precedents and research reports, it aims to deepen the understanding of more specialized themes and to learn how to interpret judicial precedents and how to conduct research.

3. 学習の到達目標：

第一に、研究会で交わされる議論を理解し、それについての自分なりの意見・議論を展開できるようにする。
第二に、判例評釈や報告を自ら行うことにより、評釈や研究報告を行う能力を身につける。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

<授業内容>

各回で取り扱う判例あるいは報告テーマについて各自予習していることを前提に、報告者が行った判例評釈や研究報告について全員で自由に議論する。

<本研究会の進め方について>

本研究会は、昨年度に引き続きオンラインで実施する予定であるが、今後の COVID-19 の状況に応じて変更する可能性がある。

研究会に履修登録した場合には、次回研究会の内容・レジュメ等をメールにより連絡する。

5. 成績評価方法：

研究会への出席状況、発言、報告などに基づく平常点にて評価する。

6. 教科書および参考書：

特になし。

7. 授業時間外学習：

各回で取り上げられる判例や報告テーマについて予習して研究会に臨むこと。研究会後は、研究会での議論を振り返り、さらに文献等にあたりながら検討を深めることが望ましい。

8. その他：

科目名：	刑事法判例研究会 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	成瀬 幸典	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	変則
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

naruse@law.tohoku.ac.jp クラスコードは joa7wmm です。

実施方法： 対面式で行うことを予定していますが、新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては、オンライン形式で行います。

1. 授業題目：

刑事法判例研究会

2. 授業の目的と概要：

本授業科目は、刑法、刑事訴訟法、少年法及び刑事政策等のいわゆる刑事法分野の研究者、実務家、大学院生等が出席する研究会における刑事法に関する判例研究を通して、刑事法に関する専門的な理解を深めることを目的とする。

The aim of this course is to improve students' expert understanding of criminal law and criminal procedure through research on a criminal case in a workshop. Researchers, practitioners, graduate students, who specialize in criminal law, criminal procedure, juvenile law, and criminal policy, attend the workshop.

3. 学習の到達目標：

報告者の報告を素材にした議論を通じて刑事判例に関する理解を深めるとともに、判例評釈や判例研究を行う能力を身につける。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

報告者が行う判例に関する研究報告を素材にして、参加者全員で議論を行う。

具体的な予定は、講義（本研究会）の第1回目に、参加者と相談のうえで決定する。

5. 成績評価方法：

講義（本研究会）への出席状況、発言、報告などを基礎に総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

なし。

7. 授業時間外学習：

研究会当日までに、取り上げられる判例・裁判例を精読し、関連する文献についても調査・検討しておくこと。

8. その他：

科目名：	比較政治学演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	横田 正顕	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom を通じて連絡を行う。クラスコード：rh52god

実施方法： 初回（説明会）のみオンライン（リアルタイム）で実施し、以後演習室にて対面方式で行う（国外在住者についてはオンラインでの参加が可能）。

1. 授業題目：

Thinking Clearly with Data を読む①

2. 授業の目的と概要：

数値データの統計解析は、現代の比較政治学の根本的な手法の一つとなっている。この授業では、著名な政治学者の手になる最新の教科書を使い、統計解析の必要な基本的な概念や考え方を、政治学的なテーマに沿って習得することを目的とする。

3. 学習の到達目標：

- 1) 統計的な因果分析に関わる初歩的な考え方と、その具体的な応用を習得する。
- 2) 統計データを用いた政治学分析の意義と限界について学ぶ。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

この演習は初回（説明会）を除いて全8回でテキストの前半部分を読み終える。CHAPTER 1 Thinking Clearly in a Data-Driven Age は各自で読んでおくこと。以下、演習では CHAPTER2～9 を扱う。

参加者は各章を読んでその内容を理解し、疑問点や感想のほか、各章末の演習問題を解いてコメントペーパーとして事前に提出のこと。

授業では、各章における考え方や分析概念・基本用語の理解を踏まえて、演習問題に対する答えを考えていく。いわゆる報告者を置くことはないが、各自は自分が書いたコメントや解答について説明できるように準備しておくこと。

CHAPTER 2 Correlation: What Is It and What Is It Good For?

CHAPTER 3 Causation: What Is It and What Is It Good For?

CHAPTER 4 Correlation Requires Variation

CHAPTER 5 Regression for Describing and Forecasting

CHAPTER 6 Samples, Uncertainty, and Statistical Inference

CHAPTER 7 Over-Comparing, Under-Reporting

CHAPTER 8 Reversion to the Mean

CHAPTER 9 Why Correlation Doesn't Imply Causation

5. 成績評価方法：

最低限の義務としての報告...65%

授業への積極的参加度...25%

出席...10%

6. 教科書および参考書：

主テキスト： Ethan Bueno De Mesquita abn Anthony Fowler, Thinking Clearly With Data: A Guide to Quantitative Reasoning and Analysis, Princeton UP., 2021/11/16（参考文献については授業中に適宜紹介する。）

テキストは各自で購入することも可能であるが、未着等の危険性を考慮して教員側で調達する。個別の論点に関する参考図書は授業中に紹介する。

7. 授業時間外学習：

- 1) 各章の内容をよく読み込んで趣旨を理解する。
- 2) 各章末の演習問題を、他の参考書などを参照しながら自分の力で解いてみる。

8. その他：

この演習は研究大学院前期課程と公共政策大学院との合同授業とする。

科目名：	中国政治演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	阿南 友亮	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：tjdbd6y

実施方法：リアルタイム

1. 授業題目：

2. 授業の目的と概要：

本演習では、日本を代表する東洋史研究者の宮崎市定の代表的な著作を精読し、東洋史の視座に関する基本的な理解を修得し、それを近代以降の時代（中華民国、中華人民共和国）を扱った中国研究に活用する方法を検討する。

This seminar will read several classics of Oriental Studies written by Ichisada Miyazaki and will discuss how to apply the various perspectives of Oriental Studies to Modern China Studies.

3. 学習の到達目標：

大学院レベルで中国政治研究を進めるうえで最低限必要となる東洋史の視座に関する基本的な理解の修得。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

受講学生は、宮崎市定の著作に関して定期的にプレゼンテーションをおこないつつ、他の学生の報告に対するコメントやディスカッションをおこなうことが求められる。

学期末には、課題図書の内容を踏まえた個人研究の報告をおこない、その内容を反映した期末レポートを提出することが求められる。

5. 成績評価方法：

受講態度（10%）、教材に関する複数回のプレゼンテーション（合計30%）、期末プレゼンテーション（20%）、ディスカッションへの貢献度（10%）、期末レポート（30%）から総合的に判断する。

6. 教科書および参考書：

教科書

宮崎市定『宮崎市定全集』第一巻、第二巻、第十七巻、岩波書店、1993年。

7. 授業時間外学習：

本演習を受講する学生は、授業時間外において、次週の授業で扱う教材を読み、プレゼンテーション、コメント、ディスカッションの準備をすることが求められる。また、期末レポートの執筆も授業時間外の重要な作業となる。

8. その他：

本演習は、Google Hangouts Meet を使ってオンライン形式でおこなう。履修学生は、東北大の Google Classroom の以下のクラスコードにアクセスし、そこで Google Hangouts Meet のアドレスを確認し、授業開始の5分前にアクセスをすること。

クラスコード：tjdbd6y

本演習は、中国政治に関する専門性の高い内容となっている。中国政治史に関する中国語の論文を読解するのに必要な中国語の能力が求められる。中国政治を専攻していない学生は、事前に担当教員と相談し、許可を得たうえで履修すること。

本演習は、修士課程・博士課程の合同演習という形をとる。

科目名：	中国政治演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	阿南 友亮	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Class code: 6vtbp2X

実施方法： On-line Real Time

1. 授業題目：

Seminar on Chinese Politics

2. 授業の目的と概要：

This seminar will contemplate over the relationship of nations states and social revolutions by examining monographs which deal with this topic.

3. 学習の到達目標：

Deepening one's understanding on comparative politics dealing with the formation of nation states including China.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

In the first half of this semester, students will be required to take part in discussions regarding the text book. In the second half of this semester, students must conduct their own research on a topic related to modern Chinese politics.

Students will be require to give multiple presentations and participate in each week's discussion.

5. 成績評価方法：

Attendance rate(10%), presentation(40%) , contribution to discussion(20%), term paper(30%)

6. 教科書および参考書：

Text book:

Theda Scokpol, States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia, and China. Cambridge University Press, 1979.

7. 授業時間外学習：

Over the semester, students will be required to prepare multiple oral presentations and a term paper.

8. その他：

Undergraduate-level training on contemporary Chinese politics is required in order to attend this seminar. Students who do not have such academic background must consult with the professor before registration.

English language fluency equivalent to 80 points or higher in a TOEFL-iBT examination is required.

Class Code: 6vtbp2X

科目名： グローバル・ガバナンス論

科目区分： 大学院科目

担当教員： 他

開講期： 2022

単位数： 2

授業形態： 演習

使用言語： 英語

週間授業回数： 1回毎週

配当学年： -

対象学年： -

実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

実施方法：

1. 授業題目：
2. 授業の目的と概要：
3. 学習の到達目標：
4. 授業の内容・方法と進度予定：
5. 成績評価方法：
6. 教科書および参考書：
7. 授業時間外学習：
8. その他：

科目名：	海洋法	科目区分：	大学院科目
担当教員：	西本 健太郎	開講期：	2022
授業形態：	講義	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom class code: jrm7zxe

Email: nishimoto@law.tohoku.ac.jp

実施方法： Online On-Demand Course (until further notice)

1. 授業題目：

The Law of the Sea

2. 授業の目的と概要：

This course will provide students with an overview of the law of the sea, which is a field of public international law addressing the uses of the oceans. It will be provided as a lecture describing the current legal regime of the oceans, primarily based on the United Nations Convention on the Law of the Sea (UNCLOS). It will examine how the law has been put into practice, and discuss the challenges faced by the current legal regime.

3. 学習の到達目標：

The goal of this course is for students to acquire basic knowledge of concepts, rules and precedents in the field of the law of the sea. A further goal is for students to enhance their abilities in applying rules of international law to draw conclusions a

4. 授業の内容・方法と進度予定：

This course will be provided as a lecture, covering the law of the sea in 15 weeks. The course will be provided in on-demand video format until the damage to the classroom from the earthquake is repaired. Once the classroom is operational, the course will be conducted in person (with an option of online participation, if there are overseas participants due to COVID-19 restrictions). The course will proceed as follows (subject to minor adjustments as necessary):

1. The history and structure of the law of the sea
2. Baselines (including the regime of islands)
3. Internal waters, territorial sea and contiguous zone (1)
4. Internal waters, territorial sea and contiguous zone (2)
5. High seas and the Area
6. Continental shelf and exclusive economic zone (1)
7. Continental shelf and exclusive economic zone (2)
8. Continental shelf and exclusive economic zone (3)
9. Management of living resources
10. Protection of the marine environment (1)
11. Protection of the marine environment (2)
12. Marine scientific research
13. Maritime law enforcement
14. Dispute settlement (1)
15. Dispute settlement (2)

5. 成績評価方法：

Grading will be based on assignments (60%), and a term-end paper (40%). There will be no written examination at the end of the term.

Assignments (60%): Each week, students will be required to submit assignments online through Google Classroom. Each assign

6. 教科書および参考書：

Necessary materials will be distributed through Google Classroom. Students may wish to refer to the following textbooks for reference.

- Yoshifumi Tanaka, The International Law of the Sea (3rd ed., Cambridge University Press, 2019).
- Donald R. Rothwell

7. 授業時間外学習：

In addition to preparing for the class in advance and reviewing what was learned through the lecture, students will be required to spend time each week preparing for the assignments.

8. その他：

This course will be conducted in English.

科目名：	日本外交政策入門	科目区分：	大学院科目
担当教員：	今西 淳	開講期：	2022
授業形態：	講義	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2（隔週）
		実務・実践的授業：	○

連絡方法とクラスコード：

グーグルクラスルームを用いる

クラスコード：iqfymqc

招待リンク：<https://classroom.google.com/c/NDYxNzg4MDIxMDI4?cjc=iqfymqc>

担当教員へ連絡は、jun.imanishi.b2@tohoku.ac.jp

実施方法： 対面

1. 授業題目：

日本外交政策入門

※外務省の実務家が講義する本科目は、今回（2022年度前期）が最終講義となる、外交、国際関係に関心がある学生は是非受講ください。

2. 授業の目的と概要：

※他学部受講 歓迎

テレビ、新聞等のメディアで、国際情勢が報道されない日はない、国際情勢が我々の生活と密接な関連がある証左である。

国際社会の平和と安定を確保するためには、日本が主体的に平和と安定を確保するための環境の醸成することが求められる。

今日の外交政策は、伝統的な二国間関係のみならず、国連を含めマルチ外交など多岐にわたる他、感染症対策、経済安全保障、持続可能な開発、宇宙開発等様々な外交課題に直面している。そこで本講座では、外務省から派遣されている実務家教員が、至近の時事問題を取り上げながら、各課題・テーマについて、外交現場での対応を踏まえつつ、複眼的な読み解き方や、外交交渉の実態を学ぶ機会を提供する。

授業の前半は講師からの時事問題の解説、講義、講義の後半でグループ・ディスカッション等を行う。

日本に駐在する外国の大使・外交官を招き、話を聞く機会も設ける予定。

”Japan's Foreign Policy”

This course offers students an opportunity to learn about current international issues and how the Government of Japan and other countries have dealt with these agendas. The course provides neither theories nor academic analysis, but analytical views and practical solutions based on working experiences as a diplomat and a government official of Ministry of Foreign Affairs. As guest speakers, Ambassadors or diplomats stationed in Japan, if the circumstances of the COVID-19 allow and the schedule is adjusted, are to be invited to give a lecture on their view on our the bilateral relations.

3. 学習の到達目標：

本講義は、その内容を覚えることが主眼ではなく、取り上げた国際問題の現状、それに対する政府の政策、取組を踏まえ、自分が外交官であればどう考え、対応するかという視点で思考力を磨き、自分の主張を展開できる力を養うことを目指す。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

※授業時間内に書くリアクションペーパーの提出をもって出席とする。

※出席できない場合には、「事前に」TA及び担当教員に連絡すること。

以下の内容を予定しているが、特別講義、国際情勢等を踏まえつつ、今後変更することもある。

○外交官・外務省の役割

○日本外交総論

○国連外交 1（国連、安全保障理事会）

○国連外交 2（平和維持活動等国連の諸活動， 国際機関で働く邦人職員）

○国連外交 3（人間の安全保障）

○国連外交 4（持続可能な開発（SDG s））

○開発援助 総論

- 開発援助（国際保健、防災）
- 経済外交
- 経済安全保障
- 自由で開かれたインド太平洋、一帯一路
- 北東アジア情勢（日韓・日朝・日中関係）
- 欧州情勢
- 外交儀礼（要人接遇、駐日大使館）
- 文化広報外交（パブリックディプロマシー）
- 駐日大使・外交官等による講話（英語／日本語） 等

5. 成績評価方法：

以下の通り授業への出席を重視する（成績の50%）。

- 出席（含むグループ演習）、授業時間内のリアクションペーパーの提出をもって出席とする。（Attendance and in-class assignment(Reaction paper) (50.0%)
- 学期末試験（Final exam）（50.0%）

6. 教科書および参考書：

外務省 HP、外交青書、開発協力白書に加え、
外交史、国際政治史を学ぶ基本書としては、

- 日本外交史概説 : 池井 優 : 慶応通信
- 国際政治史 : 岡 義武 : 岩波現代文庫
- 戦後日本外交史 : 五百旗頭 真 : 有斐閣アルマ

より具体的な課題を学ぶものとして、

- 日本の外交 第5巻 対外政策課題編 大芝 亮編 岩波書店
至近の国際情勢を学ぶものとして
- 外交専門誌『外交』

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/ga>

7. 授業時間外学習：

至近の国際情勢については、新聞の国際面の解説記事、雑誌の国際問題に関する記事、
また各テーマの現在の日本の外交政策、取組を確認するには、外務省のHP、外交青書、開発協力白書等に目を通すことが望ましい。

「外交青書」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bluebook/index.html>

「開発協力白書」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hakusyo.html>

8. その他：

- 他学部受講可
- 片平エクステンション棟（201）で開講するため、川内からの移動で遅れる場合には配慮します

科目名：	国際政治経済論演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	岡部 恭宜	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Class code: yo23slg

Link to Meet: <https://meet.google.com/afd-woms-xnn>

実施方法： Hybrid (Face-to-face and online). Students are required to register for the course at Google Classroom, through which class information will be provided.

1. 授業題目：

Seminar on International Political Economy A/I

2. 授業の目的と概要：

This seminar is designed primarily for graduate students who are interested in exploring foreign policy and domestic politics from the international political economy (IPE) perspective. It has two parts: Reading of seminal works and research presentation by students. (Note: Working language is English.)

3. 学習の到達目標：

This seminar will help students (i) to deepen their understanding on theories of IPE and learn their strengths and weaknesses, and (ii) to develop their skills in research and presentation.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

In the part of reading, selected topics will include diplomacy, foreign policies, development aid, international relations, and comparative politics (See the reading list below). Students must give an oral presentation of your book/article reports. Every student will be assigned two or more reports, depending on the number of participants.

In the part of research presentation, students must present a draft of research proposal for master's or doctor's thesis.

Students will be required to participate in discussion each week.

Reading list (examples):

<Transnational Relations>

- Agnieszka Sobocinska. 2014. *Visiting the Neighbours: Australians in Asia*, Univ. of New South Wales.
- Agnieszka Sobocinska. 2013. "Visiting the Neighbours: The Political Meanings of Australian Travel to Cold War Asia," *Australian Historical Studies*, 44:3, 382-404, DOI: 10.1080/1031461X.2013.817450

<Comparative Politics>

- Kathryn Sikkink. 1991. *Ideas and Institutions: Developmentalism In Brazil And Argentina*, Cornell Univ. Press.
- Christy Thornton. 2021. *Revolution in Development: Mexico and the Governance of the Global Economy*, Univ of California Press.

<Emerging Donors>

- Naim, Moises. (2007). "Rogue aid." *Foreign Policy*, March/April, 95–96.
- Woods, Ngaire. (2008). "Whose aid? Whose influence? China, emerging donors and the silent revolution in development assistance." *International Affairs*, 84(6), 1205–1221.
- Manning, Richard. (2006). Will 'emerging donors' change the face of international co-operation? *Development Policy Review*, 24(4), 371–385.
- Chithra Purushothaman. 2021. *Emerging Powers, Development Cooperation and South-South Relations*, Palgrave Macmillan.
- Sato, Jin, and Yasutami Shimomura, eds., 2012. *The Rise of Asian Donors: Japan's Impact on the Evolution of Emerging Donors*, Routledge.

<South-South Cooperation>

- Guillermo Santander and José Antonio Alonso. 2018. "Perceptions, identities and interests in South–South cooperation: the cases of Chile, Venezuela and Brazil," *Third World Quarterly*, 39(10), 1923–1940.
- Kevin Gray & Barry K. Gills (2016) "South–South cooperation and the rise of the Global South," *Third World Quarterly*, 37:4, 557-574.

・ Others

5. 成績評価方法 :

Book report (40%), research proposal (40%) , contribution to discussion (20%).

6. 教科書および参考書 :

No additional reading assignment.

7. 授業時間外学習 :

Students will be required to prepare their book/article report and research proposal.

8. その他 :

科目名：	国際政治経済論演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	岡部 恭宜	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Class code: ouutted

Link to Meet: <https://meet.google.com/dgv-tbyf-tdf>

実施方法： Hybrid (Face-to-face and online). Students are required to register for the course at Google Classroom, through which class information will be provided.

1. 授業題目：

Seminar on International Political Economy B/II

2. 授業の目的と概要：

This seminar is a continuation of the Seminar of IPE A/I of the first semester. However, the participation in the first semester is not required of those who are interested in this class. Any students are welcome.

It is designed primarily for graduate students who are interested in exploring foreign policy and domestic politics from the international political economy (IPE) perspective. It has two parts: Reading of seminal works and research presentation by students. (Note: Working language is English.)

3. 学習の到達目標：

This seminar will help students (i) to deepen their understanding on theories of IPE and learn their strengths and weaknesses, and (ii) to develop their skills in research and presentation.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

In the part of reading, selected topics will include diplomacy, foreign policies, development aid, international relations, and comparative politics (See the reading list below). Students must give an oral presentation of your book/article reports. Every student will be assigned two or more reports, depending on the number of participants.

In the part of research presentation, students must present a draft of research proposal for master's or doctor's thesis.

Students will be required to participate in discussion each week.

Reading list (examples):

<Transnational Relations>

- Agnieszka Sobocinska. 2014. Visiting the Neighbours: Australians in Asia, Univ. of New South Wales.
- Agnieszka Sobocinska. 2013. "Visiting the Neighbours: The Political Meanings of Australian Travel to Cold War Asia," Australian Historical Studies, 44:3, 382-404, DOI: 10.1080/1031461X.2013.817450

<Comparative Politics>

- Kathryn Sikkink. 1991. Ideas and Institutions: Developmentalism In Brazil And Argentina, Cornell Univ. Press.
- Christy Thornton. 2021. Revolution in Development: Mexico and the Governance of the Global Economy, Univ of California Press.

<Emerging Donors>

- Naim, Moises. (2007). "Rogue aid." Foreign Policy, March/April, 95–96.
- Woods, Ngaire. (2008). "Whose aid? Whose influence? China, emerging donors and the silent revolution in development assistance." International Affairs, 84(6), 1205–1221.
- Manning, Richard. (2006). Will 'emerging donors' change the face of international co-operation? Development Policy Review, 24(4), 371–385.
- Chithra Purushothaman. 2021. Emerging Powers, Development Cooperation and South-South Relations, Palgrave Macmillan.
- Sato, Jin, and Yasutami Shimomura, eds., 2012. The Rise of Asian Donors: Japan's Impact on the Evolution of Emerging Donors, Routledge.

<South-South Cooperation>

- Guillermo Santander and José Antonio Alonso. 2018. "Perceptions, identities and interests in South-South

cooperation: the cases of Chile, Venezuela and Brazil," *Third World Quarterly*, 39(10), 1923–1940.

• Kevin Gray & Barry K. Gills (2016) "South–South cooperation and the rise of the Global South," *Third World Quarterly*, 37:4, 557-574.

• Others

5. 成績評価方法 :

Book report (40%), research proposal (40%) , contribution to discussion (20%).

6. 教科書および参考書 :

No additional reading assignment.

7. 授業時間外学習 :

Students will be required to prepare their book/article report and research proposal.

8. その他 :

科目名：	中国商事法演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	WEN XI AOTONG	開講期：	2022 単位数：2
授業形態：	演習	使用言語：	日本語 週間授業回数：1回毎週
配当学年：	-	対象学年：	- 実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

連絡は、wen@law.tohoku.ac.jp までお願いします。

実施方法： ハイブリッド方式（オンライン授業の場合、基本的にリアルタイムで実施します。また、クラスルームではなく、東北大学インターネットスクール（ISTU）を通じて Zoom 講義のリング、講義 ID 及びパスワードを通知します）。

1. 授業題目：

中国商事法

2. 授業の目的と概要：

商法分野において、最近中国の最高裁が下した重要な判決を読み、中国における最新の商事法動向を把握すると同時に、紛争の背後にある法律問題を分析・議論し、さらに日本法との比較を通じて、法律に対する理解を深めることを目的とする。

In this course, based on case study, students can keep track of recent trends in the filed of commercial law and learn the difference between Japanese and Chinese law systems.

3. 学習の到達目標：

学生には、本演習での学修を通じて、中国商事法の最新動向を把握すると同時に、紛争の本質を捉える能力を養い、比較法的な研究方法を身に付けることを期待する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

毎回の報告者を決めて、それぞれ担当する裁判決を対象に報告してもらい、全員で議論する方法で授業を進める予定である。

判例は、各参加者が自ら関心するものを選ぶことができます。

第1回 イン트로ダクション

第2回 判例報告

第3回 判例報告

第4回 判例報告

第5回 判例報告

第6回 判例報告

第7回 判例報告

第8回 判例報告

第9回 判例報告

第10回 判例報告

第11回 判例報告

第12回 判例報告

第13回 判例報告

第14回 判例報告

第15回 判例報告

5. 成績評価方法：

報告の内容及び議論への貢献度によります

6. 教科書および参考書：

最高裁判決は、中国裁判文書データベース <https://wenshu.court.gov.cn> からダウンロードして使います。そのほか、判決に関連する新聞や法律法規を必要に応じて提供します。

7. 授業時間外学習：

すべての参加者は、演習の前に判決文を読み、関連条文を確認します。報告者に関しては、報告するための原稿とレジュメを用意することが求められます。

8. その他：

中国語を読む力が求められます。

科目名：	International Politics of East	科目区分：	大学院科目
	ROTH A		
担当教員：	NTOINE ARM. 阿南 友亮	開講期：	2022
		単位数：	2
授業形態：	演習	使用言語：	英語
週間授業回数：		週間授業回数：	1回毎週
配当学年：	-	対象学年：	-
		実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード： Google Classroom class code: 62ogppq			
Instructor's email: roth.antoine.armin.e2@tohoku.ac.jp			
実施方法： This class will be conducted in person			
1. 授業題目： International Politics of East Asia			
2. 授業の目的と概要： This class aims to provide an overview of the major issues and main dynamics shaping the international politics of East Asia in the early 21st century. It will cover the historical changes in the region's international order, its main actors and the key relationships between them, as well as important themes in regional politics such as institutions and norms, economic integration and regionalism, security hot-spots, and transnational forces. The class will consist of weekly readings, presentations by students, lecture and comments by the professor, and class discussion and debate. Students will be expected to follow international news, to participate actively in discussions, and to give presentations summarising and commenting on the weekly readings. They will also write a short paper relating to one of their presentations as well as a longer final paper.			
3. 学習の到達目標： By the end of the class, students will be expected to have acquired a basic knowledge of the main actors and trends shaping the international politics of East Asia and to have developed the necessary tools to analyse and understand future developments. Th			
4. 授業の内容・方法と進度予定：			
1. Introduction			
2. History of East Asia			
3. Building blocks of regional order			
4. Actors ①; China			
5. Actors ②; United States			
6. Actors ③; Japan			
7. Actors ④; Southeast Asia			
8. Relationships ①; China-US relations			
9. Relationships ②; Sino-Japanese relations			
10. Relationships ③; ASEAN and the great powers			
11. Issues ①: The Korean peninsula			
12. Issues ②: Maritime hot spots			
13. Issues ③: Economic integration			
14. Issues ④: Transnational forces			
15. Future of the region			
5. 成績評価方法：			
Attendance and participation		30%	
Presentation and short paper		30%	
Final paper			40%
6. 教科書および参考書： Readings will be announced in class and uploaded on Google Classroom.			
7. 授業時間外学習：			

Students are expected to diligently read the weekly readings, to stay informed of recent international news relating to East Asia, to prepare for the class, and to think of questions related to the week's topic to submit for in-class discussion.

8. その他 :

This class will be conducted entirely in English.

Please contact the instructor to arrange an online consultation, or if needed an in-person one.

In case of absence, the instructor should be notified prior to the class.

<p>科目名：Contemporary Chinese Diplomacy 阿南 友亮.R</p>	<p>科目区分：大学院科目</p>
<p>担当教員： O T H A N T O I N E A R M</p>	<p>開講期：2022 単位数：2</p>
<p>授業形態：演習 配当学年：-</p>	<p>使用言語：英語 対象学年：- 週間授業回数：1回毎週 実務・実践的授業：</p>
<p>連絡方法とクラスコード： Google Classroom class code: sfnk3qz</p> <p>Instructor's email: roth.antoine.armin.e2@tohoku.ac.jp</p> <p>実施方法：This class will initially be conducted online on Google Classroom, and will switch to in-person learning if and when the situation allows.</p>	
<p>1. 授業題目： Contemporary Chinese Diplomacy</p> <p>2. 授業の目的と概要： This class aims to provide an overview of the major issues and main dynamics shaping contemporary Chinese diplomacy. It will cover the history of the foreign policy of the People's Republic of China, its relationship with key states and regions around the world, and the main themes in its contemporary diplomacy, such as the Belt and Road Initiative, its engagement with international organizations, and its efforts to shape the international narrative about China's rise.</p> <p>The class will consist of weekly readings, presentations by students, lecture and comments by the professor, and class discussion and debate. Students will be expected to follow international news, to participate actively in discussions, and to give presentations summarizing and commenting on the weekly readings. They will also write a short paper relating to one of their presentation as well as a longer final paper.</p> <p>3. 学習の到達目標： By the end of the class, students will be expected to have acquired a basic knowledge of the main themes and features of contemporary Chinese diplomacy and to have developed the necessary tools to analyze and understand the future trajectory of the country</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： 1. Introduction 2. History of China's foreign relations 3. Foreign policy-making 4. China's worldview and grand strategy 5. Striving for achievements and occupying center stage 6. Winning hearts and mind 7. China-US relations 8. Sino-Japanese relations 9. China's relations with East Asia 10. China's relations with Russia and Central Asia 11. China's relations with South Asia 12. China's relations with Europe 13. China's relations with the developing world 14. China and global governance 15. A Chinese world order?</p> <p>5. 成績評価方法： Attendance and participation 30% Presentation and short paper 30% Final paper 40%</p> <p>6. 教科書および参考書： Readings will be announced in class and uploaded on Google Classroom.</p>	

7. 授業時間外学習 :

Students are expected to diligently read the weekly readings, to stay informed of recent international news relating to Chinese diplomacy, to prepare for the class, and to think of questions related to the week's topic to submit for in-class discussion.

8. その他 :

This class will be conducted entirely in English.

Please contact the instructor to arrange an online consultation, or if needed an in-person one.

In case of absence, the instructor should be notified prior to the class.

科目名：	援助と開発演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	志賀 裕朗	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Important! Microsoft Teams is used in this course. Please download it in advance.

実施方法： オンライン（リアルタイム）

1. 授業題目：

Seminar on development assistance to developing countries (Japan's Official Development Assistance)

2. 授業の目的と概要：

How should we eradicate poverty and inequality, and achieve peace and justice in developing countries? What can we do to promote liberal democracy and the rule of law?

Japan has been tackling these challenges for over sixty years, by providing Official Development Assistance (ODA) to developing countries with distinctive aid philosophy and unique instruments.

This course introduces a basic knowledge about development issues and Japan's ODA policy. Students are encouraged to think critically and discuss actively about the conventional wisdom on global agendas.

3. 学習の到達目標：

The issue of development and ODA is an area where interdisciplinary approach is required. It is also the intersection of lofty ideals and the realities of international politics and economy.

In this course, by using this challenging and interesting issue

4. 授業の内容・方法と進度予定：

Classes are conducted online (real-time) via Microsoft Teams.

Ways of communication between students and instructor will be instructed in the first lecture.

1. Introduction

2. Introduction to the development issue: Why are poor countries poor?

3. Mechanism of Japan's ODA: How is Japan's ODA managed and implemented?

4. Features of Japan's ODA: How and Why is Japan's ODA unique?

5. History of Japan's ODA (1): Why did Japan start ODA in 1954 when it was still a poor country?

6. History of Japan's ODA (2): How has Japan's ODA policy evolve?

7. Development aid by other countries (1): What are the features of ODA by Western countries?

8. Development aid by other countries (2): What are the features of development aid by China?

9. Japan's current ODA policies (1): Infrastructure building

10. Japan's current ODA policies (2): Peace building and the promotion of good governance

11. Future challenges for Japan's ODA (1): Should we pursue Japan's geopolitical interests via ODA?

12. Future challenges for Japan's ODA (2): How should we cope with authoritarian regimes?

13. Student presentation (1)

14. Student presentation (2)

15. Wrap-up

5. 成績評価方法：

Evaluation is based on the participation to the class (40%) and final exam (60%) (subject to change in accordance with the number of registered students, as well as the situation of COVID-19 infections).

6. 教科書および参考書：

Instructor would instruct where necessary.

7. 授業時間外学習：

Students are requested to read materials as instructed by instructor, and to prepare for discussion sessions.

8. その他：

There is no prerequisite for this course. No prior knowledge of development or ODA is required. There is no minimum requirement for English proficiency.

The course would be conducted in an interactive and participatory manner. Instructors would ask the students many questions, and facilitate discussions. Active participation is strongly encouraged.

Questions and suggestions are welcome.

科目名： 国際カンファレンス I	科目区分： 大学院科目
担当教員： 森田 果	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： 英語
配当学年： -	対象学年： -
単位数： 1	
週間授業回数： 1（隔週）	
実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード： TBA	
実施方法： TBA	
<p>1. 授業題目： Presentation and Research Skills for Graduate Students</p> <p>2. 授業の目的と概要： COURSE OBJECTIVES AND OUTLINE: This seminar is aimed at helping the participants to develop their academic presentation and research skills and to give participants the opportunity to present and discuss their research with peers. This seminar includes a number of practical skills, and requires students to reflect on their research habits and schedules. Thus it can serve as a kind of pace-maker for students in conducting their own research. Participants will also have a chance to present about the progress in their individual research at the end of the semester. This course is similar in its aims to “International Colloquium”, which is offered during the spring semester, but this course focuses more heavily on the skills for presenting one’s research in an international setting.</p> <p>3. 学習の到達目標： GOAL OF STUDY: The participants will develop academic presentation and research skills necessary for graduate students and scholars, particularly those who wish to present and pursue their research on an international stage.</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： CONTENTS, METHOD AND PROGRESS SCHEDULE: Those participants whose research is developed far enough might have the chance to present their research in English during an interdisciplinary conference held in Tohoku University. The participants not presenting during the conference will be expected to make a presentation concerning progress on their research during the final class sessions of the semester. We will read chapters from how-to books for graduate students and international scholars on academic presentations, discuss methods, and put the knowledge to practice. We will also be reading and discussing chapters/materials concerning other academic and research skills. The specific topics will be chosen by the participants during the first class according to their needs and interests (a list with suggestions will be provided by the instructor). See also TEXTBOOKS AND REFERENCES section below. Tentative Schedule: 1. Introduction, orientation. 2. ~6. Reading, presenting and discussing book chapters, attending library orientation, attending an international conference, etc. 7. Final presentations.</p> <p>5. 成績評価方法： GRADING CRITERIA: Presentation(s): 65 % Class participation: 35 %</p> <p>6. 教科書および参考書： TEXTBOOKS AND REFERENCES: Reading assignments will be distributed in class, and will most likely come from one of the following books: John A.Finn, Getting A Phd, An Action Plan to Help Manage Your Research, Your Supervisor and Your Project (Routledge,</p> <p>7. 授業時間外学習： WORK TO BE DONE OUTSIDE OF CLASS: Students are required to prepare for individual presentations concerning their research, as well as make short presentations summarizing additional book chapters we might read and discuss in class. All students are requ</p> <p>8. その他：</p>	

This course will be conducted in English.

All students wishing to register for this course should note that attendance in all of the sessions is mandatory, and absences without a good reason and without notifying the instructor in advance will result in failing the course.

科目名：	国際コロキウム I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	滝澤 紗矢子	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	1
		週間授業回数：	1 (隔週)
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

tkfbrgi

実施方法： オンライン (リアルタイム)

1. 授業題目：

Research and Study Skills for Graduate Students

2. 授業の目的と概要：

COURSE OBJECTIVES AND OUTLINE:

This seminar is aimed at helping the participants to develop their research and study skills as graduate students. The seminar also provides the participants with an opportunity to present and discuss their research progress with peers. We will read and discuss chapters from Gina Wisker's "The Postgraduate Research Handbook" and other handbooks for graduate students concerning the basics of choosing a research question and methodology, reading academic articles and doing literature reviews, making up and sticking to a research schedule, time-management, etc. Participants of the seminar are also required to complete a number of practical tasks and assignments, which can be used to pace and develop the participants' work towards their Masters or PhD thesis. In this sense, this seminar can serve as a kind of pace-maker for students in conducting their own research. Participants will also have a chance to present about the progress in their individual research at the end of the semester.

3. 学習の到達目標：

GOAL OF STUDY:

Participants of the seminar will acquire and develop research and study skills necessary for graduate school. Participants will also start or develop their research projects during this seminar.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

CONTENTS, METHOD AND PROGRESS SCHEDULE:

We will read and discuss chapters from handbooks for graduate students. Participants of the seminar are also required to complete a number of practical tasks and assignments, which can be employed to pace and develop the participants' work towards their Masters or PhD thesis. At the end of the semester, participants will present about the progress in their individual research (/readings).

The proposed schedule for this seminar is as follows:

1. Orientation – studying and doing research in graduate school
2. Setting a research question.
3. Reading for class and for individual research. Critical reviews and literature review.
4. Critical review: Practice
5. Time-management, coping mechanisms, working together
6. Plagiarism and citing.
7. Final presentations (*Those participants whose research has already sufficiently advanced, are expected to present about their progress and findings so far. Those who are just starting with their research might consider giving a presentation based on a more extensive literature review, which could contain the basic texts of their field of interest/specialty.)

*This is only a preliminary schedule and might be slightly altered according to the needs of the participants.

5. 成績評価方法：

GRADING CRITERIA:

Class participation and assignments: 40 %

Literature reviews and final presentation: 60 %

6. 教科書および参考書：

TEXTBOOKS AND REFERENCES:

Reading assignments will be distributed in class, but the lecturer would like to recommend the following books for further reading:

G. Wisker, The Postgraduate Research Handbook 2nd ed., Palgrave Macmillan, 2008

M. Davies, Stu

7. 授業時間外学習 :

WORK TO BE DONE OUTSIDE OF CLASS:

All students are required to read the assigned book chapters and complete the additional assignments prior to class. Students are also required to critically read several academic texts of their choice, that are related

8. その他 :

ADDITIONAL COMMENTS:

This class will be taught online. The Google Classroom class code is saeavym.

This course will be conducted in English (the text for individual literature reviews may include Japanese texts or texts in other languages).

All students wishing to register for this course should note that attendance in all of the sessions is mandatory, and absences without a good reason and without notifying the lecturer in advance will result in failing the course.

科目名：	Academic Writing in English	科目区分：	大学院科目
担当教員：	他	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Inquiries pertaining to this course can be made through Google Classroom.

Class Code:

実施方法： Live online classes (synchronous real-time classes) via Google Classroom

1. 授業題目：

Academic Writing in English

2. 授業の目的と概要：

The objective of this course is to familiarize students with primary issues and knowledge on academic writing in English while providing them with the opportunities of hands-on exercises and discussions in order to develop their writing skills.

The contents to be learned are primarily based on a textbook whereas students are expected to participate in class discussions and activities. In addition, each class is planned to start with a short session to discuss topics which would help students consider the themes of final essays.

This course is intended for students who are not native speakers of English.

3. 学習の到達目標：

It is envisaged that, after the completion of the course, students will acquire basic understanding and skills of academic writing, which enable them to write short academic essays in English, constituting foundations for more advanced projects in the fut

4. 授業の内容・方法と進度予定：

Contents:

- (1) Introduction: Basics of Academic Writing
- (2) Critical Reading
- (3) Essay Planning and Plagiarism
- (4) Summarizing and Paraphrasing
- (5) References and Quotations
- (6) Organizing Paragraphs, Introductions and Conclusions
- (7) Definitions, Argument and Discussion
- (8) Comparison, Cause and Effect
- (9) Examples and Generalizations
- (10) Visual Information, Problems and Solutions
- (11) Cohesion, Passive and Active
- (12) Numbers, Singular and Plural
- (13) Punctuation, Definite Articles and Time Markers
- (14) Style
- (15) Vocabulary

Additionally, at the beginning of each class, it is planned to have a brief session where students are given an opportunity to have a discussion or give short talks on a topic concerning current affairs or some issues in political/social sciences. A list of topics to be discussed is provided in advance. Students may choose the themes of final essays in relation to these topics.

Modifications may be made to the contents where necessary in view of students' learning progress and interests.

5. 成績評価方法：

Class Participation: 20%

Assignments and class contribution: 30%

Final Essay: 50%

6. 教科書および参考書：

For those who take this course, it is required to purchase the following book, which is used as a textbook for the subject.

Stephen Bailey. 2018. Academic Writing: A Handbook for International Students, 5th ed. New York, NY: Routledge.

Students may c

7. 授業時間外学習 :

Students are expected to work on assignments and final essay projects. As regards preparation for classes, it is recommended to read relevant sections of the textbook. It is also advisable for students to come up with preliminary ideas beforehand, which c

8. その他 :

The language of instruction in this course is English.

科目名：	Introduction to Latin American	科目区分：	大学院科目
担当教員：	岡部 恭宜.清 水 麻友美	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード： Google Classroom code: TBA Link: TBA Contact the main instructor (Mayumi Shimizu 清水麻友美) at mayumi.shimizu.b3@tohoku.ac.jp.			
実施方法： In-person (対面)			
<p>1. 授業題目： Introduction to Latin American Politics</p> <p>2. 授業の目的と概要： This is an introductory course on politics and society in Latin America. Designed for students who have little familiarity with the region, the course provides students with the foundations for understanding diversity and complexity of Latin America by examining various aspects of the everyday lives of its people. After briefly discussing its historical background, the course covers topics including democracy, race and ethnicity, gender, and violence.</p> <p>3. 学習の到達目標： After completing this course, students are expected to: - have a general idea about Latin American politics and society, - understand basic rules and style of academic writing, and - be able to explore how a specific, local issue in Latin America is co</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： * Course meetings are currently planned to be held in-person, but it may change depending on the situation of Covid-19 pandemic.</p> <p>This course consists of two parts that would help students write up the final course essay. Aiming to provide a general idea about Latin America, the first half is the interactive lecture part, in which students are required to read the assigned book chapters prior to each meeting to participate actively in class discussions led by the instructor. Mini quizzes will be given several times during this first period to ensure comprehension of the weekly readings.</p> <p>The second part of the course requires students to play a more active role by presenting their plan for the final essay project (see “Final Project” under Grading). Each participant is given two presentation opportunities to share his/her progress of the project with the colleagues, who are expected to ask questions and provide comments.</p> <p>The following is a tentative schedule and may be subject to change depending on the class size and students’ needs.</p> <p>01. Introduction to Latin America 02. Historical Overview 1: The Colonial Foundations 03. Historical Overview 2: Strategies for Economic Development 04. Historical Overview 3: Dynamics of Political Transformation 05. Democracy and Democratization 1 06. Democracy and Democratization 2 07. Race and Ethnicity 1 08. Race and Ethnicity 2 09. Gender 10. Inequality and Violence in the City 11. Landownership</p>			

12. Presenting the Research Question 1

13. Presenting the Research Question 2

14. Presenting the Outline 1

15. Presenting the Outline 2

5. 成績評価方法：

Class Participation: 10%

Class attendance and contribution to the in-class discussion. See the class absence policy described below (under Other Course Policies).

Mini Quizzes: 20%

Mini quizzes will be conducted several times to ensure students' comp

6. 教科書および参考書：

The chapters included in the course reading list will be taken from the textbooks shown below. The list will be added according to the students' choice of their topic for the final project. The materials will be provided electronically through Google Clas

7. 授業時間外学習：

Students are expected to read all the assigned materials to prepare for the weekly meeting.

8. その他：

- This course will be conducted in English.

- Students must notify the instructor in advance if they plan to be absent from the course meeting. No points will be deducted for the first and second absences. Subsequent or unexcused (without notice) absences result in point deductions.

- Academic misconducts will result in a grade sanction. Students should refer to the Tohoku University's academic integrity handbooks listed below and familiarize themselves with what constitutes academic misconduct.

- 『あなたならどうする？[第2版]誠実な学びと研究を考えるための事例集』

- 『東北大学レポート指南書[第2版]』

both available at: <http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kenkyo/fb/education.html>

科目名：	国際政治史	科目区分：	大学院科目
担当教員：	戸澤 英典	開講期：	2022
授業形態：	講義	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

クラスコード：5nkcdty

なお、割り当てのクラスコードは学部（JB51900: 5nkcdty）と修士（JM70540: ohd4zas）で別々となっているが、5nkcdty に統一して連絡を行う。

実施方法： 原則として対面（ただし、開講から当面の間はリアルタイム Zoom ミーティング+オンデマンドで行う）

1. 授業題目：

国際政治史 An Introduction to International History

2. 授業の目的と概要：

現代の国際社会をかたちづくる主権国家体系の変遷をたどり、ポスト冷戦後の「新世界無秩序」とも呼ばれる世界政治のあり方を考える手がかりとする。特に 19 世紀末以降の国際政治史を対象とするが、重要トピックについては外交史の手法も用いつつ詳細に扱う予定。なお、昨年度開講の国際関係論（4 単位）とは若干重なる部分もあるが、政治史/外交史の講義として特化・再編した内容とする。

3. 学習の到達目標：

国際政治史の基本的な知識の習得およびグローバルな歴史の流れへの深い理解。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

以下のテーマごとに講義を行うことを予定している。

1. 国際政治史の対象
2. 近代主権国家体系の生成
3. 帝国主義の時代
4. 第 1 次世界大戦後の国際秩序
5. 1930 年代の危機と第 2 次世界大戦の勃発
6. 第 2 次世界大戦の終結と戦後秩序
7. 冷戦の起源とヨーロッパの分裂
8. 冷戦の諸相
9. 冷戦体制の変容
10. 冷戦終焉
11. 湾岸戦争とソ連解体
12. ドイツ再統一と EU の深化・拡大
13. 冷戦後の地域紛争・民族紛争
14. 新興国の台頭
15. 世界政治の将来像

This course teaches the basics of international history since 17th century, esp. the historical development of Nation-State system. Students completing this course should be able to demonstrate a basic understanding of the major events and ideologies arising from modern world history; recognize the different interpretations of the various themes.

5. 成績評価方法：

平常点および学期末のレポート試験により評価する。

6. 教科書および参考書：

教科書：特になし。各回のテーマに応じてレジュメおよび参考資料を担当教員のウェブサイト (<http://www.law.tohoku.ac.jp/~tozawa/Official%20HP/index.htm>) 上に適宜アップする。

参考書として、小川浩之・板橋拓己・青野利彦（2018）『国際政治史—主権国家体系のあゆみ』有斐閣、佐々木雄太（2011）『国際政治史—世界戦争の時代から 21 世紀へ』名古屋大学出版会、高橋進（2008）『国際政治史の理論』岩波現代文庫など。この他の参考文献に関しては、開講時および各

7. 授業時間外学習：

授業前は毎回の授業範囲について指定文献に目を通すこと。授業後はレジュメに基づき授業内容を復習し、さらに各自の関心事項を発展的に深めること。

8. その他：

前期のオフィスアワーはメール等になるが、メールアドレスについては上記ウェブサイトを参照のこと。

科目名：	知的財産法実務演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	戸次 一夫	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	○

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：6xt5lx2 質問等の連絡方法については、Google Classroom において周知する。

実施方法：本授業は、オンライン（リアルタイム型）により実施する。履修者の希望を踏まえつつ、企業等の現場訪問・web 訪問も実施する予定。

1. 授業題目：

知的財産法実務演習 I

2. 授業の目的と概要：

本授業は、技術者・研究者や法務・知財担当が共通して身につけておくべき知財マネジメントに関する知識・技能の習得を目的とする。本授業では、法制度の概観を中心に、事業の各段階における留意点、知財戦略などを扱う。

The purpose of this class is for students to acquire knowledge and skills related to IP management that engineers, researchers, and those in charge of legal and IP affairs in organizations should have in common. This class will focus on an overview of the intellectual property legal system, points to be noted at each stage of business, and IP strategies.

3. 学習の到達目標：

企業や大学での知財マネジメントにおいて要求される基礎的・実践的な知識・技能（知的財産管理技能検定 3 級と、2 級の一部のレベルの知識・技能）を習得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

授業の内容と進度予定は以下のとおり。

1. ガイダンス（授業の進め方の説明）（第 1 回）
2. 特許法・実用新案法の基礎知識と、関連する知財管理の諸問題（第 1～5 回）
3. 意匠法の基礎知識と、関連する知財管理の諸問題（第 5～6 回）
4. 商標法の基礎知識と、関連する知財管理の諸問題（第 6～8 回）
5. 知財関連条約の基礎知識と、関連する知財管理の諸問題（第 8～9 回）
6. 著作権法の基礎知識と、関連する知財管理の諸問題（第 9～11 回）
7. 不正競争防止法の基礎知識と、関連する知財管理の諸問題（第 11～12 回）
8. その他の知財関連法の基礎知識と、関連する知財管理の諸問題（第 12～13 回）
9. 事業の各段階における留意点、知財戦略（第 14～15 回）
10. 総括（第 15 回）

5. 成績評価方法：

出席・演習問題を通じた議論状況、課題への回答を総合的に判断して行う。

6. 教科書および参考書：

教科書：前田健=金子敏哉=青木大也 編『図録 知的財産法』（弘文堂，2021）

参考書：

- （1）知的財産教育協会 編『知的財産管理技能検定 3 級公式テキスト〔改訂 12 版〕』（アップロード，2021）
- （2）知的財産教育協会 編『知的財産管理技能検定 2 級公式テキスト〔改訂 11 版〕』（アップロード，2021）
- （3）酒谷誠一『知財実務のツボとコツがゼッタイにわかる本〔第 2 版〕』（秀和システム，2021）
- （4）平嶋竜太=宮脇正晴=蘆立順美『入門 知的財産法〔第 2 版〕』（有斐閣，2020）

7. 授業時間外学習：

基礎知識についての解説動画・資料の事前確認を求めることがある（反転授業）。また、複数回、復習のための課題（1 時間程度の問題演習）に取り組んでもらう。

8. その他：

主として実践的教育から構成される実務・実践的授業／Practical business

科目名：	知的財産法実務演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	戸次 一夫	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	○

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：j6tflxq 質問等の連絡方法については、Google Classroom において周知する。

実施方法： 本授業は、オンライン(リアルタイム型)により実施する。特許・商標検索を扱う回では、対面型とオンライン(リアルタイム型)のハイブリッドで実施する(いずれの方法で参加してもよい)。履修者の希望を踏まえつつ、企業等の現場訪問・web 訪問も実施する予定。

1. 授業題目：

知的財産法実務演習Ⅱ

2. 授業の目的と概要：

本授業は、技術者・研究者や法務・知財担当が共通して身につけておくべき知財マネジメントに関する知識・技能の習得を目的とする。本授業では、法制度、特許・商標検索の基礎、ライセンスや権利共有に関する諸問題、発明届出・特許出願書類に関する諸問題などを扱う。

The purpose of this class is for students to acquire knowledge and skills related to IP management that engineers, researchers, and those in charge of legal and IP affairs in organizations should have in common. This class will cover the intellectual property legal system, the basics of patent and trademark searches, issues related to licensing and rights sharing, and various issues related to invention notifications and patent application documents.

3. 学習の到達目標：

企業や大学での知財マネジメントにおいて要求される基礎的・実践的な知識・技能(知的財産管理技能検定 2 級のレベルの知識・技能)を習得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

授業の内容と進度予定は以下のとおり。

1. ガイダンス(授業の進め方の説明)(第 1 回)
2. 特許法・実用新案法(第 1~4 回)
3. 意匠法、商標法、知財関連条約(第 5~6 回)
4. 商標検索の基礎(第 7 回)
5. 特許検索の基礎(第 7~8 回)
6. 特許・商標検索の演習(第 9~11 回)
7. ライセンスや権利共有に関する諸問題、大学の知財管理に特有の問題、医薬品に特有の問題(第 12~13 回)
8. 発明届出・特許出願書類に関する諸問題、特殊クレームについての留意点(第 13~15 回)
9. 総括(第 15 回)

※進度によっては、著作権法、不正競争防止法、その他の知財関連法も取り扱う。

5. 成績評価方法：

出席・演習問題を通じた議論状況、課題への回答を総合的に判断して行う。

6. 教科書および参考書：

教科書：前田健=金子敏哉=青木大也 編『図録 知的財産法』(弘文堂，2021)

参考書：

- (1) 知的財産教育協会 編『知的財産管理技能検定 3 級公式テキスト [改訂 12 版]』(アップロード，2021)
- (2) 知的財産教育協会 編『知的財産管理技能検定 2 級公式テキスト [改訂 11 版]』(アップロード，2021)
- (3) 酒谷誠一『知財実務のツボとコツがゼッタイにわかる本 [第 2 版]』(秀和システム，2021)
- (4) 平嶋竜太=宮脇正晴=蘆立順美『入門 知的財産法 [第 2 版]』(有斐閣，2020)

7. 授業時間外学習：

基礎知識についての解説動画・資料の事前確認を求めることがある(反転授業)。また、複数回、復習のための課題(1 時間程度の問題演習)に取り組んでもらう。

8. その他：

主として実践的教育から構成される実務・実践的授業/Practical business

科目名：交渉演習	科目区分：大学院科目
担当教員：森田 果	開講期：2022
授業形態：演習	使用言語：日本語
配当学年：-	対象学年：-
単位数：2	
週間授業回数：変則	
実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード： cw7bgfu	
実施方法：in person	
<p>1. 授業題目： Seminar on Negotiation</p> <p>2. 授業の目的と概要： The purpose of this class is to prepare for the 20th competition of INC (intercollegiate negotiation competition). Seminar participants are expected either to participate in the competition or to support the participating members.</p> <p>The competition consists of two parts: the arbitration part (round A) and the negotiation part (round B). The competition involves a hypothetical international business transaction and the participants play the role of two opposing parties.</p> <p>The details of the competition can be acquired from the following website: http://www.negocom.jp/eng/</p> <p>3. 学習の到達目標： To improve the ability to analyze legally international business transaction conflicts and the negotiation skill. The setting of the negotiation is international business transactions.</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： While the class begins on October 1 and ends on November 12, the problem of the competition has been already available from September 6 and the participants are expected to start the preparation before the beginning of this class. After the competition is held on November 6 and 7, we will have a wrap-up session on November 12.</p> <p>The class will meet once per week and each class consists of two sessions. Please note the exceptional class style. In addition, because the class is not sufficient to prepare for the competition thoroughly, participants need to work even outside the class hours.</p> <p>5. 成績評価方法： Class participation 100%.</p> <p>6. 教科書および参考書： TBA</p> <p>7. 授業時間外学習： As noted above, participants need to engage in the preparation work even outside the class.</p> <p>8. その他：</p>	

科目名：	EU法政論	科目区分：	大学院科目
担当教員：	戸澤 英典	開講期：	2022
授業形態：	講義	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

クラスコード：qguzk6u

なお、割り当てのクラスコードは学部（JB51910:qguzk6u）と修士（JM83050:hpt5gh4）で別々となっているが、qguzk6u に統一して連絡を行う。

実施方法： 原則として対面

1. 授業題目：

EU法政論 Law and Politics of the EU

2. 授業の目的と概要：

現代ヨーロッパの法と政治は、EU・国家・地域の各レベルが相互連動する多層的なネットワーク（Multi-level Governance）として展開するようになっている。特に社会経済的な領域においては各国法のEU法化という現象が顕著であり、それによる市民生活への多大な影響も要因となって英国のEU離脱(Brexit)や他のEU諸国でのポピュリスト政党の伸長を惹起している。この講義では、そうしたEUを中心とした現代ヨーロッパ法政の実際を扱い、「法による統合」(Integration through Law)の帰結を分析する。

3. 学習の到達目標：

Uの法と政治についての基本的な知識の習得、および経済連携協定（EPA）等が各国国内の政治経済にどのような影響を及ぼし得るかを検討する際の洞察力の涵養。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

以下の項目ごとに講義を行うことを予定している。

1. ユーロッパ統合（EU）とは何か？
2. EUの機構
3. EUの立法・行政（1）政策サイクル
4. EUの立法・行政（2）EUと加盟国のリンケージ
5. EUの立法・行政（3）ケース・スタディー
6. EU域内市場総論
7. EU法概観
8. EU法の優越と国内法との関係
9. 人の自由移動Ⅰ
10. 人の自由移動Ⅱ
11. 物の自由移動Ⅰ
12. 物の自由移動Ⅱ
13. 資本の自由移動
14. 経済通貨同盟
15. 世界とEU

This course teaches the basics of law and politics of the EU. Students completing this course should be able to demonstrate a basic understanding of the major aspects of EU law and politics.

5. 成績評価方法：

平常点および学期末のレポート試験により評価する。

6. 教科書および参考書：

特になし。各回のテーマに応じてレジュメおよび参考資料を担当教員のウェブサイト (<http://www.law.tohoku.ac.jp/~tozawa/Official%20HP/index.htm>) 上に適宜アップする。

7. 授業時間外学習：

授業前は毎回の授業範囲について参考資料に目を通すこと。授業後はレジュメに基づき授業内容を復習し、さらに各自の関心事項を発展的に深めること。

8. その他：

オフィスアワーを設ける予定だが、日時については上記ウェブサイトを参照のこと。

科目名：	情報関係法令論 飯島 淳子.大	科目区分：	大学院科目
担当教員：	江 裕幸.北島 周作	開講期：	2022
授業形態：	講義	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom を通じて連絡を行う。クラスコード：koc7o7o

実施方法： 基本的に対面を予定しているが、諸状況に応じてオンライン形式をとることがある。

1. 授業題目：

情報関係法令論

2. 授業の目的と概要：

本講義では、アーキビストとしての活動にあたり不可避的に関わる情報関係法令について、制度を支える理念および具体的な制度の内容を概説する。

情報の管理・利用・公開に携わるアーキビストにとって、法令の知識と理解は極めて重要である。一方で、アーカイブズ機関の活動には法令の規制が及ぶから、法令遵守のために、いわば防御するために関係法令の学習が欠かせない。他方で、社会においてアーキビストとしての使命を十全に果たすために、関係法令の理念、具体的な制度の背景にある制度目的を理解し、積極的に制度を活用するための学習も必要である。

以上の理解に基づき、本講義では、法学、とりわけ行政法について前提知識を有していない受講生も、情報関係法令について基礎知識および理念の両方を習得することを目的とし、基本的事項から発展的内容までを概説する。

The course teaches students about topics relating to information law. Topics include the system of the Act on Access to Information, the Act on the Protection of Personal Information and the Public Records and Archives Management Act.

3. 学習の到達目標：

実務に携わるアーキビストが備えておくべき情報関係法令の基礎知識を習得するとともに、今後の改正にも対応することができる基本的視座を獲得することが、本授業の到達目標である。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

1. ガイダンス
2. 情報関係法令を学ぶための法学の基礎(1)
3. 情報関係法令を学ぶための法学の基礎(2)
4. 行政活動と法
5. 行政による情報の収集・管理・利用の概観
6. 行政による情報の収集をめぐる問題
7. 行政による情報の管理をめぐる問題(1)
8. 行政による情報の管理をめぐる問題(2)
9. 行政による情報の利用をめぐる問題(1)
10. 行政による情報の利用をめぐる問題(2)
11. 行政による情報の公開の概観
12. 行政による情報の公開をめぐる問題(1)
13. 行政による情報の公開をめぐる問題(2)
14. 行政による情報の公開をめぐる問題(3)
15. まとめ

受講者の人数・関心等に応じて、授業内容・方法は変更される可能性がある。

5. 成績評価方法：

成績評価は、レポート（75%）および平常点（25%）によって行う。レポートは、関心を抱いた授業の内容について、自ら調査し検討を加えて執筆することを求める予定である。

6. 教科書および参考書：

授業中に指示する。

7. 授業時間外学習：

情報関係法令に関しては日々議論が進んでいるから、関連するニュースを意識して追うこと。

8. その他：

科目名：	アメリカ信託法演習 I	科目区分：	大学院科目
担当教員：	WEN XI AOTONG	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

連絡は、wen@law.tohoku.ac.jp までよろしくお願ひします。クラスコードは東北大学インターネットスクールを通じてお知らせします。

実施方法： ハイブリッド方式によります（オンライン授業の場合、クラスルームではなく、東北大学インターネットスクール（ISTU）を使用する）。初回の授業に参加する場合、前日までに wen@law.tohoku.ac.jp までご連絡ください。

1. 授業題目：

アメリカ信託法

2. 授業の目的と概要：

アメリカ信託法の基礎を習得し、英語力を養成する。

This course aims to help students have a general understanding of American Trust Law and improve their English skills.

3. 学習の到達目標：

アメリカ信託法及び関連判例法の内容と議論について基本的な理解をし、英語で法律論文を読む、聞く、話す能力をある程度身に付けることを目標とします

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本講義において、Robert H. Sitkoff, Jesse Dukeminier, Wills, Trusts, and Estates, Tenth Edition. を対象に15回に分けて読んでいきます（事例を中心に）。指示された部分を事前に読んでから授業に参加してください。

第1回：イントロダクション

第2回：信託の設定①

第3回：信託の設定②

第4回：信託の設定③

第5回：信託の設定④

第6回：信託の設定⑤

第7回：信託の設定⑥

第8回：受託者の信託義務①

第9回：受託者の信託義務②

第10回：受託者の信託義務③

第11回：受託者の信託義務④

第12回：受託者の信託義務⑤

第13回：受託者の信託義務⑥

第14回：受託者の信託義務⑦

第15回：受託者の信託義務⑧

5. 成績評価方法：

議論への貢献度によります。

6. 教科書および参考書：

資料を配りします。

必要に応じて、Uniform Trust Code (UTC)(2000)と The Restatement (Third) of Trusts を参照します。

7. 授業時間外学習：

授業で使う資料を事前に読んでおく必要があります。

8. その他：

相当の英語能力が求められます。

科目名：	アメリカ信託法演習Ⅱ	科目区分：	大学院科目
担当教員：	WEN XI AOTONG	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

連絡は、wen@law.tohoku.ac.jp までよろしくお願ひします。クラスコードは東北大学インターネットスクールを通じてお知らせします。

実施方法： ハイブリッド方式によります（オンライン授業の場合、クラスルームではなく、東北大学インターネットスクール（ISTU）を使用する）。初回の授業に参加する場合、前日までに wen@law.tohoku.ac.jp までご連絡ください。

1. 授業題目：

アメリカ信託法

2. 授業の目的と概要：

アメリカ信託法の基礎を習得し、英語力を養成する。

This course aims to help students have a general understanding of American Trust Law and improve their English skills.

3. 学習の到達目標：

アメリカ信託法及び関連判例法の内容と議論について基本的な理解をし、英語で法律論文を読む、聞く、話す能力をある程度身に付けることを目標とします

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本講義において、Robert H. Sitkoff, Jesse Dukeminier, Wills, Trusts, and Estates, Tenth Edition. を対象に15回に分けて読んでいきます（事例を中心に）。指示された部分を事前に読んでから授業に参加してください。

第1回：イントロダクション

第2回：受益権の譲渡と変更①

第3回：受益権の譲渡と変更②

第4回：受益権の譲渡と変更③

第5回：受益権の譲渡と変更④

第6回：公益信託①

第7回：公益信託②

第8回：公益信託③

第9回：将来利益①

第10回：将来利益②

第11回：指名権①

第12回：指名権②

第13回：指名権③

第14回：永久拘束禁止則①

第15回：永久拘束禁止則②

5. 成績評価方法：

議論への貢献度によります。

6. 教科書および参考書：

資料を配りします。

必要に応じて、Uniform Trust Code (UTC)(2000)と The Restatement (Third) of Trusts を参照します。

7. 授業時間外学習：

授業で使う資料を事前に読んでおく必要があります。

8. その他：

相当の英語能力が求められます。

科目名：	刑事訴訟法法曹実務演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	大谷 祐毅	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

質問等は授業の前後のほか、メールで随時受け付ける。メールアドレスは初回授業日に案内する。

クラスコード：54al47g

実施方法： 対面

今後の COVID-19 の状況や参加者の人数等により、オンライン（リアルタイム）で行うこともあり得る。

1. 授業題目：

刑事訴訟法の基本問題

2. 授業の目的と概要：

最近の裁判例・論文・立法等を素材としつつ、今日の刑事訴訟法が当面している基本的問題について検討を加えることにより、刑事訴訟法に関する知識・理解を深める。

This course aims (1) to provide a basic understanding of criminal procedure in Japan and (2) to develop problem analysis and proposal abilities for research in this area through discussion of various topics.

3. 学習の到達目標：

刑事訴訟法に関する知識・理解を深めるとともに、主体的な調査、研究とそれを踏まえたプレゼンテーション、ディスカッションを通じ、問題発見能力、分析力・思考力、表現力を高めることも狙いとする。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

テーマごとに報告者を定め、報告者の調査・研究をもとに全員で議論する形式で進める。研究報告のテーマと分担は、参加者の関心も踏まえ、第1回の演習において決定する。

報告者はレジュメを作成し、参加者はレジュメを手掛かりに各回のテーマについて予習をして、演習に臨むこと。参加者の人数によって変動し得るが、10回程度の研究報告と、その他共同研究等を行うことを予定している。

5. 成績評価方法：

平常点（出席、報告や報告後の質疑応答の内容、議論への参加状況）により評価する。

6. 教科書および参考書：

資料は必要に応じ指示または配布する。

三井誠編『判例教材刑事訴訟法』（最新版）を使用する。

7. 授業時間外学習：

授業内容・方法に記載したとおり。

8. その他：

刑事訴訟法についての基本的な知識を修得していること。この点を確認するため、事前に教務係を通じて講師に連絡をとること。

なお、この演習は、学部演習との合併で開講する。

科目名：	Academic Listening in English	科目区分：	大学院科目
担当教員：	他	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

実施方法：Zoomによるオンライン講義

1. 授業題目：

Academic Listening in English

2. 授業の目的と概要：

The aim of this course is to focus and polish listening comprehension in English in an academic environment. Basic listening strategies will be taught such as skimming, scanning, note-taking, discourse markers, background knowledge and so on whilst listening to various topics in the Humanities, Social Sciences and Natural Sciences. Students will be required to speak up spontaneously in class.

3. 学習の到達目標：

By the end of this course, students will be able to;

- become familiarised with various types of listening strategies in English,
- take notes during listening tasks in English,
- write a summary based on notes taken and
- gain a certain degree of

4. 授業の内容・方法と進度予定：

この授業は、オンラインで行い、授業の連絡及び講義資料の配信はメールを利用する。講義の進行予定は次のとおりである。

Week 1: Introduction of the course

Week 2: Unit 1 Sociology: Names

Week 3: Unit 1 Sociology: Names

Week 4: Unit 2 Linguistics: Global English + Test of Unit 1

Week 5: Unit 2 Linguistics: Global English

Week 6: Unit 3 Psychology: Phobias + Test of Unit 2

Week 7: Unit 3 Psychology: Phobias

Week 8: Unit 5 Education: How We Each Learn Best + Test of Unit 3

Week 9: Mid Term Exam + Unit 5 Education: How We Each Learn Best

Week 10: Unit 6 History: The Silk Road + Test of Unit 5

Week 11: Unit 6 History: The Silk Road

Week 12: Unit 9 Public Health: Global Epidemic + Test of Unit 6

Week 13: Unit 9 Public Health: Global Epidemic

Week 14: Unit 12 Public Administration: Risk Management + Test of Unit 9

Week 15: Final Examination

5. 成績評価方法：

- unit test 6回 60% (=各 unit test 10%)
- Mid Term Exam 15%
- Final Examination 15%
- 課題 5回 10%(=各課題 2%) 課題の詳細については開講後に講義内で告知する。

6. 教科書および参考書：

Contemporary Topics 2(Ellen Kisslinger) 出版社:Person ISBN コード：9 7 8 - 0 - 1 3 - 4 4 0 0 8 0 - 8

(参考 Web site): <http://listening-marisa.com>

7. 授業時間外学習：

毎回講義終了後に配信されるお知らせに記載されている内容を熟読し、指示に従うこと。

8. その他：

不明な点があれば、自己判断や放置をせずに必ず問い合わせること。

科目名：	Peace and Multiculturalism in	科目区分：	大学院科目
担当教員：	他	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード：			
実施方法：リアルタイム (Online class)			
<p>1. 授業題目： Peace and Multiculturalism in North East Asia</p> <p>2. 授業の目的と概要： This class will be operated/taught in English. Through the class, students and lecturer will discuss on several issues related to Peace and Multiculturalism in North East Asia. Migration, refugee issue in Japan, Japan-ROK relations, Inter-Korean relations, US-Chinese hegemonic tension and more relevant topics are introduced including human rights, ethnic identity, minority groups, democracy, social justice, multiculturalism and peace. Students are expected to participate in dialogue between students and lecturer. The primary purpose is to promote and enhance the communication skills in English. Presentation, reading, group activity and other works are required to complete the class obligation.</p> <p>3. 学習の到達目標： The course takers will try to improve their communication skills in English as well as deepening knowledge of related topics. One of the primary goals of this class is to get familiar with the issues dealt in the course.</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： Details of class operation will be explained in the first and second weeks of the spring semester. The 10-12 cases are introduced during the course. Group works, presentations and more activities are conducted before, during and after each class. Class style might be changed upon request. The casual and flexible class management is applied to achieve the goal of study. A textbook is developed through a research project on North Korean refugee across the world. As the text is bilingual (English and Japanese) version, students can proceed preparatory study by themselves. 1. A new school at GCS, 2 Hana starts Blog, 3 Yumi's Secret, 4. Conditions for being a national representative, 5. History war, 6. ethnic schools in Japan, 7. Hate crimes, 8. refugees, 9. human rights or development 10. public diplomacy.</p> <p>5. 成績評価方法： Class attendance 35%, Presentation and discussion 30%, midterm/final reports 25%, Miscellaneous 10%</p> <p>6. 教科書および参考書： 『私、北朝鮮から来ました：ハナのストーリー：日英対訳・バイリンガル平和教育教材 = A North Korean refugee in Japan : Hana's stories : Japanese-English, bilingual edition』</p> <p>7. 授業時間外学習： Films, fictions, non-fictions and book chapters or articles are assigned from lecturer.</p> <p>8. その他： Course takers must attend each class, and pre-contact to lecturer is required in case of absence. For more details of lecturer, please see the links. https://globalasianstudies.wordpress.com/ https://w-rdb.waseda.jp/html/100001389_en.html</p>			

科目名： グローバル政治哲学演習

科目区分： 大学院科目

担当教員： 山田 祥子

開講期： 2022

単位数： 2

授業形態： 演習

使用言語：

週間授業回数： 1回毎週

配当学年： -

対象学年： -

実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

実施方法：

1. 授業題目：
2. 授業の目的と概要：
3. 学習の到達目標：
4. 授業の内容・方法と進度予定：
5. 成績評価方法：
6. 教科書および参考書：
7. 授業時間外学習：
8. その他：

科目名：	憲法演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	佐々木 弘通	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコードは、ogawidr。質問等は、対面式授業の後に受け付ける。

実施方法： 対面

1. 授業題目：

憲法判例法理研究

2. 授業の目的と概要：

本演習では、演習参加者の関心のある主題について、その分野の主な最高裁判例とそれに関連する評釈・論文を読んで検討する。本演習の目的は、憲法判例法理を正確に読解した上で、それと対話しながら、裁判所を説得しようとするような、よりよい憲法解釈論を構成する力を養成することである。

This seminar examines the case law of constitutional law in the field of participants' own choosing.

3. 学習の到達目標：

憲法判例を批判的に読解する能力の向上と、憲法問題に対する判断力の向上とが、目標になる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本科目は、すべて対面で授業を実施する。授業の連絡及び講義資料等の配信は、グーグル・クラスルームを使用する。

なお、上記の授業方法は、「新型コロナウイルス感染拡大防止のための東北大学の行動指針（BCP）」のレベル1における本学部の方針（2022年2月現在）に従ったものである。BCPレベルの変更や本学部の方針の変更に応じて、オンライン（リアルタイム型）に変更することがある。その場合には、対面授業やグーグル・クラスルーム等により伝達する。

演習参加者の関心のある主題について、まず、その分野の主な最高裁判例と、各判例に関連する評釈類を読むことから始める。各判例の憲法論を理解した上で、諸判例の蓄積の上に立つ、判例法理としての憲法論を読み取ることが課題とする。判例によっては、当該事件の下級審からの解釈論的展開をも検討する。以上の研究で見出された問題意識を手がかりとして、それに関連する諸論文の検討へと進む。演習の進行は、毎回、参加者の報告をもとにした、教員と参加者の問答方式による。

5. 成績評価方法：

出席と課題遂行度により評価する。

6. 教科書および参考書：

授業の中で指示する。

7. 授業時間外学習：

授業の中で予習課題を指示する。

8. その他：

本演習が受講者として予定するのは、後継者養成コース（実務家型）の院生である。

科目名：	比較憲法演習 A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	佐々木 弘通	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコードは、7i2wjs7。質問等は、対面式授業の後に受け付ける。

実施方法： 対面

1. 授業題目：

アメリカ憲法研究（原書購読）

2. 授業の目的と概要：

下記に指定するテキストを購読する。英文テキストの読解力を向上させるとともに、憲法問題に関する判断力を養成することが、本演習の目的である。

In this seminar, students will read materials on U.S. constitutional law in the original English language. We discuss both any language questions that arise and the substance of the materials.

3. 学習の到達目標：

英文テキストを読解する力の向上と、憲法問題に対する判断力の養成とが、目標となる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本科目は、すべて対面で授業を実施する。授業の連絡及び講義資料等の配信は、グーグル・クラスルームを使用する。

なお、上記の授業方法は、「新型コロナウイルス感染拡大防止のための東北大学の行動指針（BCP）」のレベル1における本学部の方針（2022年2月現在）に従ったものである。BCPレベルの変更や本学部の方針の変更に応じて、オンライン（リアルタイム型）に変更することがある。その場合には、対面授業やグーグル・クラスルーム等により伝達する。

下記に指定するテキストを購読する。参加者の英文読解力のレベルに応じてテキストを読み進める。

5. 成績評価方法：

出席と課題遂行度により評価する。

6. 教科書および参考書：

教科書

Charles Fried, The Cunning of Reason: Michael Klarman's 'The Framers' Coup', 116 MICH. L. REV. 981 (2018).

7. 授業時間外学習：

進度に応じた教科書の学習と、自らの発意による発展的学習。

8. その他：

教科書は各自で準備のこと（法学部図書室にも蔵書あり）。

科目名：	租税法演習 B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	藤原 健太郎	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

資料配付及び連絡は Google Classroom にて行う。クラスコードは、

実施方法： 対面の形式で実施する。

1. 授業題目：

「公平」な租税とは何か？

2. 授業の目的と概要：

課税の公平性の意義について、歴史学・哲学・経済学等の様々な観点から考察を深めていく。You explore the fairness of taxation in this seminar.

3. 学習の到達目標：

公平な租税とは何かを巡るこれまでの膨大な議論を整理し、理解を深める。さらには、その理解を明晰に言語化できるようになることを目指す。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本授業は、研究大学院の修士及び博士の合同授業である。租税法・租税政策に係る論文を執筆する学生を主として念頭に置き、最初の数回で文献講読を行った上で、その後、各出席者において何回かの報告を行ってもらおう。まず、初回は、各自の研究テーマについて披露していただく。それを踏まえて最初に講読する文献を決定する。報告の回については、最初に報告担当者が報告を行った上で、全員で議論を行う。

5. 成績評価方法：

平常点による。

6. 教科書および参考書：

参考文献については、授業内で適宜指示を行う。

7. 授業時間外学習：

課題文献をあらかじめ読むこと。参加人数次第であるが、一人当りの報告回数がかかなり多くなることを見込まれるので、報告準備が授業時間外学修の大半を占めることになるだろう。

8. その他：

科目名：	刑法演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	成瀬 幸典	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

naruse@law.tohoku.ac.jp クラスルームのコードは e4uyqmo である。

実施方法： 対面式で行う予定である。

1. 授業題目：

ドイツ刑法に関する文献の講読

2. 授業の目的と概要：

ドイツ刑法に関する文献を精読し、わが国刑法理論に大きな影響を与え続けているドイツ刑法理論に関する理解を深める。

The objective of this course is for students to acquire deeper understanding of the theory of German criminal law, through an analysis of papers on German criminal law.

3. 学習の到達目標：

ドイツ刑法に関する理論的理解を深め、比較法的知見を獲得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

詳細は、参加者と意見交換しながら、第1回目の演習時に決定する。

5. 成績評価方法：

演習での発言などを総合して評価する。

6. 教科書および参考書：

第1回目の演習時に決定する。

7. 授業時間外学習：

次回の演習期日までに、指定された文献の該当箇所を精読し、問題意識を持って演習に臨むことができるようにしておくこと。

8. その他：

科目名： 刑事訴訟法演習

科目区分： 大学院科目

担当教員： 井上 和治

開講期： 2022

単位数： 2

授業形態： 演習

使用言語： 日本語

週間授業回数： 1回毎週

配当学年： -

対象学年： -

実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

y5gigvx

実施方法： 対面

1. 授業題目：

刑事証拠法判例研究

2. 授業の目的と概要：

刑事証拠法に関する重要な判例・裁判例を検討する。

3. 学習の到達目標：

①刑事証拠法に関する重要な判例・裁判例の意義を内在的・整合的に理解する。

②判例評釈の技法を習得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

報告担当者による報告（判例評釈の形式による）の後，その内容につき，全員で討論を行う。取り上げる判例・裁判例は，下記のを予定している。

第01回 最二小判平成 24・9・27 刑集 66 卷 9 号 907 頁

第02回 最一小決平成 25・2・20 刑集 67 卷 2 号 1 頁

第03回 最一小判昭和 53・9・7 刑集 32 卷 6 号 1672 頁

第04回 最二小判昭和 61・4・25 刑集 40 卷 3 号 215 頁

第05回 最二小判平成 15・2・14 刑集 57 卷 2 号 121 頁

第06回 最大判平成 29・3・15 刑集 71 卷 3 号 13 頁

第07回 最二小判昭和 41・7・1 刑集 20 卷 6 号 537 頁

第08回 最大判昭和 45・11・25 刑集 24 卷 12 号 1670 頁

第09回 最三小判昭和 58・7・12 刑集 37 卷 6 号 791 頁

第10回 東京高判平成 25・7・23 判時 2201 号 141 頁

第11回 最判平成 7・6・30 刑集 49 卷 6 号 741 頁

第12回 最判平成 23・10・20 刑集 65 卷 7 号 999 頁

第13回 東京高判昭和 58・1・27 判時 1097 号 146 頁

第14回 最二小決平成 17・9・27 刑集 59 卷 7 号 753 頁

第15回 最判平成 18・11・7 刑集 60 卷 9 号 561 頁

5. 成績評価方法：

演習における報告内容，討論への貢献度による。

6. 教科書および参考書：

判例・裁判例の原文は，演習中に配布する。その他の参考文献（関連する論文，評釈等）については，演習中に指示する。

7. 授業時間外学習：

演習中に指示する。

8. その他：

履修者は，法学部又法科大学院で開講されている刑事訴訟法関連科目を履修済みの者に限る。

履修を希望する者は，担当教員のウェブサイトに記載されているメール・アドレスに連絡すること。

科目名：	民法演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	吉永 一行	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

この授業では Google Classroom（クラスコード：cgbsjak）を用いる。教員のメールアドレスは Yoshinaga.TU+2022@gmail.com である。

実施方法： 対面を原則とし、新型コロナウイルス感染症の状況に応じてオンライン（リアルタイム）にて実施するか、対面とオンラインのハイブリッドで行う。初回授業をオンライン（リアルタイム）でのみ行う必要がある場合には、下記 Google Classroom に Zoom アクセス用の URL を掲載する。

1. 授業題目：

民法に関するドイツ語文献を読む。

2. 授業の目的と概要：

民法に関するドイツ語文献を講読し、比較法的研究についての素養を修得する。

Students read the literature on German civil law and are trained on comparative legal research.

3. 学習の到達目標：

ドイツ語文献の購読を通じて、ドイツ民法に関する基本的知識とともに、選定されたテーマについての議論状況を把握する。さらに、得られた知識を通じて、日本における議論状況を相対化し、比較法的研究につなげる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

毎回、報告担当者にドイツ語文献の日本語訳を提出してもらい、参加者全員で検討する。適宜、内容についても議論を行う。

1. ガイダンス

2～15. 文献の講読と日本語訳の検討

5. 成績評価方法：

出席状況、議論への参加状況などを総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

受講者と相談の上、決定する。

7. 授業時間外学習：

担当回における翻訳の提出、担当以外の回における事前の検討を行う必要がある。

8. その他：

授業は隔週で開講する。開講日は初回授業日に発表する。

ドイツ語の能力について不安があれば、事前に担当教員に相談すること。

科目名：	民法演習B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	吉永 一行	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

この授業では Google Classroom（クラスコード： b2hgqv7）を用いる。教員のメールアドレスは Yoshinaga.TU+2022@gmail.com である。

実施方法： 対面を原則とし、新型コロナウイルス感染症の状況に応じてオンライン（リアルタイム）にて実施するか、対面とオンラインのハイブリッドで行う。初回授業をオンライン（リアルタイム）でのみ行う必要がある場合には、下記 Google Classroom に Zoom アクセス用の URL を掲載する。

1. 授業題目：

民法に関する日本語文献を読む。

2. 授業の目的と概要：

民法に関する日本語文献を講読し、日本民法学をめぐる幅広い問題について議論を行う。

Students read the literature on Japanese civil law and discuss a wide range of issues surrounding Japanese civil law.

3. 学習の到達目標：

文献の購読を通じて、民法に関する基本的知識とともに、選定されたテーマについての議論状況を把握する。さらに、法的議論の方法やその特徴などについても考察する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

毎回、報告担当者に文献の要約を提出してもらい、参加者全員で文献の内容を踏まえた議論を行う。

1. ガイダンス

2～15. 文献の講読と議論

5. 成績評価方法：

出席状況、議論への参加状況などを総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

受講者と相談の上、決定する。

7. 授業時間外学習：

担当回における要約の提出、担当以外の回における事前の検討を行う必要がある。

8. その他：

授業は隔週で開講する。開講日は初回授業日に発表する。

科目名：	実務知的財産法	科目区分：	大学院科目
担当教員：	蘆立 順美.戸次 一夫	開講期：	2022
授業形態：	講義	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	○戸次 一夫

連絡方法とクラスコード：

Classroom を使用する。クラスコード：qdmlkh3

実施方法： 対面

1. 授業題目：

実務知的財産法

2. 授業の目的と概要：

この授業は、知的財産法の全体像及びそれらの関係を理解するため、同法分野に属する諸法について、法制度や重要概念に関する基礎的知識を修得することを目的とする。特に、実務において重要性の高い事項を中心に取り上げ、具体的事例や各法制度の関係にも言及しながら、法的助言や紛争解決の前提として必要となる知識、及び、法的思考力等の修得を目指す。

3. 学習の到達目標：

知的財産法に属する諸法について、各法の基本構造や基本概念を正確に理解し、同法が関連する典型的事案について、適用される法律や問題の所在を整理し、結論を基礎づけることができる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

I. 授業方法

授業は、指定された文献等を素材として、基本的概念の確認や予習課題に関する質疑・応答により進められる。学生は、予習課題を検討した上で授業に参加することが要求される。

II. 授業の内容と順序

1. 知的財産法の全体像

2. 特許法の基礎

(1) 権利取得の手続

(2) 権利帰属

(3) 権利の内容

(4) 権利の制限

3. 意匠法の基礎

4. 著作権法の基礎

(1) 著作物

(2) 著作権・著作者人格権の帰属

(3) 著作権・著作者人格権の内容

(4) 権利の活用や権利行使

5. 不正競争防止法の基礎

(1) 商品等表示の保護

(2) 営業秘密の保護・その他の不正競争

6. 商標法の基礎

(1) 権利取得の手続

(2) 権利の内容と制限

7. 知的財産法各法の交錯領域、知的財産法分野における法改正の動向

5. 成績評価方法：

レポート試験 (80%)、平常点 (授業での発言の内容等) (20%) により評価する。なお、成績評価に際しては、上記の<達成度>が指標の1つとなる。

6. 教科書および参考書：

教科書：平嶋竜太＝宮脇正晴＝蘆立順美『入門 知的財産法〔第2版〕』有斐閣 2020

参考文献については、適宜、授業において配布、紹介する。

なお、知的財産法に属する諸法の最新の条文を各自準備し、授業に持参すること。

7. 授業時間外学習：

予習課題は、事前に Classroom に掲示するので、指定された内容を予習すること。

その他、詳細は、授業中に周知する。

8. その他：

法科大学院科目と合併開講（片平教育研究エクステンション棟にて実施）。

科目名：	民事手続法演習 B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	今津 綾子	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：
 クラスコード anmpsmw

質問は、授業の前後、又は google classroom 上で受け付ける。

実施方法： 対面

1. 授業題目：

民事手続法演習 B

2. 授業の目的と概要：

民事手続法の分野において、実務的に重要な最新のトピックを扱う。

This seminar teaches recent practical topics of the Civil Procedural Law and Insolvency Law, especially to doctoral students, who are graduated from Law School.

3. 学習の到達目標：

民事実務における最新のトピックから、最先端の民事手続法学上の論点を発見する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：訴訟法と実体法について
- 第3回：平時実体法と倒産実体法について
- 第4回：強制執行の実務的基礎（1）
- 第5回：強制執行の実務的基礎（2）
- 第6回：担保権実行の実務的基礎
- 第7回：民事保全の実務的基礎
- 第8回：破産法の手続的基礎（1）
- 第9回：破産法の手続的基礎（2）
- 第10回：破産法の実体法的基礎（1）
- 第11回：破産法の実体法的基礎（2）
- 第12回：民事再生法の手続的基礎（1）
- 第13回：民事再生法の手続的基礎（2）
- 第14回：民事再生法の実体法的基礎（1）
- 第15回：民事再生法の実体法的基礎（2）

5. 成績評価方法：

授業での発言頻度や内容に応じて評価する。

6. 教科書および参考書：

授業中に指示する。

7. 授業時間外学習：

授業前に、各回の内容について文献を参照し、わからないところを整理しておくこと。

授業後に、内容を復習すること。

8. その他：

科目名： 民事手続法演習A

科目区分： 大学院科目

担当教員： 今津 綾子

開講期： 2022

単位数： 2

授業形態： 演習

使用言語： 日本語

週間授業回数： 1回毎週

配当学年： -

対象学年： -

実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

クラスコード fw2bl6g

質問等は、google classroom 上で受け付ける。

実施方法： 対面

1. 授業題目：

民事手続法演習 A

2. 授業の目的と概要：

本演習は、後継者養成コースの院生とともに、近時の民事手続法における実務的なトピックを考察するものである。民事訴訟法、民事執行法、民事保全法、人事訴訟法、家事事件手続法、非訟事件手続法、倒産法などの領域において実務的に問題となっている応用的・先端的トピックを採り上げる。

This seminar teaches recent topics of the Civil Procedural Law especially to doctoral students, who are graduated from Law School.

3. 学習の到達目標：

民事手続法に関する応用的・先端的知識を蓄積する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

各回で1つ又は複数の判例を採り上げて、比較検討する。

第1回：オリエンテーション

第2回：当事者論（1）

第3回：当事者論（2）

第4回：処分権主義（1）

第5回：処分権主義（2）

第6回：弁論主義（1）

第7回：弁論主義（2）

第8回：証明責任・自由心証主義（1）

第9回：証明責任・自由心証主義（2）

第10回：判決効（1）

第11回：判決効（2）

第12回：民事執行（倒産法）

第13回：民事保全

第14回：人事訴訟法

第15回：家事事件手続法（非訟事件手続法）

5. 成績評価方法：

授業での発言頻度及び内容に応じて評価する。

6. 教科書および参考書：

授業中に指示する。

7. 授業時間外学習：

授業前に、取り上げる判例を読み、評釈等を確認しておく。

授業後に、内容を復習する。

8. その他：

科目名：	国際法演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	植木 俊哉	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

質問等は、Google Classroom 又はメールで随時受け付ける。メールアドレス：ueki@law.tohoku.ac.jp

実施方法： 当面はオンラインで実施する。但し、参加者の希望等を踏まえて変更する場合がある。

1. 授業題目：

国際法理論研究

2. 授業の目的と概要：

演習参加者各自が、国際法に関する各自の研究課題や最近の国際判例等に関する報告を行い、それに基づき質疑応答や討論等を行うことを通じて、国際法上の諸問題に関する専門的分析・検討を行う。

The purpose of this seminar is to develop each participant's academic skills of legal analysis on international law through his/her presentations and discussions on legal issues of international law during the seminar.

3. 学習の到達目標：

国際法の専門的研究に取り組むための各種の能力（研究課題の選択や問題設定の仕方、資料収集や分析の方法、報告レジュメの作成方法、プレゼンテーションや質疑応答の技法等を含む）を修得することを目標とする。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

演習参加者各自が、国際法上の研究課題や最近の国際判例等を取り上げて報告を行い、それに基づき参加者全員で質疑応答及び討論等を行う。質疑応答と討論においては、演習参加者全員が積極的にこれに貢献することが求められる。

Each participant shall make his/her presentation either on his/her own reserach topic on international law or on some judgements/decisions by International Trubunals or Courts relating to international law. Based upon these presentations, all participants will make discussions on related legal issues of international law. Each participant is expected to make some contributions through his/her presentations and discussions during the seminar.

5. 成績評価方法：

演習参加者各自が演習において行った報告の内容、毎回の演習での質疑応答や討論等における貢献状況等を総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

演習の中で使用する教科書及び参考書等は特に指定しないが、編集代表植木俊哉・中谷和弘『国際条約集 2022 年版』（有斐閣，2022 年）は毎回の演習の際に使用するのので、各自持参することが望ましい。

7. 授業時間外学習：

授業時間外にも、国際的な諸問題や事件等に幅広い関心と興味を抱くことが重要である。

8. その他：

演習参加者には、国際法に関する基礎的な専門知識と、国際法上の諸課題の探究に取り組む学問的意欲の双方が必要である。

科目名：	国際法演習B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	西本 健太郎	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google classroom (code: kfzmqgm)

実施方法： In person

1. 授業題目：

The Concept of Due Diligence in International Law

2. 授業の目的と概要：

The objective of this course is for students to acquire a deeper understanding of how the international legal system works by focusing on an important concept of international law that cuts across various fields of international law.

3. 学習の到達目標：

This course aims for students to acquire a better understanding of international law and foster their abilities in conducting research in this field. In particular, this course aims to enhance students' ability to accurately comprehend international law m

4. 授業の内容・方法と進度予定：

The course will be conducted in person unless the COVID-19 situation makes this impossible. Depending on the circumstances, there is a possibility of a transition to a hybrid or fully online format. However, the classes will be held as real-time meetings, even if the hybrid or online format is adopted.

Participants will make presentations (20-30 minutes) based on the allocated book chapter. They will be expected to report on what is discussed in the chapter and to extend the discussion through additional research and evaluation. The presentation will be followed by a discussion by all the participants (The format may be adjusted depending on the number of participants.).

The class will be based on the following book: Heike Krieger, Anne Peters, and Leonhard Kreuzer (eds.), *Due Diligence in the International Legal Order* (Oxford University Press, 2020). Further materials may be designated, depending on the interests of the participants.

The course is planned to proceed as follows (subject to modifications due to the number of participants)

- Introduction to the Course (week 1)
- Due Diligence in International Law (ch. 1) (week 2)
- Due Diligence and General International Law (ch. 2 to 6) (week 3 to 7)
- Student presentations based on selected chapters (week 8 to 14)
- Chapter 21: Conclusion (week 15)

5. 成績評価方法：

Grading will be based on the quality of the presentations (60%) and participation in the discussions (40%).

6. 教科書および参考書：

Heike Krieger, Anne Peters, and Leonhard Kreuzer (eds.), *Due Diligence in the International Legal Order* (Oxford University Press, 2020).

7. 授業時間外学習：

Students will be required to make preparations for their presentations and read the text for the discussions each week.

8. その他：

This course will be conducted in English.

科目名：	社会保障法演習 A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	嵩 さやか	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：awmysum

質問は授業後に受け付けるが、Google Classroom 上でも随時受け付ける。

実施方法： 原則として対面で実施するが、COVID-19 の状況によりオンラインに切り替えることがある。

1. 授業題目：

社会保障法の判例研究・政策研究

2. 授業の目的と概要：

本演習では、社会保障領域における重要な裁判例を受講者とともに分析するとともに、近年の重要な法改正や今後の政策の動きについて検討することを目的とする。

3. 学習の到達目標：

判例研究に関しては、判決文の論理を正確に理解できるようになるとともに、従来の裁判例との関係や学説を分析し、論理的な解釈論を展開できるようになる。

政策研究に関しては、近年の法改正の動きを追って、制度の変遷を正確に理解できるようになるとともに、直面している政策的課題について問題の所在とあるべき方向性について検討できる能力を身につける。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本演習では、受講者に判例評釈および政策研究を割り振り、担当者の報告をもとに全員で議論する方法をとる。ただし、受講者数により、授業方法を適宜変更する場合がある。

取り上げる裁判例や政策課題については、演習の初回に指定するが、重要な裁判例などが出された場合には内容を変更する場合がある。

第1回 ガイダンス

第2回～9回 判例研究（社会保険、社会福祉、生活保護等にかかる重要裁判例の検討）

第10回～14回 政策研究（近年の政策動向の調査・分析）

第15回 総括（社会保障法研究の課題についての検討）

5. 成績評価方法：

報告、発言、出席状況等に基づいた平常点（60%）と、レポート（40%）によって評価する。

6. 教科書および参考書：

教科書は特に指定しないが、社会保障関連の法律が掲載されている最新の六法（『社会保障・福祉六法』（信山社、2016年）や『ミネルヴァ社会福祉六法 2022』（ミネルヴァ書房、2022年）などでも良い）を毎回持参すること。

参考書：

『社会保障判例百選〔第5版〕』（有斐閣、2016年）

加藤智章・菊池馨実・倉田聡・前田雅子『社会保障法〔第7版〕』（有斐閣、2019年）

笠木映里・嵩さやか・中野妙子・渡邊絹子『社会保障法』（有斐閣、2018年）

西村健一郎『社会保障法入門〔第3版〕』（有斐閣、2016年）

7. 授業時間外学習：

適宜授業中に指示する。

8. その他：

科目名： 法理学演習A	科目区分： 大学院科目
担当教員： 樺島 博志	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： 英語
配当学年： -	対象学年： -
単位数： 2	週間授業回数： 1回毎週
実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード： JD1000311 ; fnjvc3h	
実施方法：	
<p>1. 授業題目： Advanced seminar of jurisprudence</p> <p>2. 授業の目的と概要： Presentation and discussion based on basic texts of jurisprudence</p> <p>3. 学習の到達目標： Within the framework of the session, the participant is expected to make a presentation summarizing each part of the seminar text. At the end of the seminar, she/ he is expected to submit a report paper related to the topics in the sessions, so as to acqu</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： The text to be read in the seminar is: H. Schnaedelbach, G. Keil (hrsg.): "Philosophie der Gegenwart- Gegenwart der Philosophie", Hamburg: Junius, 1993. I Introduction II Contents of the text 1 Schnaedelbach: Philosophie der Gegenwart - Gegenwart der Philosophie 2 Putnam: Hat Philosophie noch eine Zukunft? 3 Apel: Kann es in der Gegenwart ein postmetaphysisches Paradigma der Ersten Philosophie geben? 4 Zimmerli: Vom Unfug der theorielenen Philosophiegeschichte 5 Makkreel: Philosophiegeschichte in Beziehung zu Geistes 6 Bartuschat: Thesen zum Verhaeltnis von Philosophie und Philosophiegeschichte 7 Hahn, Vieweg: Zur Geschichte der Philosophie in der DDR 8 Simon-Schaefer: Wieviel Geschichte braucht der Mensch? 9 Imbach: Zur Praesenz des mittelalterlichen Philosophieverstaendnisses 10 Wieland: Intention, Gewissen, Naturrecht 11 Beckmann: Praesenz oder Praesentation? 12 Aubenque: Die Metaphysik als Uebergang III Discussion on Philosophie der Gegenwart</p> <p>5. 成績評価方法： Contents and quality of the presentation 40%; Competence in the discussion 20%; Contents and quality of the final report paper 40%.</p> <p>6. 教科書および参考書： H. Schnaedelbach, G. Keil (hrsg.): "Philosophie der Gegenwart- Gegenwart der Philosophie", Hamburg: Junius, 1993.</p> <p>7. 授業時間外学習： See also H. Schnaedelbach: Vernunft und Geschichte. Vorträge und Abhandlungen (1), Frankfurt/M 1987.</p> <p>8. その他：</p>	

科目名：	法理学演習B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	樺島 博志	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
単位数：		2	
週間授業回数：		1回毎週	
実務・実践的授業：			
連絡方法とクラスコード： JD1000312; yzqcpic			
実施方法：			
<p>1. 授業題目： Advanced seminar of jurisprudence</p> <p>2. 授業の目的と概要： Presentation and discussion based on basic texts of jurisprudence</p> <p>3. 学習の到達目標： Within the framework of the session, the participant is expected to make a presentation summarizing each part of the seminar text. At the end of the seminar, she/ he is expected to submit a report paper related to the topics in the sessions, so as to acqu</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： The text to be read in the seminar is continuous from the summer semester: H. Schnaedelbach, G. Keil (hrsg.): "Philosophie der Gegenwart- Gegenwart der Philosophie", Hamburg: Junius, 1993. I Introduction II Contents of the text 1 Gethmann-Siefert: Ethos und metaphysisches Erbe 2 Boehler: Verstehen, Konstruieren, Verantworten 3 Habermas: Edmund Husserl ueber Lebenswelt, Philosophie und Wissenschaft 4 Kambartel: Ueber die praktische Form unseres Lebens 5 Schwemmer: Wissenschaft und Kultur 6 Birnbacher: Ethische Dimensionen der Bewertung technischer Risiken 7 Wessel: Wie koennen wir den technischen Fortschritt verantworten? 8 Rapp: Technikentwicklung als Tat und Widerfahrnis 9 Hoeffe: Eine entmoralisierte Moral 10 Ottmann: Verantwortung und Vertrauen als normative Prinzipien der Politik 11 Pinkard: Pragmatische Theorie, Politik und Moralphilosophie III Discussion 1 Technologie und Ethik 2 Politik und Moral</p> <p>5. 成績評価方法： Contents and quality of the presentation 40%; Competence in the discussion 20%; Contents and quality of the final report paper 40%.</p> <p>6. 教科書および参考書： H. Schnaedelbach, G. Keil (hrsg.): "Philosophie der Gegenwart- Gegenwart der Philosophie", Hamburg: Junius, 1993.</p> <p>7. 授業時間外学習： See also H. Schnaedelbach: Zur Rehabilitierung des "animal rationale". Vorträge und Abhandlungen 2, Frankfurt/M 1992.</p> <p>8. その他：</p>			

科目名：	日本法制史演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	坂本 忠久	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

クラスコード 4fnxp6p

実施方法： 対面式で行う

1. 授業題目：

日本法制史に関する諸問題。

2. 授業の目的と概要：

日本法制史に関する文献、基本史料の購読。

Subscribe literature and fundamental history materials about Japanese Legal History.

3. 学習の到達目標：

文献や基本史料の内容を理解する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

どのような文献・史料を購読するかは、参加者の専攻、希望等を考慮しつつ決定する予定である。

5. 成績評価方法：

文献、史料購読の理解度、報告の内容等を総合的に判断する。

6. 教科書および参考書：

コピー等を配布する。

7. 授業時間外学習：

コピー等の内容を復習すること。

8. その他：

参加希望者は、初回時に必ず出席すること。

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行う。

クラスコード 4fnxp6p

科目名：	日本法制史演習B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	坂本 忠久	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：
実施方法： 対面式で行う

1. 授業題目：

日本法制史に関する諸問題。

2. 授業の目的と概要：

日本法制史に関する文献、基本史料の購読。

Subscribe literature and fundamental history materials about Japanese Legal History.

3. 学習の到達目標：

文献や基本史料の内容を理解する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

どのような文献・史料を購読するかは、参加者の専攻、希望等を考慮しつつ決定する予定である。

5. 成績評価方法：

文献、史料購読の理解度、報告の内容等を総合的に判断する。

6. 教科書および参考書：

コピー等を配布する。

7. 授業時間外学習：

コピー等の内容を復習する。

8. その他：

参加者は、初回時に必ず出席すること。

科目名：	西洋法制史演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	大内 孝	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業の連絡及び資料等の配信は、当面 Google Classroom を使用して行う。クラスコードは 3m7diqn

実施方法： 対面

1. 授業題目：

ラテン語文献の講読

2. 授業の目的と概要：

ラテン語文献を精読する。

Reading Latin texts of classical and medieval materials

3. 学習の到達目標：

飽くことなく辞書を引き、あらゆる可能性を考慮して、正確にラテン語を読むことができる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

教材の選択を含めて、全て参加者と相談の上で決める。

具体的な授業の形態は、COVID-19 の状況と、参加者数の状況とを勘案して柔軟に決定したいので、Google Classroom 上の連絡を常時注意されたい。現時点では教室での対面授業を予定している。

5. 成績評価方法：

毎授業時の取り組みから評価する。

6. 教科書および参考書：

授業開始後に説明する。

7. 授業時間外学習：

授業開始後に指示する。

8. その他：

参加を希望する者は、教務係を通して「4月8日正午までに必ず」大内に連絡し相談すること。

科目名：	日本政治外交史演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	伏見 岳人	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

l3uergd

実施方法： 対面

1. 授業題目：

日本政治外交史文献購読

2. 授業の目的と概要：

この授業は、日本政治外交史の近年の研究動向を理解するために、複数の研究書を読み比べて、その特徴などを多角的に検討するものである。今年度は、1920年代の日中関係と政党政治に関する研究書を講読する予定である。

3. 学習の到達目標：

日本政治外交史に関する研究書を独力で読み解き、研究動向について理解を深めること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

授業は、担当者による報告と、全体での討論を中心に行う。詳しい授業計画は初回の授業時に説明する。

授業は、原則として対面型で実施する。

1 イントロダクション 2 文献講読(1) 3 文献講読(2) 4 文献講読(3) 5 文献講読(4)
 6 文献講読(5) 7 文献講読(6) 8 文献講読(7) 9 文献講読(8) 10 文献講読(9)
 11 文献講読(10) 12 文献講読(11) 13 文献講読(12) 14 文献講読(13) 15
 まとめ

This objective of the seminar is to learn about political and diplomatic history of modern Japan in the 1920's. Participants need to read Japanese research books on the topic and attend all the classes in Kawauchi campus.

5. 成績評価方法：

平常点(100%)

6. 教科書および参考書：

- ・小林道彦『政党内閣の崩壊と満州事変』ミネルヴァ書房、2010年
- ・服部隆二『東アジア国際環境の変動と日本外交』有斐閣、2001年

7. 授業時間外学習：

授業の予習復習が必要となる。

8. その他：

公共政策大学院や修士課程との合併授業である。就職活動と両立したい学生には、報告担当回を優先的に選択できるなどの配慮を考えている。

授業担当者の連絡先は以下の通り。fushimi@law.tohoku.ac.jp

科目名：	日本政治外交史演習B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	伏見 岳人	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	2カ国語以上
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

uibr74e

実施方法： 対面

1. 授業題目：

日本政治外交史史料講読

2. 授業の目的と概要：

近代日本の政治や外交について研究する際に必要となる史料の読解力を向上させることを目的とする演習である。参加者は、毎回指定された史料を事前に判読し、その翻刻を作成した上で授業に臨むことになる。

3. 学習の到達目標：

近代日本の資料を独力で読み解き、その意味や背景を理解できるようになること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

くずし字と呼ばれる草書体や変体仮名を含む墨で書かれた史料を丁寧に判読していくことになる。この読解力の向上のためには反復練習が有効であり、そのための努力を厭わない参加者を歓迎する。講読する史料は、参加者の関心を踏まえた上で決定するが、今年度は、後藤新平の日記のうち、関東大震災後の復興院総裁時代などを精読する予定である。また参加人数によっては、近年に発表された専門書の講読を行うこともある。

The aim of this seminar is to help students to learn about the political leadership of Goto Spimpei (1857-1929), who served as the minister of interior affairs, minister of foreign affairs, and governor of Tokyo city hall. Participants are required to read his handwritten diaries and to attend all the classes in Kawauchi campus.

5. 成績評価方法：

報告や議論をもとに総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

テキストのコピーは当方で用意する。くずし字辞典を一冊(児玉幸多編『くずし字用例辞典 普及版』〔東京堂出版、1993年〕など)、各自で購入しておくこと。

7. 授業時間外学習：

テキストの読解には一定の予習時間が求められる。

8. その他：

公共政策大学院や修士課程との合併授業である。就職活動と両立したい修士2年生には、報告担当回を優先的に選択できるなどの配慮を考えている。

履修を検討している場合は、授業担当者に事前に連絡すること。授業担当者のメールアドレスは、以下の通り。fushimi@law.tohoku.ac.jp

科目名：	西洋政治思想史演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	鹿子生 浩輝	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

hiroki.kakoo.d5@tohoku.ac.jp クラスコード f2pdd6h

実施方法： 対面（コロナウィルスの状況に応じて変更することがある）

1. 授業題目：

西洋政治思想史 A（大学院ゼミ）

2. 授業の目的と概要：

この授業では、政治思想史の古典を講読する。授業の重要な目的は、学生が古典の著作の内容を正確に読み取る力を涵養することであり、プレゼンテーションおよびディスカッションの能力を陶冶することである。

The aim of this course is to help students read a historical book with accuracy and to improve the students' abilities to communicate and express their opinions.

3. 学習の到達目標：

- ①テキスト（文献）の議論の内容を正確に理解すること。
- ②そのために必要な歴史的・政治的知識を獲得すること。
- ③発話やプレゼンテーションの能力を高めるとともに、他の参加者の意見を真摯に聞く姿勢を涵養すること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

各回、報告者による報告、質疑応答の順で構成する。参加者には参加と予習、および積極的なコミットメントが不可欠である。報告者は、該当範囲のレジュメ、その他の参加者は、コメントを準備する必要がある。なお、政治思想史を専攻していない参加者も歓迎する。ホップズの『リヴァイアサン』を講読するが、参加者の数や質に応じて変更することもありうるため、初回の授業にはテキストを準備しておく必要はないが、必ず参加すること。差し当たり、次のような内容で進めていく。

1. オリエンテーション
2. 人間
3. 感覚
4. 造影
5. 言葉
6. 推理と科学
7. 情念
8. 論究の解決
9. 徳性
10. 知識の主題
11. 力と価値
12. 態度
13. 宗教
14. 人類の幸福
15. 自然法と契約

5. 成績評価方法：

平常点（テキストの正確な理解、発言の回数や質など）。

6. 教科書および参考書：

ホップズ『リヴァイアサン』（中公クラシックス）。参考書は必要に応じて演習の際に提示する。

7. 授業時間外学習：

上記の通り。

8. その他：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行うことを原則とする。

科目名：	西洋政治思想史演習B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	鹿子生 浩輝	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

hiroki.kakoo.d5@tohoku.ac.jp クラスコード wafemkw

実施方法： 対面（コロナウィルスの状況に応じて変更することがある）

1. 授業題目：

西洋政治思想史 B

2. 授業の目的と概要：

この授業では、政治思想史の古典を講読する。授業の重要な目的は、学生が古典の著作の内容を正確に読み取る力を涵養することであり、プレゼンテーションおよびディスカッションの能力を陶冶することである。

The aim of this course is to help students read a historical book with accuracy and to improve the students' abilities to communicate and express their opinions.

3. 学習の到達目標：

- ①テキスト（文献）の議論の内容を正確に理解すること。
- ②そのために必要な歴史的・政治的知識を獲得すること。
- ③発話やプレゼンテーションの能力を高めるとともに、他の参加者の意見を真摯に聞く姿勢を涵養すること。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

各回、報告者による報告、質疑応答の順で構成する。参加者には参加と予習、および積極的なコミットメントが不可欠である。報告者は、該当範囲のレジュメ、その他の参加者は、コメントを準備する必要がある。なお、政治思想史を専攻していない参加者も歓迎する。ホブズ『リヴァイアサン』を講読する予定だが、参加者の数や質に応じて変更することもありうるため、初回の授業にはテキストを準備しておく必要はないが、必ず参加すること。差し当たり、次のような内容で進めていく。

1. オリエンテーション
2. コモンウェルス
3. 設立による主権
4. 父権
5. 臣民の組織
6. 主権の代行者
7. コモンウェルスの繁栄
8. 忠告
9. 市民法
10. 犯罪
11. 処罰と報酬
12. コモンウェルスの解体
13. 主権的代表
14. 自然による王国
15. 総括

5. 成績評価方法：

平常点（テキストの正確な理解、発言の回数や質など）。

6. 教科書および参考書：

ホブズ『リヴァイアサン』（中公クラシックス）。参考書は必要に応じて演習の際に提示する。

7. 授業時間外学習：

上記の通り。

8. その他：

授業の連絡及び講義資料等の配信は、Google Classroom を使用して行うことを原則とする。

科目名：	現代政治分析演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	金子 智樹	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡は Google Classroom で行います（クラスコードは rk1ee7a）。授業担当者の連絡先は tomoki.kaneko@tohoku.ac.jp です。

実施方法： 対面**1. 授業題目：**

現代政治分析文献講読—英文ジャーナルを題材に

2. 授業の目的と概要：

本演習では、政治学の英文ジャーナル（APSR、AJPS、JOP など）に掲載された論文を講読します。トップジャーナルに掲載された実証研究の水準を検討することに加え、研究者に必要な英文速読能力を養うことが授業の目的です。

In this seminar, students will read articles published in journals of political science (APSR, AJPS, JOP, etc.). The main purpose of this course is to examine the standard of empirical research published in top journals and to develop the speed-reading skills necessary for researchers.

3. 学習の到達目標：

「有名なジャーナルに掲載＝優れた論文」というわけでは必ずしもありませんが、海外のトップジャーナルで発表されている研究の水準を知ることは、政治学の現在地を学ぶ上で重要です。本演習を通して、各参加者がそれらの論文に対する評価軸を持てるようになることが期待されます。毎週一定のペースで英語論文を講読して速読能力を鍛えることも、特に研究者志望の皆さんにとっては目標になります。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

American Political Science Review、American Journal of Political Science、Journal of Politics などのジャーナルに掲載された実証研究の論文を、毎週 2 本ずつ読み進めます。どの論文を取り上げるかは、参加者の興味関心も考慮しながら決定します。

参加者（全員）：それぞれの論文を読み、前日までにコメント（論文に対する評価や疑問など）を共有します。各論文の担当者：論文の内容をまとめたレジュメと、他の参加者からのコメントを再構成したコメントペーパーを作成します。授業では、まずレジュメの内容を報告し、コメントペーパーに基づいてディスカッションをリードします。

新型コロナウイルスの感染拡大状況を注視しながら、基本的には対面で実施する予定です。ただし、場合によってはオンライン形式での実施に切り替える可能性もあり得ます。諸連絡は Google Classroom 経由で行いますので、こまめにチェックするようにしてください。

5. 成績評価方法：

平常点 100%です。自分が担当した論文の報告内容、毎回のコメント提出、ディスカッションにおける積極性などを総合的に評価します。

演習授業ですので、全ての授業回への参加が原則です。新型コロナウイルス感染などの止むを得ない事情を除き、欠席は大幅に減点します。

6. 教科書および参考書：

特に指定しません。

7. 授業時間外学習：

毎回の演習でアサインされた論文を読むだけでは、その研究の背景や先行研究との関係などを十分に知ることはできません。授業時間外では、関連する様々な文献を渉猟する積極性が各参加者に求められます。

8. その他：

履修を検討している人は、Google Classroom に登録した上で、初回の授業に必ず参加するようにしてください。

なお本演習は、研究大学院（修士課程・博士課程）の合同開講です。

科目名：	現代政治分析演習B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	金子 智樹	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡は Google Classroom で行います（クラスコードは s63r2ee）。授業担当者の連絡先は tomoki.kaneko@tohoku.ac.jp です。

実施方法： 対面

1. 授業題目：

現代政治分析文献講読——モノグラフを題材に

2. 授業の目的と概要：

本演習では、近年に出版された政治学の研究書を講読します。その多くは著者の博士論文を基に書かれたモノグラフであり、「政治学の博士論文を執筆するとはどのような営みか」を学ぶことが授業の目的です。高い学修意欲を持つ皆さんの参加を歓迎します。

In this seminar, students will read research books on political science published in recent years (monographs based on the author's doctoral dissertation). The main purpose of this course is to learn what kind of activity it is to write a dissertation in political science.

3. 学習の到達目標：

近年出版された単著の書籍を講読し、政治学の博士論文執筆に求められる水準を知ることが大きな目標になります。各参加者が（狭い意味での）研究関心以外の分野を学び、自身の研究の幅や視野を広げることが求められます。また特に留学生の参加者は、日本語の重厚な研究図書を精読する経験を積むことも目的となります。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

本演習は、隔週・2限連続で開講します。計7冊の文献を講読することになりますが、それぞれページ数が多く比較的高価な書籍であり、参加者の時間的・金銭的な負担は重い授業になります。なお、1名以上の参加希望者がいれば開講しますので、ごく少人数の演習となる可能性もあり得る点に留意してください。

各回の授業は下記のように進める予定です。

参加者（全員）：それぞれの書籍を読み、前日までにコメント（学術的な評価や疑問点など）を共有します。

各回の担当者：書籍の内容をまとめたレジュメと、他の参加者からのコメントを再構成したコメントペーパーを作成します。授業では、まずレジュメの内容を報告した上で、コメントペーパーに基づいてディスカッションをリードします。

2022年3月時点では、下記の7冊の書籍を講読することを予定しています（授業までの出版状況によって一部を差し替える可能性あり）。

- 原田峻（2020）『ロビイングの政治社会学：NPO 法制定・改正をめぐる政策過程と社会運動』有斐閣。
- 千葉涼（2021）『ニュースの多様性とは何か：データ分析で問い直すジャーナリズムのあり方』勁草書房。
- 三谷文栄（2021）『歴史認識問題とメディアの政治学：戦後日韓関係をめぐるニュースの言説分析』勁草書房。
- 朴志善（2021）『立法前協議の比較政治：与党内不一致と日韓の制度』木鐸社。
- 米岡秀眞（2022）『知事と政策変化：財政状況がもたらす変容』勁草書房。
- 渡邊有希乃（2022）『競争入札は合理的か：公共事業をめぐる行政運営の検証』勁草書房。
- 具裕珍（2022）『保守市民社会と日本政治 日本会議の動員とアドボカシー：1990-2012』青弓社。

新型コロナウイルスの感染拡大状況を注視しながら、基本的には対面で実施する予定です。ただし、場合によってはオンライン形式での実施に切り替える可能性もあり得ます。諸連絡は Google Classroom 経由で行いますので、こまめにチェックするようにしてください。

5. 成績評価方法：

平常点 100%です。自分が担当した書籍に関する報告内容、毎回のコメント提出、ディスカッションにおける積極性などを総合的に評価します。

演習授業ですので、全ての授業回への参加が原則です。新型コロナウイルス感染などの止むを得ない事情を除き、欠席は大幅に減点します。

6. 教科書および参考書：

各回で取り扱う書籍以外には特に指定しません。

7. 授業時間外学習：

各回の授業でアサインされた書籍を読むだけでは、その研究を十分に咀嚼して評価することはできません。関連する先行研究を渉猟し、著者のこれまでの研究経緯などを理解した上で演習に参加することが期待されます。

8. その他：

履修を検討している人は、**Google Classroom** に登録した上で、初回の授業に必ず参加するようにしてください。

なお本演習は、研究大学院（修士課程・博士課程）の合同開講です。

科目名： 中国政治演習 A

科目区分： 大学院科目

担当教員： 阿南 友亮

開講期： 2022

単位数： 2

授業形態： 演習

使用言語： 日本語

週間授業回数： 1回毎週

配当学年： -

対象学年： -

実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

クラスコード： tjdbd6y

実施方法： リアルタイム

1. 授業題目：

中国政治演習 I

2. 授業の目的と概要：

本演習では、日本を代表する東洋史研究者の宮崎市定の代表的な著作を精読し、東洋史の視座に関する基本的な理解を修得し、それを近代以降の時代（中華民国、中華人民共和国）を扱った中国研究に活用する方法を検討する。

This seminar will read several classics of Oriental Studies written by Ichisada Miyazaki and will discuss how to apply the various perspectives of Oriental Studies to Modern China Studies.

3. 学習の到達目標：

大学院レベルで中国政治研究を進めるうえで最低限必要となる東洋史の視座に関する基本的な理解の修得。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

受講学生は、宮崎市定の著作に関して定期的にプレゼンテーションをおこないつつ、他の学生の報告に対するコメントやディスカッションをおこなうことが求められる。

学期末には、課題図書の内容を踏まえた個人研究の報告をおこない、その内容を反映した期末レポートを提出することが求められる。

5. 成績評価方法：

受講態度（10%）、教材に関する複数回のプレゼンテーション（合計30%）、期末プレゼンテーション（20%）、ディスカッションへの貢献度（10%）、期末レポート（30%）から総合的に判断する。

6. 教科書および参考書：

教科書

宮崎市定『宮崎市定全集』第一巻、第二巻、第十七巻、岩波書店、1993年。

7. 授業時間外学習：

本演習を受講する学生は、授業時間外において、次週の授業で扱う教材を読み、プレゼンテーション、コメント、ディスカッションの準備をすることが求められる。また、期末レポートの執筆も授業時間外の重要な作業となる。

8. その他：

本演習は、Google Hangouts Meet を使ってオンライン形式でおこなう。履修学生は、東北大学の Google Classroom の以下のクラスコードにアクセスし、そこで Google Hangouts Meet のアドレスを確認し、授業開始の5分前にアクセスをすること。

クラスコード： tjdbd6y

本演習は、中国政治に関する専門性の高い内容となっている。中国政治史に関する中国語の論文を読解するのに必要な中国語の能力が求められる。中国政治を専攻していない学生は、事前に担当教員と相談し、許可

科目名：	中国政治演習B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	阿南 友亮	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Class code: 6vtbp2X

実施方法： On-line Real Time

1. 授業題目：

Seminar on Chinese Politics

2. 授業の目的と概要：

This seminar will contemplate over the relationship of nations states and social revolutions by examining monographs which deal with this topic.

3. 学習の到達目標：

Deepening one's understanding on comparative politics dealing with the formation of nation states including China.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

In the first half of this semester, students will be required to take part in discussions regarding the text book. In the second half of this semester, students must conduct their own research on a topic related to modern Chinese politics.

Students will be require to give multiple presentations and participate in each week's discussion.

5. 成績評価方法：

Attendance rate(10%), presentation(40%) , contribution to discussion(20%), term paper(30%)

6. 教科書および参考書：

Text book:

Theda Scokpol, States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia, and China. Cambridge University Press, 1979.

7. 授業時間外学習：

Over the semester, students will be required to prepare multiple oral presentations and a term paper.

8. その他：

Undergraduate-level training on contemporary Chinese politics is required in order to attend this seminar. Students who do not have such academic background must consult with the professor before registration.

English language fluency equivalent to 80 po

科目名：	外国法文献研究A (英米法)	科目区分：	大学院科目
担当教員：	芹澤 英明	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコード cpkdbfb

講義室：片平 206 演

実施方法： 対面

1. 授業題目：

最新アメリカ法判例・文献研究

2. 授業の目的と概要：

ここ数年の間に出されたアメリカ合衆国最高裁判決を原文(英文)、及び関連文献(判例評釈・論文類)を精読することにより、英米法（特にアメリカ法）に対する理論的・学問的理解を深めるための基礎的な訓練を行う。

The focus is on close reading of selected recent U.S. Supreme Court cases and related commentaries and law review articles.

Students are invited to train themselves to acquire the basic skills and knowledge necessary to the understanding of American legal practice and recent theoretical developments of American law.

3. 学習の到達目標：

研究者志望の者だけでなく、実務法曹を目指す者が、将来、法律実務（国際法務を含むがそれに限らない）にたずさわりながら、大学等の研究機関で、より高度な法学研究を続けるための基礎力を養成する。

英米法分野を研究するときに必要とされる判例読解能力を涵養し、判例に内在する理論の分析方法を修得した上で、理論と実務の緊密な関連性について理解する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

授業は、個人指導ないしグループ指導のためのテュートリアル (tutorial) 方式で行う。

1. ガイダンス
2. 判例・文献の解説・選択
3. テュートリアル（予習を前提にした文献読解・質疑応答・個別指導）
4. //
5. //
6. //
7. //
8. //
9. //
10. //
11. //
12. //
13. ゼミレポート作成指導・添削
14. //
15. ゼミレポートの提出および講評

5. 成績評価方法：

最終ゼミレポートにより評価する。ゼミレポートは、脚注付きの小論文形式とし、内容については、リーガル・リサーチを行った上で、授業で精読した文献ないし判例の紹介を行うものとする。

6. 教科書および参考書：

合衆国最高裁判決の原文プリント。

その他、判例読解のために参考となりかつアメリカ法理論の傾向を示す文献類をプリントして配布する。

7. 授業時間外学習：

8. その他：

研究大学院修士課程・博士課程と法科大学院課程との共通科目として開講される。片平キャンパスの法科大学院で開講される。

科目名：	民法研究会	科目区分：	大学院科目
担当教員：	鳥山 泰志	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	4
		週間授業回数：	変則
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom／クラスコード ea3m3p3

実施方法： 当面の間はオンライン（リアルタイム）とする。

1. 授業題目：

民法研究会

2. 授業の目的と概要：

民事法学の研究課題又は民事分野の重要判例について研究報告して議論を行う。

In this workshop, the participants report and discuss the topics of civil law or the important jurisprudences.

3. 学習の到達目標：

民事法学の研究者としての基礎的能力を培う。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

・本演習では、主として次の2つの事項を扱う。

- ① 近時の最高裁判決の判例評釈
- ② 民事法に関わる個別のテーマの研究

・演習の進め方としては、各回に、参加者の報告に基づき、参加者全員で議論する。原則として、所定回の報告を行うことが単位取得の要件である。

・本演習は、「民法研究会」として、民法担当教員が全員出席するほか、本学及び他大学の民事法研究者等が参加することもある。

・演習は、原則として月1回程度行われる。その日程及び内容の詳細については、その都度掲示などにより通知する。

5. 成績評価方法：

報告の内容、議論参加の状況に基づいて、行う。なお、所定回数の報告を行うことが単位取得の要件となる。

6. 教科書および参考書：

毎回、事前に参考文献を通知する。

7. 授業時間外学習：

事前に通知される参考文献により十分な予習をして参加することが求められる。

8. その他：

科目名：	社会法研究会 A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	嵩 さやか・桑 村 裕美子	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	変則
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

基本的にメールにて連絡する。

Google Classroom のクラスコード：ct7iugl

実施方法： オンライン（リアルタイム）。ただし、今後の COVID-19 の状況次第では、対面に切り替える場合もある。

1. 授業題目：

社会法研究会 A

2. 授業の目的と概要：

本研究会は、労働法・社会保障法の研究者・実務家および大学院生で構成され、判例評釈や研究報告を通して先端的なテーマ・論点について議論し、より専門的なテーマについての理解を深めることを目的とする。さらに、本研究会での報告を通じて、判例評釈の方法や研究の進め方について学ぶことも重要な目的のひとつである。

This seminar is composed of researchers, practitioners (lawyers etc.), and graduate students of labor law and social security law. By discussing advanced themes and issues through judicial precedents and research reports, it aims to deepen the understanding of more specialized themes and to learn how to interpret judicial precedents and how to conduct research.

3. 学習の到達目標：

第一に、研究会で交わされる議論を理解し、それについての自分なりの意見・議論を展開できるようにする。
第二に、判例評釈や報告を自ら行うことにより、評釈や研究報告を行う能力を身につける。

4. 授業の内容・方法と進捗予定：

<授業内容>

各回で取り扱う判例あるいは報告テーマについて各自予習していることを前提に、報告者が行った判例評釈や研究報告について全員で自由に議論する。

<本研究会の進め方について>

本研究会は、昨年度に引き続きオンラインで実施する予定であるが、今後の COVID-19 の状況に応じて変更する可能性がある。

研究会に履修登録した場合には、次回研究会の内容・レジュメ等をメールにより連絡する。

5. 成績評価方法：

研究会への出席状況、発言、報告などに基づく平常点にて評価する。

6. 教科書および参考書：

特になし。

7. 授業時間外学習：

各回で取り上げられる判例や報告テーマについて予習して研究会に臨むこと。研究会後は、研究会での議論を振り返り、さらに文献等にあたりながら検討を深めることが望ましい。

8. その他：

科目名：	刑事法判例研究会A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	成瀬 幸典	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	変則
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

naruse@law.tohoku.ac.jp クラスコードは pam3gsg です。

実施方法： 対面式で行うことを予定していますが、新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては、オンライン形式で行います。

1. 授業題目：

刑事法判例研究会

2. 授業の目的と概要：

本授業科目は、刑法、刑事訴訟法、少年法及び刑事政策等のいわゆる刑事法分野の研究者、実務家、大学院生等が出席する研究会における刑事法に関する判例研究を通して、刑事法に関する専門的な理解を深めることを目的とする。

The aim of this course is to improve students' expert understanding of criminal law and criminal procedure through research on a criminal case in a workshop. Researchers, practitioners, graduate students, who specialize in criminal law, criminal procedure, juvenile law, and criminal policy, attend the workshop.

3. 学習の到達目標：

報告者の報告を素材にした議論を通じて刑事判例に関する理解を深めるとともに、判例評釈や判例研究を行う能力を身につける。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

報告者が行う判例に関する研究報告を素材にして、参加者全員で議論を行う。

具体的な予定は、講義（本研究会）の第1回目に、参加者と相談のうえで決定する。

5. 成績評価方法：

講義（本研究会）への出席状況、発言、報告などを基礎に総合的に評価する。

6. 教科書および参考書：

なし。

7. 授業時間外学習：

研究会当日までに、取り上げられる判例・裁判例を精読し、関連する文献についても調査・検討しておくこと。

8. その他：

科目名：	比較政治学演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	横田 正顕	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom を通じて連絡する。クラスコード：kntdsck

実施方法： 初回（説明会）のみオンライン（リアルタイム）で実施し、以後演習室にて対面方式で行う（国外在住者についてはオンラインでの参加が可能）。

1. 授業題目：

Baldwin, *Fighting the First Wave* を読む

2. 授業の目的と概要：

Covid-19 の危険性が報じられてからすでに 2 年が経過し、その間に様々な情報や知見がもたらされたが、同時に誤った情報の拡散や、各国政府の対応の良し悪しの差も目立つようになった。このことは、科学的問題が科学的合理性のみをもって解決されるとは限らないことを示唆している。この授業では、感染拡大第 1 派の際の主要国の対応の違いを見ることで、その違いが何によってもたらされたのかを比較検討することを目的とする。

3. 学習の到達目標：

- 1) 科学に関わる問題の解決が政治を通じてどのように促進され、または阻害されるのかについての理解を深める。
- 2) 日々更新される科学的知見を通じて、古びてしまった情報や分析結果をどう受け止めるべきかについて、実例を通じて理解する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

Peter Baldwin, *Fighting the First Wave*, Cambridge University Press, 2021 を 1 章ずつ読み進め、初回（説明会）を除いて 9 回で完結する。各回についてコメントペーパーを作成してもらい、授業ではそれをもとに討論を行う。Introduction: One Threat, Many Responses は説明会の際に配布するので、次までに各自で読んでくること。

第 1 回 1. Science, Politics, and History: Do They Explain the Variety of Approaches to Covid-19?

第 2 回 2. New Dogs, Old Tricks: Fighting Covid-19 with Ancient Preventive Tactics

第 3 回 3. The Politics of Prevention: How State and Citizen Interacted, Battling the Virus

第 4 回 4. What Was Done? Act One of the Pandemic

第 5 回 5. Why the Preventive Playing Field Was Not Level: Geography, Prosperity, Society

第 6 回 6. Where and Why Science Mattered: Traditional Chinese Medicine, Herd Immunity, Asymptomatic Carriers, Superspreading, and Masks

第 7 回 7. From State to Citizen: The Individualization of Public Health

第 8 回 8. Who is Responsible for Our Health? How Prevention was Enforced

第 9 回 9. Difficult Decisions in Hard Times: Trade-offs between Being Safe and Solvent; Conclusion: Public Health and Public Goods: The State in a Post-Pandemic World

5. 成績評価方法：

最低限の義務としてのコメントペーパーの提出...45%（コメントペーパー1回につき 5%と考える）

授業への積極的参加...45%

出席...10%

この授業は参加型であるので、無断欠席等は認めない。目立つ場合には履修を取り消す。

6. 教科書および参考書：

Peter Baldwin, *Fighting the First Wave*, Cambridge University Press, 2021

個別的な参考文献については授業中に紹介する。

7. 授業時間外学習：

Covid-19 と政治との関係に関する文献は加速度的に蓄積されつつあるので、日常的に Google Scholar 等を通じてどのような文献があるのか、どのような論点が提起されているのかについて、各自で押さえておくこと。できればそれらも読んで授業に参加することが望ましい。

8. その他：

科目名：	比較政治学演習 B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	横田 正顕	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom を通じて連絡する。クラスコード：bblvopj

実施方法： 対面方式で実施する。

1. 授業題目：

戦争とデモクラシー

2. 授業の目的と概要：

政治学の有名な命題に「デモクラティック・ピース」があるが、アメリカ合衆国の対外政策に見られるように、デモクラシーを標榜する国家がむしろ好戦的に振る舞う場合も古来少なからずある。そもそも古代アテネの民主政も、戦士の共同体を基礎に形成された政治体であった。この授業では、*Forged through Fire* の購読を通じて、デモクラシーの発展と戦争との本質的な結びつきについて考察を深めたいと考える。

3. 学習の到達目標：

- 1) デモクラシーと戦争に関する様々な理論的命題とその問題点について理解する。
- 2) 古代と現代のデモクラシーをつなぐものが何であるのかを理解する。
- 3) テキストの知見が現代世界を理解する上でどのように役立つのかについて自分の考えを持ち、それを応用する能力を身に着ける。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

John Ferejohn and Frances McCall Rosenbluth, *Forged Through Fire: War, Peace, and the Democratic Bargain*, Liveright, 2017 を原則 2 章ずつ読み進め、初回（説明会）を除いて 6 回で読了する。各回には報告者を置き、担当章の内容報告とコメントを披露してもらう。これをもとに全体で討論を進め、テキストに関する理解を深める。

第 1 回 Introduction

第 2 回 Chapter 1 The Twenty-First-Century Wars Without Citizen Armies ; Chapter 2 War and Democracy in Classical Athens

第 3 回 Chapter 3 The Glory That Was Rome ; Chapter 4 A Millennium of Landed Aristocracy

第 4 回 Chapter 5 The Emergence of Monarchy in France and Spain ; Chapter 6 War and Representation in England, the Netherlands, and Sweden

第 5 回 Chapter 7 Italian Republics ; Chapter 8 Eastern Lands in Early Modern Europe

第 6 回 Chapter 9 Mountain Republics ; Chapter 10 The Nineteenth-Century Pivot

5. 成績評価方法：

最低限の義務としての報告...60%

授業への積極的参加度...40%

この授業は参加型であるので、無断欠席等は認めない。目に余る場合には履修を取り消す。

6. 教科書および参考書：

John Ferejohn and Frances McCall Rosenbluth, *Forged Through Fire: War, Peace, and the Democratic Bargain*, Liveright, 2017.

テキストはあらかじめ各自で購入してもよいが、未着の場合などを考慮してこちらで準備し配布する。

7. 授業時間外学習：

報告のあるなしに関わらず、各章における歴史用語や政治学概念について、あらかじめ調べて起き、授業中に指名されても答えられるようにしておくこと。デモクラシーに関する最新の研究についてどのようなものがあるのか、Google Scholar などによって調査し、できればそれらも併せ読んで授業に臨んだり、報告レジュメの作成に反映させること。

8. その他：

科目名：	上級エクスターンシップA	科目区分：	大学院科目
担当教員：	曾我 陽一	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		週間授業回数：	--
		実務・実践的授業：	○

連絡方法とクラスコード：

実施方法： 授業内容については、対象となる学生に別途お知らせします。

1. 授業題目：
2. 授業の目的と概要：
3. 学習の到達目標：
4. 授業の内容・方法と進度予定：
5. 成績評価方法：
6. 教科書および参考書：
7. 授業時間外学習：
8. その他：

科目名：	上級エクスターンシップB	科目区分：	大学院科目
担当教員：	曾我 陽一	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		週間授業回数：	--
		実務・実践的授業：	○

連絡方法とクラスコード：

実施方法： 授業内容については、対象となる学生に別途お知らせします。

1. 授業題目：
2. 授業の目的と概要：
3. 学習の到達目標：
4. 授業の内容・方法と進度予定：
5. 成績評価方法：
6. 教科書および参考書：
7. 授業時間外学習：
8. その他：

科目名：	法政実務カンファレンスA	科目区分：	大学院科目
担当教員：		単位数：	1
開講期：	2022	週間授業回数：	---
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
実務・実践的授業：		対象学年：	-
配当学年：	-		

連絡方法とクラスコード：
実施方法：

1. 授業題目：
2. 授業の目的と概要：
3. 学習の到達目標：
4. 授業の内容・方法と進度予定：
5. 成績評価方法：
6. 教科書および参考書：
7. 授業時間外学習：
8. その他：

科目名：	法政実務カンファレンスB	科目区分：	大学院科目
担当教員：		単位数：	1
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	週間授業回数：	--
		対象学年：	-
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：
実施方法：

1. 授業題目：
2. 授業の目的と概要：
3. 学習の到達目標：
4. 授業の内容・方法と進度予定：
5. 成績評価方法：
6. 教科書および参考書：
7. 授業時間外学習：
8. その他：

科目名： 国際カンファレンスA	科目区分： 大学院科目
担当教員： 森田 果	開講期： 2022
授業形態： 演習	使用言語： ---
配当学年： -	対象学年： -
実務・実践的授業：	
連絡方法とクラスコード： TBA	
実施方法： TBA	
<p>1. 授業題目： Presentation and Research Skills for Graduate Students</p> <p>2. 授業の目的と概要： COURSE OBJECTIVES AND OUTLINE: This seminar is aimed at helping the participants to develop their academic presentation and research skills and to give participants the opportunity to present and discuss their research with peers. This seminar includes a number of practical skills, and requires students to reflect on their research habits and schedules. Thus it can serve as a kind of pace-maker for students in conducting their own research. Participants will also have a chance to present about the progress in their individual research at the end of the semester. This course is similar in its aims to “International Colloquium”, which is offered during the spring semester, but this course focuses more heavily on the skills for presenting one’s research in an international setting.</p> <p>3. 学習の到達目標： GOAL OF STUDY: The participants will develop academic presentation and research skills necessary for graduate students and scholars, particularly those who wish to present and pursue their research on an international stage.</p> <p>4. 授業の内容・方法と進度予定： CONTENTS, METHOD AND PROGRESS SCHEDULE: Those participants whose research is developed far enough might have the chance to present their research in English during an interdisciplinary conference held in Tohoku University. The participants not presenting during the conference will be expected to make a presentation concerning progress on their research during the final class sessions of the semester. We will read chapters from how-to books for graduate students and international scholars on academic presentations, discuss methods, and put the knowledge to practice. We will also be reading and discussing chapters/materials concerning other academic and research skills. The specific topics will be chosen by the participants during the first class according to their needs and interests (a list with suggestions will be provided by the instructor). See also TEXTBOOKS AND REFERENCES section below.</p> <p>Tentative Schedule: 1. Introduction, orientation. 2. ~6. Reading, presenting and discussing book chapters, attending library orientation, attending an international conference, etc. 7. Final presentations.</p> <p>5. 成績評価方法： GRADING CRITERIA: Presentation(s): 65 % Class participation: 35 %</p> <p>6. 教科書および参考書： TEXTBOOKS AND REFERENCES: Reading assignments will be distributed in class, and will most likely come from one of the following books: John A.Finn, Getting A Phd, An Action Plan to Help Manage Your Research, Your Supervisor and Your Project (Routledge,</p> <p>7. 授業時間外学習： WORK TO BE DONE OUTSIDE OF CLASS: Students are required to prepare for individual presentations concerning their research, as well as make short presentations summarizing additional book chapters we might read and discuss in class. All students are requ</p> <p>8. その他：</p>	

This course will be conducted in English.

All students wishing to register for this course should note that attendance in all of the sessions is mandatory, and absences without a good reason and without notifying the instructor in advance will result in

科目名：	国際コロキアムA	科目区分：	大学院科目
担当教員：	滝澤 紗矢子	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	1
		週間授業回数：	1回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

tkfbrgi

実施方法：オンライン（リアルタイム）

1. 授業題目：

Research and Study Skills for Graduate Students

2. 授業の目的と概要：

COURSE OBJECTIVES AND OUTLINE:

This seminar is aimed at helping the participants to develop their research and study skills as graduate students. The seminar also provides the participants with an opportunity to present and discuss their research progress with peers. We will read and discuss chapters from Gina Wisker's "The Postgraduate Research Handbook" and other handbooks for graduate students concerning the basics of choosing a research question and methodology, reading academic articles and doing literature reviews, making up and sticking to a research schedule, time-management, etc. Participants of the seminar are also required to complete a number of practical tasks and assignments, which can be used to pace and develop the participants' work towards their Masters or PhD thesis. In this sense, this seminar can serve as a kind of pace-maker for students in conducting their own research. Participants will also have a chance to present about the progress in their individual research at the end of the semester.

3. 学習の到達目標：

GOAL OF STUDY:

Participants of the seminar will acquire and develop research and study skills necessary for graduate school. Participants will also start or develop their research projects during this seminar.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

CONTENTS, METHOD AND PROGRESS SCHEDULE:

We will read and discuss chapters from handbooks for graduate students. Participants of the seminar are also required to complete a number of practical tasks and assignments, which can be employed to pace and develop the participants' work towards their Masters or PhD thesis. At the end of the semester, participants will present about the progress in their individual research (/readings).

The proposed schedule for this seminar is as follows:

1. Orientation – studying and doing research in graduate school
2. Setting a research question.
3. Reading for class and for individual research. Critical reviews and literature review.
4. Critical review: Practice
5. Time-management, coping mechanisms, working together
6. Plagiarism and citing.
7. Final presentations (*Those participants whose research has already sufficiently advanced, are expected to present about their progress and findings so far. Those who are just starting with their research might consider giving a presentation based on a more extensive literature review, which could contain the basic texts of their field of interest/specialty.)

*This is only a preliminary schedule and might be slightly altered according to the needs of the participants.

5. 成績評価方法：

GRADING CRITERIA:

Class participation and assignments: 40 %

Literature reviews and final presentation: 60 %

6. 教科書および参考書：

TEXTBOOKS AND REFERENCES:

Reading assignments will be distributed in class, but the lecturer would like to recommend the following books for further reading:

G. Wisker, The Postgraduate Research Handbook 2nd ed., Palgrave Macmillan, 2008

M. Davies, Stu

7. 授業時間外学習 :

WORK TO BE DONE OUTSIDE OF CLASS:

All students are required to read the assigned book chapters and complete the additional assignments prior to class. Students are also required to critically read several academic texts of their choice, that are related

8. その他 :

ADDITIONAL COMMENTS:

This class will be taught online. The Google Classroom class code is saeavym.

This course will be conducted in English (the text for individual literature reviews may include Japanese texts or texts in other languages).

All student

科目名：	国際政治経済論演習A	科目区分：	大学院科目
担当教員：	岡部 恭宜	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Class code: yo23slg

Link to Meet: <https://meet.google.com/afd-woms-xnn>

実施方法：Hybrid (Face-to-face and online). Students are required to register for the course at Google Classroom, through which class information will be provided.

1. 授業題目：

Seminar on International Political Economy A/I

2. 授業の目的と概要：

This seminar is designed primarily for graduate students who are interested in exploring foreign policy and domestic politics from the international political economy (IPE) perspective. It has two parts: Reading of seminal works and research presentation by students. (Note: Working language is English.)

3. 学習の到達目標：

This seminar will help students (i) to deepen their understanding on theories of IPE and learn their strengths and weaknesses, and (ii) to develop their skills in research and presentation.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

In the part of reading, selected topics will include diplomacy, foreign policies, development aid, international relations, and comparative politics (See the reading list below). Students must give an oral presentation of your book/article reports. Every student will be assigned two or more reports, depending on the number of participants.

In the part of research presentation, students must present a draft of research proposal for master's or doctor's thesis.

Students will be required to participate in discussion each week.

Reading list:

<Transnational Relations>

- Agnieszka Sobocinska. 2014. *Visiting the Neighbours: Australians in Asia*, Univ. of New South Wales.
- Agnieszka Sobocinska. 2013. "Visiting the Neighbours: The Political Meanings of Australian Travel to Cold War Asia," *Australian Historical Studies*, 44:3, 382-404, DOI: 10.1080/1031461X.2013.817450

<Comparative Politics>

- Kathryn Sikkink. 1991. *Ideas and Institutions: Developmentalism In Brazil And Argentina*, Cornell Univ. Press.
- Christy Thornton. 2021. *Revolution in Development: Mexico and the Governance of the Global Economy*, Univ of California Press.

<Emerging Donors>

- Naim, Moises. (2007). "Rogue aid." *Foreign Policy*, March/April, 95–96.
- Woods, Ngaire. (2008). "Whose aid? Whose influence? China, emerging donors and the silent revolution in development assistance." *International Affairs*, 84(6), 1205–1221.
- Manning, Richard. (2006). Will 'emerging donors' change the face of international co-operation? *Development Policy Review*, 24(4), 371–385.
- Chithra Purushothaman. 2021. *Emerging Powers, Development Cooperation and South-South Relations*, Palgrave Macmillan.
- Sato, Jin, and Yasutami Shimomura, eds., 2012. *The Rise of Asian Donors: Japan's Impact on the Evolution of Emerging Donors*, Routledge.

<South-South Cooperation>

- Guillermo Santander and José Antonio Alonso. 2018. "Perceptions, identities and interests in South–South cooperation: the cases of Chile, Venezuela and Brazil," *Third World Quarterly*, 39(10), 1923–1940.
- Kevin Gray & Barry K. Gills (2016) "South–South cooperation and the rise of the Global South," *Third World Quarterly*, 37:4, 557-574.

・ Others

5. 成績評価方法：

Book report (40%), research proposal (40%) , contribution to discussion (20%).

6. 教科書および参考書：

No additional reading assignment.

7. 授業時間外学習：

Students will be required to prepare their book/article report and research proposal.

8. その他：

科目名：	国際政治経済論演習 B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	岡部 恭宜	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	英語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

Class code: ouutted

Link to Meet: <https://meet.google.com/dgv-tbyf-tdf>

実施方法： Hybrid (Face-to-face and online). Students are required to register for the course at Google Classroom, through which class information will be provided.

1. 授業題目：

Seminar on International Political Economy B/II

2. 授業の目的と概要：

This seminar is a continuation of the Seminar of IPE A/I of the first semester. However, the participation in the first semester is not required of those who are interested in this class. Any students are welcome.

It is designed primarily for graduate students who are interested in exploring foreign policy and domestic politics from the international political economy (IPE) perspective. It has two parts: Reading of seminal works and research presentation by students. (Note: Working language is English.)

3. 学習の到達目標：

This seminar will help students (i) to deepen their understanding on theories of IPE and learn their strengths and weaknesses, and (ii) to develop their skills in research and presentation.

4. 授業の内容・方法と進度予定：

In the part of reading, selected topics will include diplomacy, foreign policies, development aid, international relations, and comparative politics (See the reading list below). Students must give an oral presentation of your book/article reports. Every student will be assigned two or more reports, depending on the number of participants.

In the part of research presentation, students must present a draft of research proposal for master's or doctor's thesis.

Students will be required to participate in discussion each week.

Reading list (examples):

<Transnational Relations>

- Agnieszka Sobocinska. 2014. Visiting the Neighbours: Australians in Asia, Univ. of New South Wales.
- Agnieszka Sobocinska. 2013. "Visiting the Neighbours: The Political Meanings of Australian Travel to Cold War Asia," Australian Historical Studies, 44:3, 382-404, DOI: 10.1080/1031461X.2013.817450

<Comparative Politics>

- Kathryn Sikkink. 1991. Ideas and Institutions: Developmentalism In Brazil And Argentina, Cornell Univ. Press.
- Christy Thornton. 2021. Revolution in Development: Mexico and the Governance of the Global Economy, Univ of California Press.

<Emerging Donors>

- Naim, Moises. (2007). "Rogue aid." Foreign Policy, March/April, 95–96.
- Woods, Ngaire. (2008). "Whose aid? Whose influence? China, emerging donors and the silent revolution in development assistance." International Affairs, 84(6), 1205–1221.
- Manning, Richard. (2006). Will 'emerging donors' change the face of international co-operation? Development Policy Review, 24(4), 371–385.
- Chithra Purushothaman. 2021. Emerging Powers, Development Cooperation and South-South Relations, Palgrave Macmillan.
- Sato, Jin, and Yasutami Shimomura, eds., 2012. The Rise of Asian Donors: Japan's Impact on the Evolution of Emerging Donors, Routledge.

<South-South Cooperation>

- Guillermo Santander and José Antonio Alonso. 2018. "Perceptions, identities and interests in South–South

cooperation: the cases of Chile, Venezuela and Brazil," *Third World Quarterly*, 39(10), 1923–1940.

• Kevin Gray & Barry K. Gills (2016) "South–South cooperation and the rise of the Global South," *Third World Quarterly*, 37:4, 557-574.

• Others

5. 成績評価方法 :

Book report (40%), research proposal (40%) , contribution to discussion (20%).

6. 教科書および参考書 :

No additional reading assignment.

7. 授業時間外学習 :

Students will be required to prepare their book/article report and research proposal.

8. その他 :

科目名：	中国商事法演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	WEN XI AOTONG	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

連絡は、wen@law.tohoku.ac.jp までお願いします。

実施方法： ハイブリッド方式（オンライン授業の場合、基本的にリアルタイムで実施します。また、クラスルームではなく、東北大学インターネットスクール（ISTU）を通じて Zoom 講義のリング、講義 ID 及びパスワードを通知します）。

1. 授業題目：

中国商事法

2. 授業の目的と概要：

商法分野において、最近中国の最高裁が下した重要な判決を読み、中国における最新の商事法動向を把握すると同時に、紛争の背後にある法律問題を分析・議論し、さらに日本法との比較を通じて、法律に対する理解を深めることを目的とする。

In this course, based on case study, students can keep track of recent trends in the filed of commercial law and learn the difference between Japanese and Chinese law systems.

3. 学習の到達目標：

学生には、本演習での学修を通じて、中国商事法の最新動向を把握すると同時に、紛争の本質を捉える能力を養い、比較法的な研究方法を身に付けることを期待する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

毎回の報告者を決めて、それぞれ担当する裁判決を対象に報告してもらい、全員で議論する方法で授業を進める予定である。

判例は、各参加者が自ら関心するものを選ぶことができます。

第1回 インTRODakション

第2回 判例報告

第3回 判例報告

第4回 判例報告

第5回 判例報告

第6回 判例報告

第7回 判例報告

第8回 判例報告

第9回 判例報告

第10回 判例報告

第11回 判例報告

第12回 判例報告

第13回 判例報告

第14回 判例報告

第15回 判例報告

5. 成績評価方法：

報告の内容及び議論への貢献度によります

6. 教科書および参考書：

最高裁判決は、中国裁判文書データベース <https://wenshu.court.gov.cn> からダウンロードして使います。そのほか、判決に関連する新聞や法律法規を必要に応じて提供します。

7. 授業時間外学習：

すべての参加者は、演習の前に判決文を読み、関連条文を確認します。報告者に関しては、報告するための原稿とレジュメを用意することが求められます。

8. その他：

中国語を読む力が求められます。

科目名：	法律フランス語演習	科目区分：	大学院科目
担当教員：	榎橋 明香	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

授業に関する連絡は、Google Classroom（クラスコード：32bqzaz）を通じて行う予定である。

実施方法： 対面又はオンライン（リアルタイム）

1. 授業題目：

法律フランス語演習

2. 授業の目的と概要：

フランス法に関する基礎的な知識を身につけるため、フランス法の法学入門の教科書を講読する。

To acquire basic knowledge about French law, we read an introductory textbook.

3. 学習の到達目標：

今後フランス法を自分自身で研究していくために必要な基礎的な知識や語彙を獲得する。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

この授業は、オンライン（リアルタイム型）で行い、授業の連絡及び講義資料の配信は Google Classroom を利用する。ただし、必要とされる新型コロナウイルス感染症対策の状況に応じ、教室での対面形式とする可能性もある。決定次第、Google Classroom のストリームによって通知する。

民法及び比較法を専門とするモンプリエ大学のレミー・カブリヤック教授による『法学入門』を教科書として用いる。講義は、受講者が教科書の指定された部分について予習していることを前提に、担当教員と受講者との質疑応答により進行する。現段階では、以下のようなテーマを予定している。

- 1 法の性質，役割及び基礎
- 2 法の改正，適用及び調査
- 3 民法の進化と現在の状況
- 4 法における分類
- 5 法律の階層
- 6 法律の場所的・時間的適用範囲
- 7 判例と慣習
- 8 法の一般原則，学説
- 9 法源の動揺と対策
- 10 立証
- 11 審級
- 12 訴訟手続の展開
- 13 法曹
- 14 （調整日 第1回から第13回の進行に遅れがなかった場合はテーマ講義を行う）
- 15 総括と期末試験

5. 成績評価方法：

授業への参加態度を 50%，期末試験の結果を 50%として評価する。

6. 教科書および参考書：

R.CABRILLAC, Introduction générale au droit, Dalloz, 14e édition.

なお，必要な条文は適宜配布する。

7. 授業時間外学習：

予習としては，毎回指定の教科書を 20 頁程度読み，概要を理解する必要がある（教科書は分かりやすい表現で書かれているので，それほど心配する必要はない）。復習としては，授業での解説を念頭に置き，教科書をもう一度正確に読むことが望ましい。

8. その他：

参加を希望する者は，メール又は GoogleClassroom を通じて担当教員に事前に必ず連絡を行ってほしい（参加者の有無を把握するとともに，第1回の資料を事前に配布するためである）。

科目名：	商法演習 B	科目区分：	大学院科目
担当教員：	石川 真衣	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

クラスコード：vh2drmh 質問等の連絡方法は、Google Classroom で案内する。

実施方法： 対面（状況に応じてオンライン（リアルタイム）にする可能性がある）

1. 授業題目：

フランス法文献購読

2. 授業の目的と概要：

フランス商法に関する文献購読を通じて、フランス私法及び商法の特徴、そしてわが国との共通点や違いについて理解することを目的とする。

This seminar aims to provide students a deeper understanding of French private law and commercial law through careful perusal of materials, as well as to acquire the basics of comparative legal research.

3. 学習の到達目標：

フランス私法・商法についての基本的知識を習得するとともに、わが国の商法の各種論点に関する理解を深めるための比較法的視点を得る。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

実施方法と購読する文献については、受講者の希望等も踏まえて、初回の演習時に決定する。各回の報告担当者が作成したフランス語文献の和訳を受講者全員で検討する。適宜受講者と討論も行う予定である。

第1回 ガイダンス

第2～15回 文献購読・和訳の検討

5. 成績評価方法：

平常点により評価する。

6. 教科書および参考書：

受講者と相談のうえ、決定する。

7. 授業時間外学習：

予め文献の指定された範囲を精読したうえで各回の授業に臨むこと。

8. その他：

フランス語の読解力を一定以上有することが必要となる。

科目名： 多様性社会と法演習 久保野 恵美	科目区分： 大学院科目
担当教員： 子.今津 綾 開講期： 2022 子.嵩 さやか	単位数： 2
授業形態： 演習 使用言語： 日本語	週間授業回数： 1回毎週
配当学年： - 対象学年： -	実務・実践的授業：

連絡方法とクラスコード：

Google Classroom (クラスコード kiolv4g)

実施方法： 原則として対面で実施するが、新型コロナウイルス感染症の状況等によりオンライン (リアルタイム) で実施する場合がある。

1. 授業題目：

多様性社会と法演習

2. 授業の目的と概要：

現代社会は、抽象化一般化された個人像に基づき、個人が平等に尊重され、権利を保障される制度を達成したが、他方では、ジェンダー、年齢、心身の状況、人種等において多様性をもった人間が参加する政治や社会の関係の現実との関係で、差別、排除、過介入等の問題を生じさせている。本演習では、以上のような状況をふまえて解決を迫られる種々の問題や関連する判例等を検討し、議論することで、法曹実務家や政策立案者として必要となる社会の多様性に対する問題意識を養い、又は法学研究における人間像の深化を図ることを目的とする。

3. 学習の到達目標：

現代社会が抱える様々な局面における多様性に関し、法学が抱える理論的課題を把握し、その包括的理解を得ることで、伝統的な法学では見えてこなかった問題群への視座を提示することができる。また、多様性に関わる現代社会の諸問題について、理論及び実務の両方の観点を有し、実践的に取り組むことのできる法律及び政策の専門職たるべき基礎的な能力を備える。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

第1回にて本演習に関するガイダンスを行った上で、第2回以降は本演習のテーマに関する理論的問題に関するトピック、具体的法制度、裁判例を取り上げる。各回では受講者の中から担当を決めて報告をしてもらい、受講者間、受講者と教員間で法的議論を行う方法により、多様性ある社会における法学の意義と課題を明らかにしていく。

本演習は、対面実施の予定であるが、新型コロナウイルス感染症の状況によりオンラインに変更する場合がある。また、Google Classroom によりレジュメ等を配布する場合もある。

第1回 ガイダンス (分担決定等)

第2回 多様性社会における実務

第3回 ジェンダーと法 (1) ー総論

第4回 ジェンダーと法 (2) ー法における性別

第5回 ジェンダーと法 (3) ー家族・親密圏

第6回 ジェンダーと法 (4) ー同性カップル

第7回 ジェンダーと法 (5) ー男女平等と社会保障

第8回 ジェンダーと法 (6) ー離死別と社会保障

第9回 ジェンダー・子どもと法 (1) ー婚費や養育費の算定、財産分与のあり方

第10回 ジェンダー・子どもと法 (2) ー子の監護権をめぐる争い

第11回 子どもと法ー児童保護・児童虐待防止

第12回 障害と法 (1) ー高齢障害者と社会福祉制度の適用

第13回 障害と法 (2) ー精神障害者の不法行為責任と社会福祉制度

第14回 多様性と法ー損害賠償における逸失利益の算定

第15回 多様性と法ー総括

※なお、各回の内容・順番は変更する場合がある。また、外部講師が担当する回がある。

5. 成績評価方法：

第2～15回で取り上げたテーマに関わるレポート (70%) 及び平常点 (報告・討論参加状況) (30%) により評価する。

6. 教科書および参考書：

<教科書・教材>

テーマに関連する文献、対象判例等は適宜授業中に案内する。

<参考書等>

辻村みよ子『憲法と家族』日本加除出版（2016年）、同『〔概説〕ジェンダーと法〔第2版〕』信山社（2016年）、大村敦志・横田光平・久保野恵美子『子ども法』有斐閣（2015年）、菊池馨実・中川純・川島聡編著『障害法』成文堂（2015年）

7. 授業時間外学習：

詳細は、Google Classroom 上または授業中に指示する。

8. その他：

- ・受講希望者が22名を超える場合には、選抜を行う予定である。
- ・本授業は公共政策大学院、法科大学院との合併により、片平キャンパス・エクステンション棟の教室で開講する。
- ・令和3年度までに「子どもと法演習」の単位を修得した場合には、本演習は履修できません。

科目名：	外国法文献研究 C (英米法)	科目区分：	大学院科目
担当教員：	北島 周作	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

lgoqkvo

実施方法： 初回はオンライン（リアルタイム型）で実施する。その後は、対面型を原則とする予定であるが、最終的には、参加者と相談し、その状況を考慮して決定する。詳細は GoogleClassroom を参照されたい。

1. 授業題目：

外国法文献研究 C (英米法)

2. 授業の目的と概要：

イギリスあるいはオーストラリアにおける公法分野の基礎的な文献の講読を通して、それらの国の公法システムの基本的な知識と英語による法学文献の読解力を身に付ける。

This seminar is designed to provide students with a basic knowledge of the public law system in England or Australia through reading the literature.

3. 学習の到達目標：

講読文献の対象国の公法システムに関する基本的な知識と英語による法学文献の読解力身に付ける。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

毎回担当を決めて文献を講読する。

対象とする文献は参加者との相談により決定する。

第1回 イン트로ダクション

第2回～15回 文献講読

5. 成績評価方法：

毎回の出席を前提とし、各回の講読の状況により判断する。

6. 教科書および参考書：

初回に相談して決定する。

7. 授業時間外学習：

毎回、指定された部分を読んでくること。

8. その他：

科目名：	外国法文献研究 D (英米法)	科目区分：	大学院科目
担当教員：	北島 周作	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	2回隔週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

j7wwcm3

実施方法： 初回はオンライン（リアルタイム型）で実施する。その後は、対面型を原則とする予定であるが、最終的には、参加者と相談し、その状況を考慮して決定する。詳細は GoogleClassroom を参照されたい。

1. 授業題目：

外国法文献研究 C (英米法)

2. 授業の目的と概要：

文献の講読を通じて、イギリスあるいはオーストラリアにおける公法上の論点に関する理解を深める。

The aim of this seminar is to develop an understanding of specific issues in English or Australian public law through the reading of literature.

3. 学習の到達目標：

公法上の論点に関する理解を深める。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

毎回担当を決めて文献を講読する。

対象とする文献は参加者との相談により決定する。

第1回 イン트로ダクション

第2回～15回 文献講読

5. 成績評価方法：

毎回の出席を前提とし、各回の講読の状況により判断する。

6. 教科書および参考書：

初回に相談して決定する。

7. 授業時間外学習：

毎回、指定された部分を読んでくること。

8. その他：

科目名：	外国法文献研究 C (フランス法)	科目区分：	大学院科目
担当教員：	嵩 さやか	開講期：	2022
授業形態：	演習	使用言語：	日本語
配当学年：	-	対象学年：	-
		単位数：	2
		週間授業回数：	1回毎週
		実務・実践的授業：	

連絡方法とクラスコード：

質問は、授業後に受け付けるほか、随時 Google Classroom (クラスコード：qn3xwex) 上で受け付ける。

実施方法： 原則として、対面で実施するが、新型コロナウイルス感染症の状況によりオンライン (リアルタイム) に切り替える場合がある。

1. 授業題目：

外国法文献研究 C (フランス法)

2. 授業の目的と概要：

この授業は、フランス法に関心を持つ研究大学院の学生を対象に、法についてフランス語で書かれた文献を読むことを通じて、フランスの法・文化・社会に対する理解を深めることを目的とする。さらに、フランスを鏡として、日本法の理解を深めることも、重要な目的である。

3. 学習の到達目標：

フランス語の法律文献を正確に訳すことができ、さらにその内容について理解し検討することができる。

4. 授業の内容・方法と進度予定：

1. 授業内容

フランス法に関するフランス語の文献を受講者とともに読解し、日本法と比較しながらフランス法制の特徴等を検討する。

2. 教育方法

各受講者が、毎回、教材の指定された部分の翻訳を提出し、他の受講者と担当教員とその内容について検討・質疑を行う形式で進める。なお、必要に応じてフランスの法律等を参照できるよう、PC 等の持参が望ましい。本演習は、対面実施の予定であるが、新型コロナウイルス感染症の状況によりオンラインに変更する可能性がある。レジュメ等の配布は、Google Classroom (クラスコード：qn3xwex) にて行う。

3. 予定

第 1 回 ガイダンス・教材の説明

第 2 回 ”L'articulation entre la solidarité familiale et la solidarité collective”第 2 部第 1 章イントロダクションの読解・質疑応答

第 3 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 1 節の一部の読解・質疑応答

第 4 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 1 節の一部の読解・質疑応答

第 5 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 1 節の一部の読解・質疑応答

第 6 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 1 節の一部の読解・質疑応答

第 7 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 1 節の一部の読解・質疑応答・日本法との比較

第 8 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 2 節の一部の読解・質疑応答

第 9 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 2 節の一部の読解・質疑応答

第 10 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 2 節の一部の読解・質疑応答

第 11 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 2 節の一部の読解・質疑応答

第 12 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 2 節の一部の読解・質疑応答

第 13 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 2 節の一部の読解・質疑応答・ゼミレポートの作成方法指導

第 14 回 上記資料 第 2 部第 1 章第 2 節の一部の読解・質疑応答・日本法との比較

第 15 回 上記資料 第 2 部第 1 章の総括と質疑応答・日本法との比較

※教材読解の進捗は受講者の人数・フランス語能力等によって変動する。

各回の授業内容についてはその都度具体的に周知する。

5. 成績評価方法：

毎回の授業における翻訳および質疑応答、授業への取り組みの状況を評価対象とする「平常点」(50%) と、「レポート試験」(50%) による。なお、成績評価に際しては、上記の<学修の到達目標>が指標の 1 つとなる。

6. 教科書および参考書：

Floriane Maisonnasse, L'articulation entre la solidarité familiale et la solidarité collective, LGDJ, 2016 の一部。

7. 授業時間外学習：

次回分として指定された箇所の邦語訳を作成する。その他の詳細は、授業中に指示する。

8. その他：

質問は適宜、授業後に受け付ける。

本授業は法科大学院との合併により開講する。